岩波文庫

4636—4637

恩讐の彼方に
忠直卿行状記

他八篇

菊池寛作

恩讐の彼方に
忠直卿行状記 ★★

九州耶馬渓青の洞門の伝説を小説化した“恩讐の彼方に”封建制下の人間の悲劇を描いた“忠直卿行状記”作者初期の歴史物の傑作十篇

緑 197

岩 波 文 庫

4636—4637

恩讐の彼方に
忠直卿行状記

他 八 篇

菊池 寛 作

岩 波 書 店

目次

三浦右衛門の最後

駿河の府中から遠からぬ田舍である。天正の末年で酷い盛夏の一日であつた。もう十日も前から同じやうな日ばかりが續いてゐた。その炎天の下を、玆から四五町ばかり彼方にある街道を朝から、織田勢が幾人も〳〵續いて通る、みんな盛に汗をかいて居る、その汗にほこりが附いて黑い顔が更に黑ずんで見える。然しかう物騷な世の中ではあるが、田の中に居て雜草を拔いたり、水車を踏んだりして居る百姓は割合に落着いて居る。一は見渡す限り掠奪に逢ひさうな農作物は一つもないからである。どんなに織田勢が汚くつてもまだ花が咲いて居るばかりの稻を刈り取りはしまいと云ふ安心があるのと、二つには戰さわぎに馴れ切つて英國の商人達のやうにbusiness as usual と悟りすまして居たのであつた。

府中の館が陷ちたといふ噂が晝頃傳つて來た。日中であるからハッキリは聞えなかつたが、戰のさけびが聞えたり、火事の煙がほのかに見えた。お館が亡びるのだと百姓は思つた。自分の家の上に掩ひ覆ぶさつて居た大木の倒れたやうに明るくなつたやうな氣持もするし、何だか殘り惜しいやうな氣持もした。然し織田になつても武田になつても、氏元ほどの誅求はやるまいと皆が高をくゝつて居るので、今川氏の盛衰を思ふよりも畔に植ゑた枝豆の出來榮を氣にして居た。その田の中には幅半間位の道がある。道に添ふて小さい溝が流れて居て底は一杯の泥でこの暑さでブク〳〵と泥が幾度も湧き上つた。泥鰌が居る。ゐもりが居る。素裸體の子供が、五六人も集つてガヤ〳〵云つて居る、夫は草を罠にしてゐもりを釣つて居るのである。不氣味な朱色をしてゐる小さい動物は幾つも溝の中から釣り上げられては土の上に投げ付けられて居る。投げ付けられ

る度に、身體をもがく勢が弱くなつて、終ひにどんなに强く投げつけられてもビクともしなくなる。するとまた新しい草を引きぬいて新しい罠をこさへる。子供の群の前後には赤い腹を白い灰のやうな土の中に橫へた醜い小動物の死骸が幾つも〳〵ころがつて居る。

「高天神の城へはどう行くのぢや。」と云ふ鷹揚な聲がした。子供は皆あわてたやうな顏をして、その聲の主人公を見た。夫は十七ばかりの少年であつた。前髮を二つに分けた下から美しい眸が光つてゐる。男らしさの裡に女らしさがあり、凜々しさの裡に狡猾らしさがあつた。肌に素絹の襦袢を着て綾の單衣を着て居る姿は、國持大名の小姓であることを語つて居る。見ればはいて居る白足袋はほこりで鼠色になつて居る。腿立を取つたために見えて居る右の腓に一寸ばかりの傷があつて血が絕えず流れて居る。

「高天神の城へはどう行くのぢや、敎へてたも。」と、やゝせき心になつて繰り返した。然し子供は皆ポカンとして居る。此頃の子供は義務敎育などで早熟されて居ないから、誰もハキ〳〵と物が云へない。知らねば知らぬと云へばいゝのだが、夫が却々云へない。皆ポカンとして居る。少年は三度問を重ねた。すると一番年かさの子供がやつと口を開いて、

「天神さんの事けえ。」と云ふた。この聲をきくと若衆は一寸でも足を止めて、聞いて見たのが馬鹿らしくなつて「たわけ者め！」と子供達に浴びせながら通り過ぎようとした。所が生憎一人の子供が、マゴ〳〵して少年の行く手を立ちふさいだので足蹴にした。其の子はヨロ〳〵よろめいて溝の中へ尻餅をついてワッと泣き出した。さう痛くもなかつたやうだし、裸體だから衣物の汚れた譯ではないのだから、そんなに大きく泣く必要はないのだが、可なり大きく泣いた。子

供達は憤然とした。此頃の子供は凡ての野蠻人に共通して居るやうに、言に怯にして行に勇なるものであつた。いざ喧嘩だとなると身構が違つて居る。蝎のやうに少年に飛びついた。少年はハツと身を變して腰の一刀を拔かうとした。此の意志は此場合、非常に適當であつたが、實現はせられなかつた。一人の子供が猛然として身を躍らし柄を握つた少年の手に思切り噛みついたからである。他の子供も最も適當な場所を攻撃したので少年は手もなく其處へ引き据ゑられてしまつた。子供達は專制者を倒した革命黨のやうに得意であつた。

少年は身をもがいて逃れようとした。然し子供の數は十人にも近い、而も各員が皆有機的に働いて居るので何うともする事が出來ない。

「奴にゐもりを喰はしてやろけ。」と一人の子供が思付を云つた。子供達は皆ニヤリと悪意のある笑顔を交した。が其處へ一人の老人が來たので少年はゐもりを喰ふ必要はなくなつた。老人を見ると子供は皆口々に聲を揃へて訴へた。「安阿彌を足蹴にしたで。」と云ふのである。老人は一瞥してこの少年が今川の落人であることを知つた。當代の今川家には多少恨があつた。然し何と云つても、先代の仁政に對する感謝が何處かに殘つて居る。その上に美しい少年で落人の身である。老人は當然子供に手籠になつて居るこの男に同情して、やにはに子供達を叱り飛ばした。之は自分の子供が他人と交渉を開いた時に理非曲直を問はず子供を叱り飛ばす今の親達の取る手段と同じである。少年は恥と憤との交じつた顏付きをして起き上つた。その時には子供達は復讐を怖れて十間も向うの丸葉柳の下へ集つて逃仕度をして居たが、村の若者が五六人ばかりその代りに少年を取圍んだ。一番前に出て少年の顏をジロ〳〵見て居るのは、彌惣次と云ふて落人狩を

事門にして居る男である。此男は戰爭があると云ふ噂を聞くと何時も村中から、また隣村から仲間を狩り蒐めて出かけて行つて、どさくさまぎれに掠奪をやつたり、落人に槍をつけたりした。今度も出かけて行く筈であつたのだが、一月ほど前に負傷をしたのが、癒えないので今でも左の手を釣つて居る。彼は先刻から少年の腰の物の値踏みをして居るのだ。夫は黄金作りの素破らしい品物である。彼は今迄二、三本の太刀を泥棒したが、作り丈でも金三、四十枚に當る代物は未だ曾て見たことがなかつたのである。

少年は、さう云ふ物騒な人間が直ぐ前に居ることは知らなかつた。彼は目から口惜し涙を二、三滴こぼしながら聲を顫はせて、

「館の三浦右衞門をよくも手籠に逢はせ居つた。」と云ふ致命的な獨言を言つた。

「おのしが右衞門か。」其處に居るものは一齊に口を開いた。夫ほど彼の名は聞えて居る。彼は今川家のカンカアだと云はれて居る。氏元が豪奢遊蕩の中心は彼だと云はれて居る。義元の時よりは二、三倍の誅求があるのも、皆彼の爲だと云はれて居る。義元恩顧の忠臣が續々と退轉したのも彼の爲だと云はれてゐる。今川家の心ある人々は彼の名を呪つて居る。彼の惡評は駿河一國の隅々に迄響いて居る。其の惡評を耳にしないのは恐く彼自身丈であつたかも知れない。實際右衞門には何の罪もないのだが、右衞門の寵幸と今川家の頽廢とが同時に起つたので、單純な世人は其間に因果關係があると思つたのである。實際彼は一の無邪氣な少年に過ぎない。彼は十三の時に京の西洞院に佗住居をして居た兩親の手から今川家へ兒小姓に召上げられたので、夫以來はたゞ主君や周圍からせられる事を受動的に甘受して居た丈で自分の意志を働かしては、何一つ

した事もないが、氏元の彼に對する寵幸があまりに極端なので、彼が巧みに主君を操つて居るやうに見えた丈である。

彌惣次は右衛門の名を聞いた時には之は待つて居たよい機會が來たと思つた。無下に剝ぎ取つては傍の者が承知しまいと先刻から手を出しかねて居たのであつた。彼は急に威丈高になつて「右衛門奴ならなぜ館のお供をせぬのぢや。」とのゝしつた。右衛門は之を聞いて顏色を變へた。實際彼は主君を捨てゝ逃げて來たのである。府中を落ちて二三里も行つた時彼等の一群を追かける織田家の甲冑が四、五町後の街道に光るのを見た時に彼は死を怖るゝ心より外の考慮は何もなかつた。彼は馬に乘ることは頗る不得手なので先刻から一行に屢々乘り遲れて居る。若し敵に追ひ付かれたら一番先きに片付けられるのは、自分でなければならぬと思ふと、今にも背中に敵の槍首が突き通りさうで、生きた心持とてはなかつたのである。彼は幾度も躊躇した後左手の林の中に馬を乘り入れると直ぐ馬を乘り放して、夫から遮二無二逃げたのである。彼はかう云ふ弱味があるので、グウとも云へなかつた。

「見せしめに剝いでしまへ。」と彌惣次が怒鳴つた。之は頗る不當な結論ではあるが、戰國では此の位な物言ひが先づ理窟のある方であつた。三、四人の若者は右衛門に飛びかゝつた。子供にさへ手籠めになるのだから今度は更に造作がなかつた。兎のやうに皮を剝がれた。彼の美しい肉體は六月の太陽の下に忽ち色が變つて行くほど白かつた。

「右衛門なら殺してもえゝ。」と彌惣次が怒鳴つた。此頃は强い者が弱い者を殺すのは當り前の事であつた。

「百姓を苦しめたのは其奴ぢや、一しめにしてしまへ。」と云つた。若者の一人は土にへたばつて居る右衞門の首を一寸締めて見た。右衞門は苦しがつて烈しくせきをした。その時老人はまたあはれを催した。

「命をとる迄もない、赦してやれ。」と云つた。若者にも餘り異存はなかつた。彌惣次は一歩前へ出て右の足をあげて右衞門の肩にかけながら、

「命が惜しい、命ばかりは助けて下されと云へ、云はずば赦すまいぞ。」と云つた。右衞門は口惜し涙をポロ〱とこぼした。若者はいかに若氣て居ても、武士ぢや程に勇に勇ましい捨身の言葉を吐くかと思つて居たが、右衞門は低い聲で、「命が惜しい、命ばかりは助けて下され。」と云つた。

「頭の下げやうが足りない。」と彌惣次はどなつた。

右衞門は土につくほど頭を下げた。先刻から再び集つて居た子供は一齊に嗤つた。

「さあ、はやう失せ居れ。」と二、三人に突き飛ばされて右衞門はよろ〱と立ち上つた。美しい顏を泣き腫しながらたゞ犢鼻褌だけを身に纏ふてトボ〱と夕日の下を西の方へ歩んで行つた。百姓共は皆この臆病者をあざ嗤つた。しかし裸體で歩くことが殊更に輕蔑の一原因となつたと思つてはいけない。此頃の少年は夏は大抵犢鼻褌一つで歩いたものであるから。

高天神の城へ右衞門の着いたのは、二日目の晩であつた。城將の天野刑部が三年前に今川氏に人質となつて居た時に右衞門は數々の好意を與へてやつた。ある時刑部は右衞門の前に兩手を

ついて此の御恩は生涯忘れぬと云ふた。右衛門はその言葉を信じて遙々高天神の城を賴つて來たのである。彼が城へ着いた時は無論裸體ではなかつた。彼は誰に合力を受けたのか、粗末ではあるが衣物を著て居た。刑部は此珍客の來たのを見て幾干か興味を起したらしい。夫に氏元の生死は尙不明である。もし北條と武田とが氏元に合力する事があつたならば駿河一國を取り返すのは何でもない。其場合には氏元の寵臣を助けた自分の位置は頗る有利になるだらうと考へた。右衛門も普通の人間が吐く位の僞はつくことが出來た。彼は亂軍の中で主人と別れ〲になつた不幸を初とし世を忍ぶ爲に物具を自分で捨てた話などを、言葉巧みにした。刑部は之を疑ふ材料もなかつたので一室に請じて萬一の場合後で苦情を云はれぬ位には歡待した。

　刑部は織田と今川との中間に位して居るので歐洲戰爭の希臘のやうに何方へも付かずにうまくやつて居たのである。三浦右衛門を養ひながら彼は手を廻して氏元の消息を探つた。所が氏元は織田勢に追ひ詰められて腹を切つて死んだと云ふ事が分つた。その報知の插話として氏元の寵を一身に集めた三浦右衛門は府中落城のその日に早くも主君を捨てゝ逐電したと云ふ事が添へられた。この報知を聞いて刑部の考へついた政策は頗る常識的であつた。右衛門を首にして織田氏に差し出して自分の二心のないことを知らせる事であつた。右衛門を殺すには主君に對する忘恩の罰を責めて夫を口實にすればいゝと思つた。

　右衛門は忽ちに縛り上げられた。その時代は縛り上げる力さへあれば理由は要らなかつたのである。右衛門は刑部の前に引き出された。刑部は戰爭を始める時の歐洲の文明國のやうに正義を一寸借りて來た。

「右衞門おのれは館を見捨てた覺があらう、不忠不義者の首を刎ねて館に手向けるのぢや。」

此位立派な理由は戰國時代の殺人に就ては稀有な事である。然し幾干理由が通つて居ても殺される者の苦しさは同じである。否理由があつて殺される方が、無法に殺されるよりも苦しい事がある。ともかく右衞門は殺されたくなかつた。彼は烈しく戰慄し始めた。二三日前に百姓に殺されかけた時には對手の方に幾干かの威嚇が加つて居たが、今日の宣告は眞實でまぎれもない實現性を帶びて居る。彼は何う考へても死ぬと云ふ事が嫌であつた。彼の過去の生活は安逸と愉悅とに充ちて居た。彼は此の世の中ほど面白い所が外にあるとは思へなかつたのである。彼は全身で死を嫌がつた。刑部が、

「太刀は惣八郎取れ。」と云つた時には聲を上げて泣き出した。刑部はあざ笑つて、

「右衞門命は惜しいか。」と云つた。

この返事を考へる必要は彼にはなかつた。前の日に彌惣次から敎はつて居るからである。

「命は惜しう厶る、命ばかりは助けて下され。」と云つた。刑部の家臣は人間の內にこんなに命を惜しがる者が居るのが不思議で堪らなかつた。彼等は勇ましく死ぬと云ふ事が一の見得であつた。だから小さい時から飛行家が曲乘を硏究するやうに、他人をアッと云はせる曲死の方法を硏究して居た。此頃の武士道の問題は如何にして生命を安價に捨てるかと云ふことであつた。彼等には生命以外のものは何でも貴かつたのである。生命は何と交換しても惜しくないものであつた。だから右衞門の哀訴は彼等にとつて、實に奇蹟であつた。彼等は一齊に笑つた。刑部はまた嘲笑つて見たくなつた。

「右衞門命は惜しいか、惜しければ手を突いて、惜しいと申せ。」と云つた。皆はまさか武士ともあるべきものが之ほど侮辱を受けてまで命乞ひをすまいと思つた。然し夫は思つた者の誤解である。右衞門は涙を流しながら手を突いて

「命は惜しうムる。」と云つた。また君臣の高い嘲弄の笑聲が響き渡つた。刑部の心の裡には右衞門の哀訴をきいて更に弄ばうと云ふ悪魔的な心が生じた。

「夫ほど命が惜しければ助けて得ささう。然し、唯は助けられぬ。命の代りに腕一本所望ぢや。夫れ承知とあらば助けてやらう。」と云つた。太刀取は右衞門の傍近く寄つて、

「殿のお言葉を聞いたか、否か應か返事せい。」と云つた。右衞門は返事の代りに縛られて居る左の手を動かした。

「ならば左の手を切れ。」と刑部が云つた。太刀取の刀が閃めくと右衞門の手は鈴ヶ森の舞臺で權八に切られた雲助の手のやうになつた。

「片手でも命は助かりたいか。」と刑部がまた聞いた。右衞門は恐ろしい苦悶を顔に現しながら肯いた。刑部の君臣はまたどつと笑つた。刑部はまた口を切つて、

「片手では安い、兩手を切つてなら助けてやらう。」と云つた。右衞門にも言葉の意味は分つたらしい。太刀取は「否か應か。」と聞いた。右衞門は僅に肯いた。太刀取の聲が再びかゝると彼の右の腕は血糊を引きながら三間ばかり向うに飛んだ。右衞門の姿は、我々にとつては可なり殘酷に思はれるが、戰國時代にはこの位な光景を見て憐憫を起す人間は一人も居なかつた。刑部はまた叫んだ。

「兩手でもまだ安いわ、右の足も所望ぢや、右の足を切つたなら命丈は助けよう。」と云つた。生きた埴輪のやうに血の中に坐らされて居る右衞門の顏は眞蒼になりながら泣き續けて居る。然し緊張した神經には刑部の言葉は分つたのであらう。彼は切れ〳〵に「命ばかりは助けて下されｏ」と云つた。刑部の君臣はまたどつとあざ嗤つて、この人間の最高にして至純なる欲求を侮辱した。太刀取は左の手で右衞門の身體を上へ持ち上げるやうにして右足を剪いだ。太刀が餘つて左足へ半分斬り込んだ。

「右衞門それでも命が助かりたいか。」と刑部が云つた。然しもう右衞門には聞えなかつたらしい。太刀取は右衞門の耳に口を寄せて、

「命が惜しいか。」と云つた。右衞門は口をモグ〳〵させた。其時、刑部は「それ」と目配せをした。太刀取は四度太刀を振り直してえいと首を刎ねた。首は砂の上を二、三尺ころ〳〵と轉げて、止まつた所で口をモグ〳〵させた。肺臟と離れて居なかつたらキット『命が惜しうムる』と云つたに違ひない。

戰國時代の文獻を讀むと攻城野戰英雄雲の如く、十八貫の鐵の棒を芋殼の如く振り廻す勇士や、敵將の首を引き拔く豪傑は澤山居るが、人間らしい人間を常に miss して居た。自分は、淺井了意の犬張子を讀んで三浦右衞門の最後を知つた時初めて "There is also a man" の感に堪へなかつた。

忠直卿行狀記

一

家康の本陣へ呼び附けられた忠直卿の家老達は、家康から一溜りもなく叱り飛ばされて散々の首尾であつた。

「今日井伊藤堂の勢が苦戰したを、越前の家中の者は晝寢でもして、知らざつたか、兩陣の後を詰めて城に迫らば大阪の落城は目前であつたに、大將は若年なり、汝等は日本一の臆病人ゆゑ、あたら戰を仕損じてしまうたわ。」と苦り切つて罵つたまゝ、家康はつと座を立つてしまつた。

國老の本多富正は、今日の合戰の手に合はなかつた事に就ては、多少の云ひ譯は持ち合はして行つたのだが、かう家康から高飛車に出られては、口を出す機會さへなかつた。

で、仕方がないと云ふよりも、這々の體で本陣を退つて、越前勢の陣所へ歸つて來たものゝ、主君の忠直卿に復命するのに、何う切り出してよいか、悉く當惑した。

越前少將忠直卿は、二十一になつたばかりの大將であつた。父の秀康卿が慶長十二年閏四月に薨ぜられた時、僅十三歲で、六十七萬石の大封を繼がれて以來、今迄此世の中に、自分の意志よりも、もつと强力な意志が存在して居る事を、全く知らない大將であつた。

生れたまゝの、自分の意志――と云ふよりも我意を、高山の頂に生ひたつた杉の樹のやうに矗矗と冲らして居る大將であつた。今度の出陣の布令が越前家に達した時も、家老達は腫れ物に觸るやうに恐る／＼御前にまかり出でて、

「御所樣から、大阪表へ御出陣あるやう御懇篤な御依賴の書狀が到着致しました。」と、言上

した。家老達は、今迄にその幼主の意志を、絶對のものにする癖が附いて居た。夫が、今日は家康の叱責を是非とも忠直卿の耳に入れねばならない。生れて以來叱られるなどと云ふ感情を、夢にも經驗した事のない主君に對して、大御所の烈しい叱責がどんな效果を及ぼすかを、彼等は恟々として考へねばならなかつた。

彼等が歸つて來たと聞くと、忠直卿は直ぐ彼等を呼び出した。

「お祖父樣は何と仰せられた。」定めし、所勞のお言葉をでも賜はつたであらう。」と、忠直卿は機嫌よく微笑をさへ含んで訊いた。さう訊かれると、家老達は今更の如く狼狽した。が、漸く覺悟の臍を決めたと見えて、その中の一人は恐る〳〵、

「いかいお思召違ひに御座ります。大御所樣には、今日越前勢が合戰の手に合はざつたを、お怨に御座ります。」と、云つたまゝ、色を易へて平伏した。

人から非難され叱責されると云ふ感情を、少しも經驗した事のない忠直卿は、その感情に對して何等の抵抗力も、節制力も持つて居なかつた。

「えい！何と云ふ仰せだ。この忠直が御先を所望してあつたを、お許されもせいで、左樣な無禮を仰せらるゝ。所詮は、忠直に死ね！と云ふお祖父樣の謎ぢや。其方達も死ね！我も死ぬ！明日の戰には、主從擧つて鋒鏑に血を注ぎ、城下に尸を晒すばかりぢや。軍兵にも、さう傳へて覺悟致させよ。」と叫んだ忠直卿は膝に置いて居た兩手をぶる〳〵と顫はせたかと思ふと、何うにも堪らないやうに、小姓の持つて居た長光の佩刀を拔き放つて、家老達の面前へ突き附けながら、

「見い！此長光で秀頼公のお首をいたゞいて、お祖父樣の顏に突き附けて見せるぞ。」と、云ふかと思ふと、その太刀を二三度、坐りながら打ち振つた。まだ二十を出たばかりの忠直卿は、時々かうした狂的に近い發作に囚はれるのであつた。

家老達も、御父君秀康卿以來の癇癪を知つて居る爲に、たゞ疾風の過ぎるのを待つやうに耳を塞いで俯伏して居るばかりであつた。

元和元年五月七日の朝は、數日來の陰天名殘なく晴れて、天色殊の外和淸であつた。

大阪の落城は、もう時間の問題であつた。後藤又兵衞、木村長門、薄田隼人正等、名ある大將は、六日の戰に多くは覺悟の討死を遂げてしまつて、たゞ眞田左衞門や長曾我部盛親や、毛利豐前守などが、最後の一戰を待つて居るばかりであつた。

將軍秀忠は、此日寅の刻に出馬した。松平筑前守利常、加藤左馬助嘉明、黑田甲斐守長政を第一の先手として旗を岡山の方へ進めた。

家康は卯の刻、輿にて進發した。藤堂高虎が來合はせて、

「今日は御具足を召さるべきに。」と、云ふと家康は例の狡さうな微笑を洩しながら、

「大阪の小伜を討つに、具足は不用ぢやわ。」と云つて、白袷に茶色の羽織を着、下結りの袴を穿いて手には拂子を持つて絶えず群がつて來る飛蠅を拂つて居た。内藤掃部頭正成、植村出羽守家政、板倉内膳正重正等近臣三十人ばかり輿に從つて進んだ。

本多佐渡守正純は、家康と寸も違はぬ服裝で、山輿に乘つて家康の後に、直ぐ引き添うた。

見ると、岡山口から天王寺口にかけて、十五萬に餘る惣軍は、旗差物を初夏の風に翻し、兜の前立物を日に輝し、隊伍を整へ陣を堅めて、攻撃の令の下るのを今や遲しと待つて居た。

が、攻撃の令は容易に下らないのみか、御所の使番が三騎、白馬を飛ばして、諸陣の間を駈け廻りながら、

「義直賴宣の兩卿を、とりかはせ給ふに依り、先手軍を始める事暫く延引し、馬をば一二町も退け、人々馬より下り、鎗を手にし重ねての命を待つべし」と、布令渡つた。

家康も、今日を最後の手合せと見て、愛子の義直賴宣の二卿に兜首の一つでも取らせてやりたいと云ふ心があつたのだらう。が、此布令を聞いた氣早の水野勝成は、使番を尻目にかけながら、

「はや巳の刻に及び候、茶臼山の敵陣次第にかさみ見えて候、速に戰を取結びて然るべしと大御所に傳へよ。」と怒鳴つた。が、此二人の使番が引取つたかと思ふと、再び四騎の使番が惣軍の間を縱橫に飛び違つて、

「方々、合戰をとりかくべからず、閑に重ねての令を待つべし。」と、ふれ渡つた。

併し、昨夜の昂奮を持ち續けて、殆ど不眠の有樣で、今日の手合せを待つて居たわが越前少將忠直卿は、かゝる布令を聞かばこそ、家老吉田修理に眞先かけさせ、國老の兩本多を初、三萬に近い大軍を、十六段に分け、加賀勢の備へたる眞中を駈け拔け、加賀勢の怒り止むるに答へず、無二無三に天王寺の方、茶臼山の前迄おし詰め、此地の先手本多出雲守忠朝の備より少し左に、鶴翼に陣を張つた。

此時初めて、將軍から、

「城兵は寄手を引き寄せて、夜を待つ樣に見え候、早く戰ひを令すべし。」と、云ふ軍令が諸陣の間にふれ渡された。

が、忠直卿は軍令の出づるのを、待つては居なかつた。本多忠朝の先手が、二三發敵にさぐりの鐵砲を放つと等しく越前勢忽ち七八百挺の鐵砲を一度に打ち掛け、立ち籠めた烟の中を潛つて、十六段の軍勢林の動くが如く一同茶臼山に打つてかゝつた。

靑屋口から茶臼山にかけての軍勢は、眞田左衞門尉幸村父子、少し南に伊木七郎右衞門遠雄、渡邊內藏助糺、大谷大學吉胤等が堅めて、惣勢六千を僅かに出て居るに過ぎなかつた。

殊に越前勢は目に餘る大軍なり、大將忠直卿は今日を必死の覺悟と見えて、馬上に軍配を捨てゝ大身の槍を扱きながら、家臣の止むるを聞かず、先へ〱と馬を進められた。

大將が、此有樣であるから、軍兵悉く奮ひ立つて火水になれと戰つたから、越前勢の向ふ所、敵勢草木の如く靡き伏して、本多伊豫守忠昌が、城中にて擊劍の名を得たる、念流左太夫を討ち取つたを初とし、靑木新兵衞、乙部九郎兵衞、萩田主馬、豐島主膳等功名する者數多にて、茶臼山より庚申堂に備へたる眞田勢を一氣に斬り崩し、左衞門尉幸村をば西尾仁左衞門討ち取り、御宿越前をば野本右近討ち取り、逃ぐる城兵の後を慕うて、仙波口より黑門へ押入り旗を立て、城內所々に火を放つた。

敵の首を取る三千六百五十二級、此日の功名忠直卿の右に出づるはなかつた。

忠直卿は茶臼山に駒を立てゝ居たが、越前勢の旗差物が潮のやうに濠を塞ぎ、曲輪に溢れ、寄手の軍勢から一際銳角を作つて、大阪城の中へ楔の如く喰ひ入つて行くのを見ると、多愛もない

兒童のやうに鞍壺に躍り上つて欣んだ。

先手の者が馳せ歸つて、

「青木新兵衞大阪城の一番乘仕つて候。」と、注進に及ぶと、忠直卿は相好を崩されながら、

「新兵衞の武功第一ぢや――五千石の加增ぢやと早々傳へよ。」と、勇み立たうとする乘馬を乘り靜めながら狂氣の如くに叫んだ。

武將として何と云ふ光榮であらう。寄せ手をあれ程に駈け惱ました左衞門尉の首を揚ぐるさへあるに、諸家の軍勢に先だつて一番乘りの大功を我軍中に收むるとは、何と云ふ光榮であらうと、忠直卿は思つた。

忠直卿は家臣等の奇蹟のやうな働きを思ふと、夫が凡て自分の力、自分の意志の反映であるやうに思はれた。昨日祖父の家康に依つて彼の自尊心に蒙らされた傷が、拭ひ去られた如く消失したばかりでなく、忠直卿の自尊心は前よりも、數倍の强さと烈しさを加へた。

大阪城の寄手に加つて居る百に近い大名の中、功名自分に及ぶ者は一人もないと思ふと、忠直卿は自分の身體が輝くかと思ふばかりに、豐滿な心持になつて居た。が、夫も決して無理ではない、驍勇無双の秀康卿の子と生れ、德川の家には嫡々の自分であると思ふと、今日の武勳の如きは當然過ぎる程、當然のやうに思はれて、忠直卿は得々たる感情が心の裡に洶湧するのを制し兼ねた。

「お祖父樣は此忠直を見損うて、おはしたのぢや。御本陣に見參して何と仰せられるか聽かう。」と、思ひ附くと、忠直卿は岡山口へ本陣を進めて居た家康の膝下に急いだのである。

家康は牀几に倚つて、諸大名の祝儀を受けて居たが、忠直卿が着到すると、わざ〳〵牀几を離れ、手を取つて引き寄せながら、

「天晴仕出かした。今日の一番功ありてこそ誠にわが孫ぢやぞ。御身の武勇唐の樊噲にも右わ勝りに見ゆるぞ、まことに日本樊噲とは御身の事ぢや。」と、向ふ様に賞め立てた。

一本氣な忠直卿は、かう賞められると、涙が出るほど嬉しかつた。彼は同じ人から、昨日叱責された恨みなどは、もう微塵も殘つて居なかつた。

彼はその夜、自分の陣所へ歸つて來ると、家臣を蒐めて大酒宴を催した。自分が何者よりも强く、誰人よりも勝つて、祖父家康の賞め言葉の『日本樊噲』と云ふ言葉が、まだ物足りぬやうにさへ思はれ出した。

彼は、大阪城が全く暮れてしまつた空に、まだ所々眞紅に燃え盛つて居るのを見ながら、夫を今日の自分の大功の表章として享樂しながら、頻に大杯を重ねるのであつた。

得意な上づつた感情の外には、忠直卿の心には何物も殘つて居なかつた。

超えて翌月の五日に城攻めに加はつた諸侯が、京の二條城に群參した時に家康は忠直卿の手を取りながら、

「御身が父秀康世にありしほどは、よく我に忠孝を盡して呉れたるわ、汝は又此度諸軍に優れし軍忠を現したること、滿足の至りぢや。之に依つて感狀を授けんと思へど、家門の中なれば夫にも及ぶまい。わが本統のあらん限り越前の家また磐石の如く安泰ぢや。」と云ひながら、祕藏の初花の茶入を忠直卿に與へた。忠直卿は此上なき面目を施して、諸大名の列座の中に自分の身

の燦として光を放つ如く覺えた。彼は天下に缺くる物もないやうな足り充ちた感情が、胸の裡にムツ〳〵と溢れて來るのを覺えた。元より彼の意志が何等の制限を蒙らず、彼の感情が常に豐滿して居る事は、決して今に始まつた事ではなかつた。幼年時代からも彼の意志と感情とは、外部からは何等の抑制も被らず、思ふ儘に伸び思ふ儘に溢れて居たのであつた。彼は今迄如何なる事に與つても人に劣り、人に負けたと云ふ記憶を持つて居なかつた。幼年時代に破魔弓の的を競へば勝利者は必ず彼であつた。福井の城下へも京の公卿が蹴鞠の戯れを傳へて、夫が城中にも屢々行はれた時、最も巧みに蹴る者は彼であつた。圍碁將棋雙六と云ふもてあそびものに於ても、彼は大抵の場合勝者であつた。元より弓馬槍劍と云つたやうな、武士に必須な技術に於いては彼の技倆は忽ちに上達して、最初同格であつた近習達をグン〳〵追ひ越して、家中に於いて其道に名譽の若武士達にも忽ちに打ち勝つ程の上達を示すのを常とした。

かうして、周圍の者に對する彼の優越感情は年と共に培はれて來た。そして、自分は家臣共からは全く質の違つた優良な人格者であると云ふ確信を、心の奧深く養つてしまつたのである。

が、忠直卿の心には、家中の人間の誰よりも立ち勝つて居ると云ふ確信はあるものゝ、今度大阪に出陣して以來は、功名を競ふ相手は、自分と同格な諸大名であるので、若しや自分が彼等の何人かに劣つては居はしまいか、殊に武將としては最も本質的な職務たる戰爭に於て、思はざる不覺を取りはしまいかと、少しく憂慮を懷かぬ譯には行かなかつた。果して五月六日の手合せには、遂に出陣の時刻を遲らせた爲に、思はぬ不覺を取つて、今迄懷いて居つた強い自信を危く搖がせようとしたのであつたが、同じ七日の城攻めの功名に依つて傷ついた自信は名殘りなく償は

れたばかりでなく、一番乘りの功を收めて、越前勢の武名惣軍を壓するに至つたのであるから、自分が家臣の誰人よりも秀れて居ると云ふ忠直卿の自信が、今ではもつと擴大して、自分は城攻めに備はつた六十諸侯の何人よりも秀れて居ると云ふ自信に移りかけて居た。大阪陣を通じて三千七百五十級の首級を擧げ、而も城將左衞門尉幸村の首級を擧げたものは、忠直卿の軍勢に相違なかつたのだ。

忠直卿は初花の茶入と、日本樊噲と云ふ美稱とを、自分が何人よりも秀れたる人間であると云ふ、證劵として心の裡に銘じた。

晴々とした心持であつた。そこに並んで居る大名小名百二十名は、悉く忠直卿に讃美の眸を向けて居る樣に思はれた。

彼は、今迄自分の臣下の何人よりも、自分が優秀な人間であることを誇りとして居た。が、比べて居る相手は悉く自分の臣下であることが物足らなかつた。然るに、今は天下の諸侯の何人よりも眞先に、大御所から手を取つて懽待を受けて居る。

自分には伯父に當る義直卿も賴宣卿も、何の功名をも擧げて居ない。まして同じく伯父に當る、越後侍從忠輝卿は七日の合戰の手に合はず散々の不首尾である。伊達、前田、黑田と云ふ聞えた大藩の勳功も越前家の功名の前には、月の前の螢火よりもまだ弱い。

かう考へると、忠直卿は家康の過ぐる日の叱責に依つて、一旦傷つけられようとした他人に對する優越感が、見事に恢復されたばかりでなく、一旦傷つけられた丈にその反動として、恢復された夫は以前のものよりも、もつと輝やかしい力强いものであつた。

かうして越前少將忠直卿は、天下第一人と云つたやうな誇を持しながら、その年八月都を辭して揚々とした心持で、居城越前の福井へ下つた。

二

越前北の庄の城の大廣間に、今銀燭は眩ゆいばかりに數限りもなく燃え旺(さか)つて居る。その白蠟が解けて流れて、蠟受けの上にうづ高く溜つて居るのを見れば、餘程酒宴の刻(とき)が移つて居るのであらう。

忠直卿は國に就かれて以來、晝間は家中の若武士(わかざむらひ)を蒐めて弓馬槍劍と云つたやうな武術の大仕合を催し、夜(よ)は彼等をその儘に引き止めて、一大無禮講の酒宴を開くのを常とした。

忠直卿は、祖父の家康から日本樊噲と媚びられた名が、心を溶(とろ)かすやうに嬉しくて堪らなかつた。彼は家中の若武士と槍を合はし、劍を交じへ、彼等を散々に打ち負かすことに依つて、自分の誇を養ふ日々の糧(かて)として居たのであつた。

今も、忠直卿を上座として、一段下つた廣間に大きい圓形を描いて居る若武士は、數多い家中の若者の中から選ばれた武藝の達者であつた。まだ前髮のある少年も打ち交じつて居たが、孰(いづれ)も筋骨逞ましく潑剌たる眸を持つて居る。

が、城主の忠直卿の風貌は、彼等よりも一段秀れて颯爽たるものであつた。稍肉落ちて瀟洒たる姿ではあるが、その炯々たる眸は殆ど怪しき迄に鋭い力を放つて、精悍の氣眉宇の間に溢れて

見えた。

忠直卿は、今微醉の廻りかけて居る眼を開いて、一座をズーッと見廻はされた。其處に居並んで居る百に餘る青年は、皆自分の意志に依つては、水火をも辭さない人々であることを思ふと、彼は心の内から、こみ上げて來る權力者に特有な誇を、感ぜずには居なかつた。が、彼の今宵の誇は夫丈には止まつて居なかつた。彼は武士としての實力に於ても、茲に蒐つて居る凡ての青年に打ち勝つたと云ふことが、彼の誇を二重のものにしてしまつた。

彼は今日も亦、家臣を集めて槍術の大仕合を催した。夫は家中から槍術に秀れた青年を蒐めて、夫を二組に別けた紅白の大仕合であつた。

そして、彼自ら紅軍に大將として出場したのである。仕合の形勢は始終紅軍の方が不利であつた。出る者も、出る者も、敵の爲にバタ〳〵と倒されて、紅軍の副將が倒れた時には、白軍には尙五人の不戰者があつた。

其時に、紅軍の大將たる忠直卿は、自ら三間柄の大身の槍をリユウ〳〵と扱いて勇氣凜然と出場した。洵に山の動くが如き勢であつた。白軍の戰士は見る〳〵裡に威壓された。最初に出た小姓頭の男は兼々忠直卿の猛勇を怖れて居る丈に、槍を合はすか合はさぬかに、早くも持つて居た槍を捲き落されて、脾腹の邊を突かれると、悶絶せんばかりに平たばつてしまつた。續く馬廻りの男と、お納戸役の男も一溜りもなく突き伏せられてしまつた。が、白軍の副將の大島左太夫と云ふ男は、指南番大島左膳の嫡子であつて、槍を取つては家中無双の名譽を持つて居た。

『殿のお勢も、左太夫にはちと難しからう』と、云ふ囁きが何處ともなく起つた。が、烈しく

七八合槍を合はせたかと見ると、左太夫は、したゝかに腰の邊を一突き突かれて、よろめく所をつけ入つた忠直卿の爲に、再び眞正面から胸の急所を突かれて居た。見物席に居た家中一統は、思ふ存分に喝采した。忠直卿は、稍息のはずまれるのを、制しながら靜かに、相手の大將の出るを待つた。心の裡は何時ものやうに、得意の絶頂であつた。

白軍の大將は小野田右近と云つた。十二の年から京に於ける槍術の名人權藤左門の門に入つて、二十の年には、師の左門にさへ突き勝つ程の修練を得て居た。が、忠直卿は何物をも怖れない。「えい！」と鋭く聲を掛けられると、猛然として突き掛つた。たゞ技術の力と云ふよりも、そこには六十七萬石の國主の勢さへ加はる如く見えた。二十合にも近い烈しい戰が續いたかと思ふと、右近は右の肩先に忠直卿の烈しい一突きを受けて、一間ばかり退くと、

「參りました」と、平伏してしまつた。

見物席の人々は、北の庄の城の崩るゝばかりに喝采した。忠直卿は得意の絶頂にあつた。上席に歸ると、彼は聲を揚げて、

「皆の者大儀ぢや、いで之から慰勞の酒宴を開くと致さうぞ」と、叫んだのであつた。

彼は近頃にない上機嫌であつた。酒宴の進むに連れ、寵臣は代る〴〵彼の前に進んだ。

「殿！ 大阪陣で矢石の間を往來せられまして以來は、また一段と御上達遊ばされましたな。我等如きはもはや殿のお相手は仕り兼ねます。」と申し上げた。大阪陣の話をさへすれば、忠直卿は多愛もなく機嫌がよかつた。

が、忠直卿もいたく醉つてしまつた。一座を見ると、正體もなく醉ひ潰れて居る者が、大分多

くなつて居る。管を捲く者もある、小聲で隆達節を唄つて居る者もある。酒宴の興は殆ど、盡きかけて居る。

忠直卿はふと奥殿に漲つて居る異性の事を思ひ出すと、男ばかりの酒宴が殺風景に思はれて來た。彼はつと立つて、

「皆の者許せ！」と云ひ捨てたまゝ座を立つた。逌に醉ひ潰れた者も、居住ひを正して平伏した。今迄眠りかけて居た小姓達は、ハッと目を覺して主君の後を追つた。

忠直卿が、奥殿へ續く長廊下へ出ると、冷い初秋の風が頰に快かつた。見ると、外は十日ばかりの薄月夜で、萩の花がほの白く咲きこぼれて居る邊から、蟲の聲さへ聞えて來る。

忠直卿は、庭へ下りて見たくなつた。奥殿からの迎ひの侍女達を歸して、小姓を一人連れたまま、庭に下り立つた。庭の面には、夜露がしつとりと降りて居る。微かな月光が城下の街を、玲瓏と澄み渡る夜の大氣の裡に、墨繪の如く浮ばせて居る。

忠直卿は久し振に、かうした靜寂の境に身を置くことを欣んだ。天地は寂然として靜である。たゞ彼が見捨てゝ來た城中の大廣間からは、雜然たる饗宴の叫びが洩れて來る。夫も彼が座を立つてからは、一段と酒席が擾れたと見え、吾妻拳を打つ掛聲までが交つて聞える。が、夫も餘程の間隔があるので、さう五月蠅くは耳に響いて來ない。

忠直卿は萩の中の小徑を傳ひ、泉水の緣を廻つて小高い丘に在る四阿へと、は入つた。其處からは信越の山々が、微かな月の光を含んで居る空氣の中に、朧に浮いて見える。忠直卿は、今までの大名生活に於いて、未だ經驗した事のないやうな、感傷的な心持に囚はれて、思はず其處に

小半刻を過した。

すると、ふと人聲が聞える。今迄寂然として、蟲の聲のみが淋しかつた處に、人聲が聞え出した。聲の樣子で見ると、二人の人間が話しながら、四阿の方へ近よつて來るらしい。

忠直卿は、今自分が享受して居る靜寂な心持が、不意の侵入者に依つて搔き擾されるのが、厭であつた。

併し、小姓をして、近寄つて來る人間を追はしむる程、今宵の彼の心は荒んでは居なかつた。二人は話しながら、段々近づいて來る。四阿の裡へは月の光が射さぬので、其處に彼等の主君が居ようとは、夢にも氣附いて居ないらしい。

忠直卿は、その二人が誰であるか、見極めようとは思つて居なかつた。が、二人の聲が段々近づいて來ると、夫が誰と誰とであるかゞ自然と判つて來た。稍潰れたやうな聲の方は、今日の大仕合に白軍の大將を勤めた小野田右近である。疳高い上づつた聲の方は、今日忠直卿に一氣に突き伏せられた白軍の副大將大島左太夫である。二人は先刻から、何でも今日の紅白仕合に就いて話して居るらしい。

忠直卿は、大名として生れて初めて、立聞きをすると云ふ不思議な興味を覺えて、思はず注意を、その方へ集注させた。

二人は、四阿からは三間とは離れない泉水の汀で、立ち止まつて居るらしい。左太夫は、心持聲を潛めたらしく、

「時に殿の御腕前を何う思ふ？」と、訊いた。

右近が、苦笑をしたらしい氣勢がした。

「殿のお噂か！　聞えたら切腹物ぢやのう。」

「蔭では公方のお噂もする。何うぢや、殿の御腕前は？　眞實の御力量は？」と、左太夫は、可なり眞劍に訊いて、ぢつと息を凝して、右近の評價を待つて居るやうであつた。

「さればぢやのう！　いかい御上達ぢや。」と、云つたまゝ右近は、言葉を切つた。忠直卿は、初めて臣下の僞らざる賞讃を聞いたやうに覺えた。が、右近はもつと言葉を續けた。

「以前ほど、勝をお讓り致すのに、骨が折れなくなつたわ。」

二人の若武士は、其處で顏を見合はせて會心の苦笑をしたらしい氣勢がした。

右近の言葉を聞いた忠直卿の心の中に、そこに突如として感情の大渦卷が聲を立てゝ流れ始めたは無論である。

忠直卿は、生れて初めて、土足を以て、頭上から蹂み躪じられたやうな心持がした。彼の唇はブル〳〵と顫へ、惣身の血潮が煮えくり返つて、グン〳〵頭へ逆上するやうに思つた。

右近の一言に依つて、彼は今迄自分が立つて居つた人間として最高の脚臺から、引きずり下ろされて地上へ投げ出されたやうな、名狀し難い衝動を受けた。

夫は、確に激怒に近い感情であつた。併し、心の中で有り餘つた力が、外にハミ出したやうな激怒とは、全く違つたものであつた。その激怒は外面は、旺んに燃え狂つて居るものゝ、中核の處には癒しがたい淋しさの空虛が、忽然と作られて居る激怒であつた。彼は世の中が、急に頼りなくなつたやうな、今までの凡ての生活、自分の持つて居た凡ての誇が、悉く僞の土臺の上に立

つて居た事に氣が附いたやうな淋しさに、ひし〳〵と襲はれて居た。

彼は小姓の持つて居る、佩刀を取つて、即座に兩人を切つて捨てようかと、息込んだが、さうした烈しい意志を遂げる強い力は、此時の彼の心の裡には少しも殘つては居なかつた。

其上、主君として臣下から僞りの勝利を媚びられて得意になつて居た自分が淺ましいと同時に、今兩人を手刃して、その淺ましい事實を、自分が知つて居ると云ふ事を、家中の者に知らせるのも彼にとつては可なりの苦痛であつた。忠直卿は、胸の内に湧き返る感情をぢつと抑へて、如何なる行動に出づるのが、一番適當であるかを考へた。餘りに不用意にかうした經驗に出會した爲、たゞさへ昂奮し易い忠直卿の感情は收拾の附かぬほど混亂した。

忠直卿の傍に、先刻から置物のやうにぢつとして、蹲まつて居た聰明な小姓は、流石に此危機を十分に知つて居た。二人の男に、玆に彼等の主君が居ることを敎へねば、何んな大事が起るかも知れぬと思つた。彼は、主君の凄まじい顏色を窺ひながら、二三度小さい咳をした。

小姓の小さい咳は、此場合甚だ有效であつた。右近と左太夫とは、附近に人が居るのを知ると、ヘッとしてその冒瀆な口を緘んだ。

二人は云ひ合はしたやうに足早く大廣間の方へと去つてしまつた。

忠直卿の眸は、怒に燃えて居た。が、その頰は凄じいまでに蒼ざめて居る。

彼の少年時代からの感情生活は、右近の一言に依つて、物の見事に破產してしまつて居た。彼が幼にして、遊戲をすれば近習の誰よりも巧みであつた事や、破魔弓の的を競へば近習の何人よりも多く命中矢を出した事や、習字の稽古の筆を取れば、祐筆の老人が膝頭を叩いて、彼の手蹟

た賞讃した事などが、皆不快な記憶として彼の頭に一時に蘇つて來た。
武術の方面に於いても、さうであつた。劍を取つても、槍を取つても、忽ち相手をする若武士に打ち勝つ程の腕に瞬く間に上達した。彼は今迄自分を信じて來た。自分の實力を飽く迄信じて來た。今右近等の冒瀆な蔭口を耳にしても、夫が彼等の負け惜しみであるとさへ、ともすれば思ふ程である。
併し、今日の右近の言葉は、その言葉が發せられた時と場合とを考へれば、決して冗談でもなければ嘘でもなかつた。
自信に充ち滿ちて居た忠直卿の耳にも正眞の事實として、聞えぬ譯には行かなかつた。右近の言葉は、彼の耳朶の裡に彫り附けられたやうに、殘つて居る。
考へて見ると、忠直卿は今日の華々しい勝利の中でも、何處迄が本當で、何處からが嘘だか判らなくなつた。否今日のみではない、生れて以來幾度も試みた遊戲や仕合で、自分が占めた數限りのない勝利や、優越の中で、何れ丈が本物で何れ丈が嘘のものだか、判らなくなつた。さう考へると、彼は心の中を掻きむしられるやうな、烈しい焦躁を感じた。彼とても、臣下の凡てから僞の勝利を奪つて居るのではない。否その中の多くの者には、正當に勝つて居るのだ。それだのに右近や左太夫などの不埒者の居る爲に、自分の勝利が、凡て不純の色彩を帶びるに至つたのだと思ふと、彼は今右近と左太夫とに對し、旺然たる憎惡を感じ始めたのである。
が、夫ばかりではなかつた。かうなると、つい三月ばかり前に、大阪の戰場に立てた偉勳さへ、何んだか怪しげな正體の判らぬものゝやうに、忠直卿の心の中に思はれた。彼が、今まで誇とし

て居た日本奬噲と云ふ稱呼さへ、何だか人を馬鹿にしたやうな、誇張を伴うて居るやうにさへ思はれ出した。家臣どもから、いゝ加減に扱はれて居た自分は、お祖父様からも手輕に、操られて居るのではないかと思ふと、忠直卿の眸には、初めて不覺の涙が滲じみ始めた。

三

無禮講の酒宴に、グタ〳〵に醉つてしまつた若武士達は、九つのお土圭が鳴るのを合圖に總立になつて退出しようとすると、急にお傍用人が奥殿から駈け附けて來た。

「各々方、靜まられい！　殿の仰せらるゝには、明日は犬追物のお催しがあるべき筈の所、急に御變改があつて、明日も、今日同樣、槍術の大仕合ひを催せらるゝ、時刻と番組とは凡て今日に變らぬとの仰せぢや。」と、雙手を擧げて大聲に布令廻つた。

若武士の中には『やれ〳〵明日もか』と思ふ者もあつた。今日の勝利を、もう一度繰返すのかと、北叟笑む者もあつた。が、多くの者は、酒を呑んだ後の勇ましい元氣で、

「毎日續かうとも結構ぢや。明日もまたお振舞酒に思ひ切り醉ふ事が出來る。」と、勇み立つた。

その翌日は、昨日と等しく城中の兵法座敷は、美しく掃き淨められて、紅白の幔幕が張り渡され、上座には忠直卿が昨日と同樣に座を占めたが、始終下唇を噛むばかりでなく、眸が爛々として燃えて居た。

勝負は、昨日と殆ど同樣な情勢で進展した。が、昨日の勝負が皆の心にマザ〳〵と殘つて居る

ので組合せの多くは一方に取つて雪辱戦であつたから、掛け聲は昨日にも勝して烈しかつた。紅軍は、昨日よりも更に旗色が悪かつた。大將の忠直卿が出られた時には、白軍には大將副將初め、六人の不戰者があつた。

見物の家中の者共が、不思議に思ふ程、忠直卿は興奮して居た。タンポの附いた大身の槍を、熱に浮かされた男のやうに妄に打ち振つた。最初の二人は腫れ物にでも觸るやうに、恟々として立ち向つた。が、主君の烈しい槍先に忽ちに突き竦められて平伏してしまふ。次の二人も、主君の凄じい氣勢に怖ぢ恐れて、たゞ型ばかりに槍を振つた丈であつた。

五人目に現はれたのは、大島左太夫であつた。彼は今日の忠直卿の常軌を逸したとも、思はれる振舞に就いて、微かながら杞憂を懷く一人であつた。無論、彼は自分の主君が、自分達の昨夜の立話を立聞きした當の本人であらうとは、夢にも思つて居なかつた。が、昨夜夜更けの庭に耳にした咳拂ひの主が、主君に自分達を諷したのではあるまいかと、云ふ微かな懸念は持つて居た。彼は常よりも更に肅然として、主君の前に頭を下げた。

「左太夫か！」と、忠直卿はある落着きを、示さうと努めたらしいが、その聲は妙に上づつて居た。

「左太夫！　槍と云ひ劍と云ひ、正眞の腕前は眞槍眞劍でなければ判らない！　タンポの附いた稽古槍の仕合は、所詮は僞の仕合ぢや、負けても傷が附かぬとなれば、仕宜に依つては、負けても差支へがない譯となる！　忠直は僞の仕合にはもう飽いて居る。大阪表に於て手馴れた眞槍を以て立ち向ふ程に其方も眞槍を以て來い！　主と思ふに及ばぬ。隙があらば遠慮致さずに突け！」

忠直卿の眼は上づつて、言葉の末が顫へた。左太夫は色を變へた。左太夫の後に控へて居る小野田右近も、左太夫と同じく色を變へた。

が、見物席に居る家中の者は、忠直卿の心の裡を解するに苦しんだ。殿御狂氣と怖氣を顫ふものが多かつた。

忠直卿は、之まで癇癖にこそあつたが、平常至極闊達であり、稍粗暴の嫌こそあつたが、非道無殘な振舞は寸毫もなかつたので、今日の忠直卿の振舞ひを見て家中の者が、色を變じたのも無理ではなかつた。

が、忠直卿が今日眞槍を手にしたのは、左太夫右近に對する消し難い憎しみから出たとは云へ、一つには自分の正眞の腕前を知りたいと、云ふ希望もあつた。眞槍で立ち向ふならば、彼等も無下に負けはしまい、祕術を盡くして立ち向ふに違ひない、さすれば自分の眞の力量も判る。若しその爲に、自分が手を負ふ事があつても、僞りの勝利に狂喜して居るよりも、何れ程氣持がよいか知れぬと、心の裡で思つた。

「それ！　眞槍の用意致せ」と、忠直卿が命ずると、兼ねて用意がしてあつたのだらう、小姓が二人各々一本の大身の槍を、重たさうにもたげて、忠直卿主從の間に持ち出した。

「それ！　左太夫用意せい！」と、云ひながら、忠直卿は手馴れた三間柄の長槍の穗鞘を拂つた。

槍鍛冶の名手備後貞包の鍛へた七寸に近い鋒先から迸る殺氣が、一座の人々の心を冷めたく壓した。

今迄、ぢつとして主君忠直の振舞を看過して居た國老の本多土佐は、主君が鋒先を拂はれるや否や突如として忠直卿の御前に出でた。

「殿！　お氣が狂はせられたか、大切の御身を以て、妄に劍戟を弄ばれ家臣の者を傷けられては、公儀に聞えても容易ならぬ儀で御座る。平にお止り下されい。」と、老眼をしばたゝきながら、必死になつて申し上げた。

「爺か！　止めだて無用ぢや。今日の眞槍の仕合は、忠直六十七萬石の家國に易へてもと、思ひ立つた一儀ぢや。止め立て一切無用ぢや。」と、忠直卿は凜然と云ひ放つた。其處には秋霜の如く犯し難き威嚴が伴つた。かうした場合、之迄も忠直卿の意志は絶對のものであつた。土佐は口を緘んだ儘、悄然として引き退いた。

左太夫は、もう先刻から十分に覺悟をして居た。昨夜の立話が、殿のお耳に入つた爲の御成敗かと思へば、彼には何とも文句の云ひやうはなかつた。夫は家來として當然受くべき成敗であつた。夫をかゝる眞槍仕合に、假託けての成敗かと思へば、彼は其處に忠直卿の好意をさへ感ずるやうに思つた。彼は主君の眞槍に貫かれて潔く死にたいと思つた。

「左太夫、如何にも眞槍を以て、お相手を致しまする。」と、思ひ切つて云つた。見物席に左太夫の不遜に對する叱責の聲が洩れた。忠直卿は苦笑をした。

「夫でこそ忠直の家臣ぢや。主と思ふな、隙があれば、遠慮致さず突け！」

かう云ひながら、忠直卿は槍を扱いて二三間後へ退りながら、位を取られた。

左太夫も、眞槍の鞘を拂ひ、

「御免！」と、叫びながら主君に立ち向つた。

一座の者は、凄じい殺氣に閉ぢられて、身の氣をよだち、息を詰めて、たゞ茫然と、主從の決鬪を見守るばかりであつた。

忠直卿は、自分の本當の力量を、如實にさへ知ることが出來れば、思ひ殘すことはないとさへ、思込んで居た。從つて國主と云ふ自覺もなく、對手が臣下であると云ふ考もなく、たゞ勇氣凜然として立向はれた。

が、左太夫は、最初から覺悟を極めて居た。三合ばかり槍を合すと、彼は忠直卿の槍を左の高股に受けて、どうと地響打たせて、のけ樣に倒れた。

見物席の人々は一齊に深い溜息を洩した。左太夫の傷ついた身體は同僚の誰彼に依つて、忽ち運び去られた。

が、忠直卿の心には、勝利の快感は少しもなかつた。左太夫の負が、昨日と同じく意識しての負であることが、マザ〳〵と判つたので、忠直卿の心は昨夜にも勝して淋しかつた。左太夫奴は、命を賭して迄、僞りの勝利を主君に喫はせて居るのだと思ふと、忠直卿の心の焦躁と淋しさと頼りなさは、更に底深く植ゑ附けられた。忠直卿は、自分の身を危險に置いても、臣下の身體を犧牲にしても、尙本當の事が知りがたい自分の身を恨んだ。

左太夫が倒れると、右近は少しも怯れた樣子もなく、蒼白な顏に覺悟の眸を輝しながら、左太夫の取り落した槍を携げて其處に立つた。

忠直卿は、右近奴、昨夜あのやうに、思ひ切つた言葉を吐いた男であるから、必死の手向ひを

するに相違ないと、消えかゝらうとする勇氣を鼓して立ち向つた。が、此男も左太夫と同じく、自分の罪を深く心の裡に感じて居た。そして、潔く主君の長槍に貫かれて、自分の罪を謝さうとして居た。

忠直卿は、五六合立ち合つて居る裡に、相手の右近が、急所と云ふべき胸の邊へ、幾度も隙きを作るのを見た。此男も、自分の命を捨てゝ迄主君を欺き終らうとして居るのだと思ふと、忠直卿は不快な淋しさに襲はれて來た。そして、相手にうまく＼／と乘せられて、勝利を得るのが、馬鹿々々しくなつて來た。

が、右近は一刻も早く、主君の槍先に貫かれたいと思つたらしく、忠直卿が突き出す槍先に故意に身を當てるやうにして、右の肩口をグザと貫かれてしまつた。

忠直卿は、見事に昨夜の鬱憤を晴した。が、夫は彼の心に、新しい淋しさを、植ゑ附けたに過ぎなかつた。左太夫も右近も、自分の命を賭して迄、彼等の嘘を守つてしまつた事である。

忠直卿は、その夜遲く、傷のまゝ自分の屋敷に運ばれた右近と左太夫との二人が、時刻を前後して腹を割いて死んだと云ふ報知を聽いて、黯然たる心持にならずには居られなかつた。

忠直卿は、つく＼／考へた。自分と彼等との間には、虛僞の膜が、かゝつて居る。その膜を、その僞の膜を彼等は必死になつて支へて居るのだ。その僞は、浮ついた僞でなく、必死の懸命の僞である。忠直卿は、今日眞槍を以て、その僞の膜を必死になつて、突き破らうとしたのだが、その破れは彼等の血に依つて忽ち修繕されてしまつた。自分と家來との間には、依然としてその膜がかゝつて居る。その膜の向うでは、人間が人間らしく本當に交際て居る。が、彼等が一旦自

分に向ふとなると、皆その膜を頭から被ぶつて居る。忠直卿は自分一人、膜の此方に、取殘されて居ることを思ひ出すと焦々した淋しさが、猛然として自分の心身を襲つて來るのを覺えた。

四

眞槍の仕合があつて以來、殿の御癇癖が募つたと云ふ警報が、一城の人心をして、忠直卿に對して惘々たらしめた。殿の御前だと云ふと、小姓達は眸を据ゑ息を凝して微動さへ、おろそかにはしなかつた。近習の者も一足進み一足退くにも、儀禮を正しうして微瑕だに犯さぬ事を念とした。君臣の間に、多少は存在して居た心易さが跡を滅して、君前には蕭殺たる氣が漂うた。家臣達は君前から退くと、今迄にない心身の疲勞を覺えた。

併し、君臣の間がかうして荒み始めようとするのに氣が着いたのは、決して家來の方ばかりではなかつた。忠直卿は、ある日近習の一人が、自分に家老達からの書狀を捧げるとて、四五段の彼方からゐざり寄らうとするのを見て、

「ずつと遠慮致さず前へ出よ！ さやうな禮儀には及ばぬぞ。」と、云つた。が、夫は好意から出た注意と云ふよりも、焦躁から出た叱責に近かつた。侍臣は、主君の言葉に依つて、元の心易さに歸らうとした。が、さうした意識を伴つた心易さの奥には、ゴツ〳〵とした骨があつた。

眞槍の仕合以來、忠直卿は忘れたかのやうに、武術の稽古から身を遠ざけた。毎日日課のやうに、續けて居た武術仕合を中止したばかりでなく、木刀を取り、稽古槍を手にする事さへ無くなつた。

武張つては居たが、亂暴ではあつたが、無邪氣な青年君主であつた忠直卿は、ふつつりと木刀や半弓を手にしなくなつた代りに、酒杯を手にする日が多くなつた。少年時代から、豪酒の素質を持つては居たが、酒に淫することなどは、決してなかつたのが、今では大盃を頻りに傾けて、亂酒の萌が漸く現はれた。

ある夜の酒宴の席であつた。忠直卿の機嫌が、何時になく晴々しかつた。すると、彼にとつては、第一の寵臣である增田勘之介と云ふ小姓が、彼の大杯になみ〳〵と酌をしながら、

「殿には、何故此頃兵法座敷には渡らされませぬか。先頃のお手柄に、ちと御慢心遊ばしての御怠慢と、お見受け申しまする。」と、云つた。彼は、かう云ふ事に依つて、主君に對する親しみを、十分見せた積りであつた。

すると、思ひがけもなく、忠直卿の顏は、急に色を變じた。つと、傍にあつた杯盤を、取るよりも早く、勘之介の面上を目がけて、發矢とばかりに投げ附けた。主君から、豫期せざる暴行を受けて、勘之介はハッと色を變じたが、忠義一途の彼は、決して身體をかはさなかつた。彼はその杯盤を、眞向に受けて、白い面から血を流しながら、其場に平伏した。

忠直卿は、物をも云はず、立ち上ると、其儘奥殿へ、は入つてしまつた。同僚の誰彼が、駈け寄つて慰めながら、勘之介を引き起した。

勘之介は、その日病と稱して、宿へ下つたが、その夜の明くるを待たず切腹した。

忠直卿は、夫を聞くと、たゞ淋しく苦笑したばかりであつた。

その事があつてから、十日ばかりも經つた頃だつた。忠直卿は、老家老の小山丹後と碁を圍ん

で居た。老人と忠直卿とは、相碁であつた。が、二三年來老人は段々負越すことが多かつた。その日も、丹後は忠直卿の爲に、三回ばかり續けざまに敗られた。すると、老人は人の好ささうな微笑を示しながら、

「殿は近頃、いかい御上達ぢや、老人ではとてもお相手がなり申さぬわ。」と、云つた。

と、今迄晴やかに續けざまの快勝を享樂して居たらしい忠直卿の面を、暗鬱の陰影が掠めたかと思ふと、彼はいきなり立ち上つて、二人の間に置かれて居る碁盤を足蹴にした。盤上に並んで居た黑白の石は跳び散つて、その二三は丹後の顔を打つた。彼は、咄嗟に立ち去らうとする忠直卿の袴の裾を捕へながら、

丹後は、勝負に勝ちながら、怒り出した主君の心を解するに苦しんだ。

「如何遊ばされた！　殿には御亂心か、何様の御趣意あつて、丹後奴に斯樣な恥辱を與へらるる？」

と、狂氣の如くに叫んだ。一徹な老人の心には、忠直卿の不當な仕打に對する怒が、炎の如く燃えた。

が、忠直卿は、老人の怒りを、少しも介意せず「えい！」と、袴を捕へた手を振り放ちながら、つゝと奥へ去つてしまつた。

老人は、幼年時代から手鹽にかけて守り育てた主君から、理不盡な恥しめを受け、老の眼に涙を流しながら、口惜しがつた。彼は故中納言秀康卿が、在りし世の寛仁大度な行蹟を想ひ起しながら、永らへて恥を得た身を悔いた。正直な丹後は、盤面に向つて追從負けをするやうな卑劣な

心は、毛頭持つて居なかつた。

が、もう忠直卿の心には、家臣の一擧一動は、凡て一色にしか映らなくなつて居た。

老人は、その日家へ歸ると、式服を着て、禮を正し、皺腹をかき切つて、惜しからぬ身を捨ててしまつた。

忠直卿御亂行と云ふ噂が、漸く封境の內外に傳はるやうになつた。

勝氣の忠直卿は、之迄は、他人に對する優越感を享受する爲に、よく勝負事を試みたが、此の事があつて以來は、その方面にも、ふつつりと手を出さなくなつた。

かうなると、忠直卿の生活が段々荒んで行くのも無理はなかつた。城中に在つては、爲す事のない儘に酒食に耽り、色を漁つた。そして、城外に出ては、狩獵にのみ日を暮した。野に鳥を追ひ、山に獸を狩り立てた。流石に鳥獸は國主の出獵であるが爲に、忠直卿の矢面に好んで飛び出すものはなかつた。人間の世界から離れ、かうした自然界に對する時、忠直卿は自分を圍ふ僞の膜から、身を脫出し得たやうに、すがすがしい心持がした。

五

之迄の忠直卿は、國老達の云ふ事は、何かにつけてよく聽かれた。まだ長吉丸と云つて居た十三歲の昔、父秀康卿の臨終の床に呼ばれて『父の亡からん後は、國老共の申すことを父が申す事と心得てよく聽かれよ。』と、諭された事を大事に守つて居た。

が、此頃の彼は、國政を聽く時にも、凡てを僻んで解釋した。家老達が、ある男を推薦して賞

め立てると、彼はその男が喰はせ者のやうに思はれて、その男を用ふる事を、意地にかゝつて拒んだ。國老達が、ある男の行蹟の非難を申上げて、閉門の至當である事を主張すると、忠直卿は、その男が硬直な士であるやうに思はれて、いつかな閉門を命ずる事を許さなかつた。

越前領一帶、その年は近年稀な凶作で、百姓の困苦一方ではなかつた。家老達は、袖を連ねて忠直卿の御前に出で、年貢米の一部免除を願ひ出でた。が、忠直卿は、家老達が、口を酸くして說けば說くほど、家老達の建言を採用するのが、厭になつた。彼自身心の裡では、百姓に相當な同情を懷きながら、家老達の云ふ儘になるのが不快であつた。そして、家老達が、くど〱と說くのを聽き流しながら、

「ならぬ！　ならぬと申せば、しかと相ならぬぞ。」と、怒鳴り附けた。何の爲に拒んだのか、彼自身にさへ分らなかつた。

かうした感情の喰違ひが、主從の間に深くなるに連れ、國政日に荒んで、越前侯亂行の噂は、江戸の柳營にさへ達した。

が、忠直卿のかゝる心持は、彼のもつと根本的な生活の方へも、段々喰ひ入つて行つた。ある夜の事であつた。彼は宵から、奥殿にたて籠つて、愛妾達を前にしながら、頻りに大杯を重ねて居た。

京からはる〲と、召し下した絹野と云ふ美女が、此頃の忠直卿の寵幸を身一つに蒐めて居た。忠直卿は、その夜は暮れて間もない六つ半刻から九つに近い深更迄、酒を飮み續けて居る。が、

酒を飮まぬ愛妾達は、彼の盃に酒を注ぐと云ふ單調な仕事を、幾回となく繰返して居る丈である。

忠直卿は、ふと醉眼を刮いて、彼に侍坐して居る愛妾の絹野を見た。所が、その女は連夜の酒宴に疲れはてたのだらう。主君の御前と云ふ事も、つい失念してしまつたと見え、その二重瞼の美しい眼を半眼に閉ぢながら、うつら〳〵と假睡に落ちようとして居る。

ぢつと、その面を見て居ると、忠直卿は又更に、新らしい疑惑に囚はれてしまつた。たゞ、主君と云ふ絶大な權力者の爲に、身を委して朝暮自分の意志を、少しも働かさず、たゞ傀儡のやうに扱はれて居る女の淋しさが、その不覺な假睡の裡にまざ〳〵と現はれて居るやうに思はれた。

忠直卿は思つた。此女も自分に愛があると云ふ譯では、少しもないのだ。此女の嫣然たる姿態や、妖艶な媚は皆上部ばかりの技巧なのだ。たゞ、大金で退引ならず身を購はれ、國主と云ふ大權力者の前に引き据ゑられて是非もなく、出來る丈その權力者の歡心を得ようと云ふ、切破詰まつた最後の逃げ路に過ぎないのだ。

が、此女が自分を愛して居ないばかりでなく、今迄自分を心から愛した女が一人でもあつたゞらうかと、忠直卿は考へた。

彼は今迄、人間同志の人情を少しも味はずに來た事に、此頃漸く氣が附き始めた。

彼は、友人同志の情を、味つた事さへなかつた。幼年時代から、同年輩の小姓を、自分の周圍に幾人となく見出した。が、彼等は忠直卿と友人として、交はつたのではない。たゞ服從をした丈である。忠直卿は、彼等を愛した。が、彼等は決してその主君を愛し返しはしなかつた。たゞ義務感情から服從した丈である。

友情は、兎も角、異性との愛は、何うであつたゞらう、彼は、少年時代から美しい女性を、幾人となく自分の周圍に支配した。忠直卿は、彼等を愛した。が、彼等の中の何人が、彼を愛し返したゞらう。忠直卿が愛しても、彼等は愛し返さなかつた。たゞ、唯々として服從を提供した丈である。彼は今も自分の周圍に多くの人間を支配して居る。が、彼等は忠直卿に對して、人間としての人情の代りに、服從を、提供して居る丈である。

考へて見ると、忠直卿は戀愛の代用としても、服從を受け、友情の代りにも服從を受け、親切の代りにも服從を受けて居た。無論、その中には人情から動いて居る本當の戀愛もあり、友情もあり、純な親切もあつたかも知れなかつた。が、忠直卿の今の心持から見れば、夫が混沌として一樣に、服從の二字によつて掩はれて見える。

人情の世界から一段高い處に、放り上げられ、大勢の臣下の中央に在りながら、索寞たる孤獨を感じて居るのが、わが忠直卿であつた。

かうした意識が嵩するに連れ、彼の奧殿に於ける生活は、砂を嚙むやうに落莫たるものになつて來た。

彼は、今迄自分の愛した女の愛が、不純であつた事が、もう見え透くやうに思はれた。自分が、心を掛けると何の女も、唯々諾々として自分の心のまゝに從つた。が、夫は自分を愛して居るのではない、たゞ臣下として君主の前に義務を盡くして居るのに過ぎなかつた。彼は、戀愛の代りに、義務や服從を喫するのに、飽き果てゝしまつて居た。

彼の生活が荒むに從つて、彼は單なる傀儡であるやうな異性の代りに、もつと彈力のある女性

を愛したいと思つた。彼を、心から愛し返さなくてもいゝから、せめては人間らしく反抗を示すやうな異性を愛したいと思つた。

其爲に、彼は家中の高祿の士の娘を、後房へ連れて來させた。が、彼等も忠直卿の云ふ事を、殿の仰せとばかり、唯不可抗力の命令のやうに、何の反抗を示さずに忍從した。彼等は靈驗あらたかな神の前に捧げられた人身御供のやうに、純な犧牲的な感情を以て忠直卿に對して居た。忠直卿は、その女達と相對して居ても、少しも淫蕩な心持にはなれなかつた。

彼の物足りなさは、尙續いた。彼は夫の定まつて居る女なら、少しは反抗もするだらうと思つた。彼は、命じて許婚の夫ある娘を物色した。が、さうした女も、忠直卿の豫期とは反して、主君の意志を絕對のものにして、忠直卿を人間以上のものに祭り上げてしまつた。

もう此頃から、忠直卿の放埒を非難する聲が、家中の士の間にさへ起つた。が、忠直卿の亂行は、尙止まなかつた。許婚の夫ある娘を得て、少しも慰まなかつた彼は、更に非道な所業を犯した。夫は、家中の女房で艷名のあるものを、私に探らしめて、その中の三名を、不時に城中に召し寄せたまゝ、歸さなかつた事である。

主君の御亂行玆に極まるとさへ、歎くものがあつた。夫からの數度の歎願に拘はらず、女房は返されなかつた。重臣は、人倫の道に悖る所業として忠直卿を强諫した。

が、忠直卿は重臣が諫むれば諫むる程、自分の所業に興味を覺ゆるに至つた。

女房を奪はれた三人の家臣の中、二人迄忠直卿の非道な企の眞相を知ると、君臣の義も之まで

と思つたと見え、云ひ合せた如く、相續いて割腹した。

横目附から、その屆出があると、忠直卿は手にして居た杯を、グット飲み干されてから、微かな苦笑を洩されたまゝ、何とも言葉はなかつた。家中一同の同情は、翕然として死んだ二人の武士の上に注がれた。『道は武士ぢや、見事な最期ぢや』と、賞めそやす者さへあつた。が、人々は此二人を死せしめた原因を、只不可抗力な天災だと考へて居た。一種の避くべからざる運命のやうに思つて居た。

二人が前後して死んで見ると、家中の人々の興味は、妻を奪はれながら、只一人生き殘つて居る淺水與四郎の身に蒐つて居た。

そして、妻を奪はれながら、腹を得切らぬその男を、臆病者として非難するものさへあつた。が、四五日してから、その男は飄然として登城した、そして、忠直卿にお目通を願ひたいと目附まで申し出でた。が、目附は淺水與四郎を色々に宥め賺さうとした。

「何と申しても、相手は主君ぢや。お身が今、お目通に出たら必定お手打ぢや、殿の御非道は、我人共によく判つて居る、が何と申しても相手は主君ぢや。」

が、與四郎は斷然として云ひ放つた。

「縱令如何ならうとも、お目通を願ふのぢや。縱令身は八劈きにされようとも、念ない事ぢや。是非お取次ぎ下されい。」と、必死の色を示した。

目附は、仕方なく白書院に詰めて居る家老の一人へ、其歎願を傳へた。夫を聞いた老年の家老は、

「與四郎奴は、血迷うたと見えるな。主君の御無理は判つて居る事ぢやが、此場合腹をかつ切つて死諫を進めるのが、臣下としての本分ぢや。他の二人は、よう心得て居るに與四郎奴は、女房を取られたので血迷うたと見える。か程の不覺人とは思はなかつたに。」と囁いた。

家老は、尙ブツ〳〵と口小言を云ひながら、小姓を呼んでその事を濫々ながら、忠直卿の耳に侍へしめた。

すると、忠直卿は、思の外に機嫌斜めならずであつた。

「ハヽ、與四郎奴が、參つたか。よくぞ參り居つた。直ぐ通せ！目通り許すぞ。」と、叫ばれたが、此の頃絶えて見えなかつた晴がましい微笑が、頰の邊に漂うた。

暫くすると、忠直卿の目の前に、病犬のやうに呆けた與四郎の姿が現はれた。數日來の心勞に疲れたと見え、色が蒼ざめて、顏中に何處となく殺氣が漂つて居る。そして、その眸の中には、二筋も三筋も血を引いて居る。

忠直卿は生來初めて、自分の目の前に、自分の家臣が本當の感情を隱さず、顏に現はして居るのを見た。

「與四郎か！近う進め！」と、忠直卿は溫顏を以てかう云はれた。何だか、自分が人間として他の人間に對して居るやうに思つて、與四郎に對して、一種の懷しさをさへ覺えた。主從の境を隔つる膜が除れて、たゞ人間同志として、向ひ合つて居るやうに思はれた。

與四郎は、疊の上を三反ばかり滑り寄ると、地獄の底からでも、洩れるやうな呻き聲を出した。

「殿！主從の道も人倫の大道よりは、小事で御座るぞ。妻を奪はれましたお恨み、かくの如

く申上げまするぞ。」と、云ふかと思ふと、與四郎は飛燕の如く身を躍らせて、忠直卿に飛びかかつた。その右の手には、早くも匕首が光つて居た。が、與四郎は輕捷な忠直卿に、譯もなく利腕を取られて、其處に捻ぢ伏せられてしまつた。近習の一人は、氣を利かした積で、小姓の持つて居た忠直卿の佩刀を彼に手渡さうとした。が、忠直卿は却つて其男を斥けた。

「與四郎！ 眞に其方は武士ぢやのう。」と、云ひながら、忠直卿は取つて居た與四郎の手を放した。與四郎は、匕首を持つたまゝ、面も揚げず、其處に平伏した。

「其方の女房も、眞に命を召さるゝとも、余が言葉に從はぬと申し居つた。余の家來には珍らしい者共ぢや。」と、云つたまゝ、忠直卿は心から快げに哄笑した。

忠直卿は、與四郎の反抗に依つて、二重の歡びを得て居た。一つは、一個の人間として、他人から恨まれ殺されんとすることに依つて、初めて自分も人間の世界へ一足踏み入れる事が、許されたやうに覺えた事である。もう一つは、家中に於いて打物取つては、俊捷第一の噂ある與四郎が、必死の匕首を物の見事に、取押へた事であつた。此勝負に、嘘や佯があらうとは思へなかつた。彼は、久し振に勝利の快感を、何等の疑惑なしに、樂しむ事が出來た。忠直卿は、此頃から胸の裡に腐り附いて居る鬱懷の一端が解け始めて、朗かな光明を見たやうに思はれた。

「たゞ此儘にお手打を。」と、歎願する與四郎は何のお咎めもなく下げられたばかりでなく、與四郎の妻も、即刻お暇を賜つた。

が、忠直卿の此の歡びも、決して長くは續かなかつた。

與四郎夫婦は、城中から下げられると、その夜、枕を並べて覺悟の自殺を遂げてしまつた、何

の爲に死んだのか、確には分らなかつたが、恐らく相傳の主君に刃を向けたのを、恥ぢたのと、かつは彼等の命を救つた忠直卿の寛仁大度に、感激した爲であらう。

が、二人の死を聽いた忠直卿は、少しも歡ばなかつた。與四郎が覺悟の自殺をした所から考へると、彼が匕首を以て忠直卿に迫つたのも、何うやら怪しくなつて來た。忠直卿に潔く、手刃されん爲の手段に過ぎなかつたやうにも思はれた。若しさうだとすると、忠直卿が見事にその利腕を取つて捻ぢ倒したのも、紅白仕合に敵の大將を見事に敗つて居たのと、餘り違つた譯のものではなかつた。さう考へると、忠直卿は再び暗澹たる絶望的な氣持に、陷つてしまつた。

忠直卿の亂行が、其後益々進んだ事は、歴史にある通である。最後には、家臣を擅に手刃するばかりでなく、無辜の良民を捕へて、之に兇刃を加へるに至つた。殊に口碑に殘る『石の俎』の云ひ傳は百世の後尙人に面を背けさせるものである。が、忠直卿が、かゝる殘虐を敢てしたのは、多分臣下が忠直卿を人間扱ひにしないので、忠直卿の方でも、おしまひには臣下を人間扱ひにしなくなつたのかも知れない。

六

併し、忠直卿の亂行も無限には續かなかつた。放埒が度重るに連れて、幕府の執政たる土居大炊頭利勝、本多上野守正純は、私に越前侯廢絶の策を廻らした。が、剛强無双の上に、德川家には嫡々たる忠直卿に正面から事を計つては、如何なる大變を、惹き起すかも分らぬので、遂には忠直卿の御生母なる清涼尼を、越前へ送つて將軍家の意を夫となく忠直卿に傳へる事にした。

忠直卿は、母君との絶えて久しき對面を欣ばれたが、改易の沙汰を思ひの外に容易く聽き入れられ、六十七萬石の封城を、弊履の如く捨てられ、配所たる豐後國府内に赴かれた。途中敦賀にて入道され法名を一伯と附けられた。時に元和九年五月の事で、忠直卿は三十の年を越したばかりであつた。後に豐後府内から同國津守に移されて臺所料として、幕府から一萬石を給され、晩年を事もなく過し、慶安三年九月十日に薨じた。享年五十六歳であつた。

忠直卿の晩年の生活に就いては、何等の史實も傳はつて居ない。たゞ、忠直卿警護の任に當つて居た府内の城主竹中采女正重次が、その家臣をして忠直卿の行狀を錄せしめて、幕府の執政たる土居大炊頭利勝に送つた『忠直卿行狀記』の一册があるばかりである。その一節に、

『忠直卿當國津守に移らせ給うて後は、些の荒々しきお振舞もなく安けく暮され申候。兼々仰せられ候には六十七萬石の家國を失ひつる折は、惡夢より覺めたらん如く、たゞすが〳〵しうこそ思ひ候へ。生々世々國主大名などに再びとは生れまじきぞ。多勢の中に交じりながら、孤獨地獄にも陷ちたらんが如き苦艱を受くる事屢々なりなど仰せられ、御改易の事に就いては、些の御後悔だに見えさせられず候。……徒然の折には、村年寄僧侶などさへお手近く召し寄せられ、圍棋のお遊びなどあり、打ち興ぜさせ給ふ有樣、殷の紂王にも勝れる暴君よなど、噂せられ給ひし面影更に見え給はず、殊に津守の淨建寺の洸山老衲とは、いと入懇に渡らせられ、老衲が、「六十七萬石も持たせ給へば、誰も紂王の眞似などもしたくなるものぞ。殿の惡しきに非ず。」など、聞え上げけるに、お怒りの樣もなく笑はせ給ふ。末には百姓町人の賤しきをさへお目通に引き給ひ、無禮に飾なく申し上ぐる事を、いと興がらせ給へり。御身はよろづ、お愼しみ深く、近

侍の者を憫み、領民を愛撫し給ふ有樣、六十七萬石の家國を失ひたる無法人とも見えずと人々不審しく思ふ事今に止まず候』と、あつた。

恩讐の彼方に

市九郎は、主人の切り込んで來る太刀を受け損じて、左の頰から顎へかけて、微傷ではあるが、一太刀受けた。自分の罪を――縱令向うから挑まれたとは云へ、主人の寵妾と非道な戀をしたと云ふ、自分の致命的な罪を、意識して居る市九郎は、主人の振り上げた太刀を、必至な刑罰として、譬へその切先を避くるに努むる迄も、夫に反抗する心持は、少しも持つては居なかつた。彼は、たゞかうした自分の迷から、命を捨てることが、如何にも惜しまれたので、出來る丈は逃れて見たいと思つて居た。それで、主人から不義を云ひ立てられて斬り付けられた時、有合せた燭臺を、早速の獲物として主人の鋭い太刀先を避けて居た。が、五十に近いとは云へ、まだ筋骨のたくましい主人が疊みかけて切り込む太刀を、攻撃に出られない悲しさには、何時となく受け損じて、最初の一太刀を、左の頰に受けたのである。が、一旦血を見ると、市九郎の心は、忽ちに變つて居た。彼の分別のあつた心は、鬪牛者の槍を受けた牡牛のやうに荒んでしまつた。何うせ死ぬのだと思ふと、其處に世間もなければ主從もなかつた。今迄は、主人だと思つて居た相手の男が、たゞ自分の生命を、脅さうとして居る一個の動物――夫も兇惡な動物としか、見えなかつた。彼は奮然として、攻撃に轉じた。彼は「おうお」と叫きながら、持つて居た燭臺を、相手の面上を目がけて投げ打つた。市九郎が、防禦の爲の防禦をして居るのを見て、氣を許してかゝつて居た、主人の三郎兵衞は、不意に投げ付けられた燭臺を受けかねて、その蠟受けの一角が、したゝかに彼の右眼を打つた。市九郎は、相手のたじろぐ隙に、脇差を拔くより早く飛びかゝつた。

「おのれ、手向ひするか！」と、三郎兵衞は激怒した。市九郎は無言で付け入つた。主人の三尺に近い太刀と、市九郎の短い脇差とが、二三度烈しく打ち合うた。

主從が必死になつて、十數合太刀を合はす間に、主人の太刀先が、二三度低い天井をかすつて、屢々太刀を操る自由を失はうとした。市九郎は其處へ付け入つた。主人は、その不利に氣が付くと自由な戸外へ出ようとして、二三歩後退りして緣の外へ出た。その隙に市九郎が、尙も付け入らうとするのを、主人は「えい」と焦だつて切下した。が、焦だつた餘りその太刀は、緣側と、座敷との間に垂れ下つて居る鴨居に、不覺にも二三寸切り込まれた。

「しまつた。」と、三郎兵衞が、太刀を引かうとする隙に、市九郎は踏み込んで、主人の脇腹を思ふ樣、橫に薙いだのであつた。

敵手が倒れてしまつた瞬間に、市九郎は我に復つた。今迄昂奮して朦朧として居た意識が、漸く落着くと、彼は、自分が主殺しの大罪を犯したことに、氣が付いて、後悔と、恐怖との爲めに、其處に平臥つてしまつた。

夜は初更を過ぎて居た。母屋と、仲間部屋とは、遠く隔つて居るので、主從の恐ろしい格鬪は、母屋に住んで居る女中以外、まだ何人にも知られなかつたらしい。その女中達は、此の烈しい格鬪に氣を失ひ、一間の內に集まつて、たゞ身を顫はせて居る丈であつた。

市九郎は、深い悔恨に囚はれて居た。一個の蕩兒であり、無賴の若武士ではあつたけれども、まだ惡事と名の付くことは、何もして居なかつた。まして八逆の第一なる主殺しの大罪を犯さうとは彼の思ひも付かぬ事だつた。彼は、血の付いた脇差を取り直した。主人の妾と慇懃を通じて、

その爲に成敗を受けようとした時、却つてその主人を殺すと云ふことは、何う考へても、彼にいい所はなかつた。彼は、まだビク／＼と動いて居る、主人の屍體を尻眼にかけながら、靜に自殺の覺悟を堅めて居た。すると、その時、次の間から、今迄の大きい壓迫から、逃れ出たやうな聲がした。

「ほんとにまあ、何うなる事かと思つて心配したわ。お前が眞二つにやられた後は、私の番ぢやあるまいかと、先刻から、屛風の後で息を凝して見て居たのさ。が、ほんとうにいゝ按配だつたね。かうなつちや、一刻も猶豫はして居られないから、在金をさらつて逃げるとしよう。まだ仲間達は氣が付いて居ないやうだから、逃げるなら今の裡さ。乳母や、女中などは、臺所の方でガタ／＼顫へて居るらしいから、私が行つて、じたばた騷がないやうに云つて來ようよ。さあ！お前は在金を探して下さいよ。」と、云ふその聲は、確に顫へを帶びて居た。が、さうした顫へを、女性としての強い意地で抑制して、努めて平氣を裝つて居るらしかつた。

市九郎は――自分特有の動機を、スッカリ失くして居た市九郎は、女の聲を聽くと、蘇つたやうに活氣づいた。彼は、自分の意志で働くと云ふよりも、女の意志に依つて動く傀儡のやうに立ち上ると、座敷に置いてある桐の茶簞笥に手をかけた。そして、その眞白い木目に、血に汚れた手形を付けながら、抽斗をあちらこちらと探し始めた。が、女――主人の妾のお弓が歸つて來る迄に、市九郎は、二朱銀の五兩包を、たゞ一つ見付けたばかりであつた。お弓は、臺所から引返して來て、その金を見ると、

「そんな端した金が、どうなるものかね。」と、云ひながら、今度は自分で、自暴に抽斗を引

掻き廻した。しまひには、鎧櫃の中迄探したが、小判は一枚も出て來はしなかつた。
「名うての仕末屋だから、瓶にでも入れて、土の中へでも埋めてあるのかも知れない。」さう忌々しさうに云ひ切ると、金目のありさうな衣類や、印籠を、手早く風呂敷包にした。
かうして、この姦夫姦婦が、淺草田原町の旗本、中川三郎兵衞の家を出たのは、安永三年の秋の初であつた。後には、當年三歳になる三郎兵衞の一子實之助が、父の非業の死も知らず、乳母の懷ろにスヤ〳〵眠つて居るばかりであつた。

二

市九郎とお弓とは、江戸を逐電してから、東海道は態と避けて、人目を忍びながら、東山道を上方へと志した。市九郎は、主殺しの罪から、絶えず良心の苛責を受けて居た。が、けいぺき茶屋の女中上りの、莫連者のお弓は、市九郎が少しでも沈んだ樣子を見せると、
「何うせ兇狀持ちになつたからには、いくらくよ〳〵しても仕樣がないぢやないか。度胸を据ゑて世の中を面白く暮すのが上分別さ。」と、市九郎の心に、明暮惡の拍車を加へた。が、信州から木曾の藪原の宿迄來た時には、二人の路用の金は、百も殘つて居なかつた。二人は、窮するに連れて、惡事を働かねばならなかつた。最初はかうした男女の組合せとしては、最も爲し易い美人局を稼業とした。さうして、信州から尾州へかけての宿々で、往來の町人百姓の路用の金を奪つて居た。初の程は、女からの烈しい教唆で、つい惡事を犯し始めて居た市九郎も、遂には惡事の面白さを味ひ始めた。浪人姿をした市九郎に對して、被害者の町人や百姓は、金を取られな

から、頗る柔順であつた。

悪事が段々進歩して行つた市九郎は、美人局からもつと單純な、手數のいらぬ强請(ゆすり)をやり、最後には、切取强盗を正當な稼業とさへ心得るやうになつた。

彼は、何時となしに信濃(しなの)から木曾へかゝる鳥居峠(とりゐたうげ)に土着した。そして晝は茶店を開き、夜は强盗を働いた。

彼はもうさうした生活に、何の躊躇をも、不安をも感じないやうになつて居た。金のありさうな旅人を狙つて、殺すと巧みにその死體を片附けた。一年に三四度、さうした罪を犯すと、彼は優に一年の生活を支へることが出來た。

夫は、彼等が江戸を出てから、三年目になる春の頃であつた。參勤交代の北國大名の行列が、二つばかり續いて通つた爲、木曾街道の宿々は、近頃になく賑つた。殊に此の頃は、信州を始め越後や、越中からの、伊勢參宮の客が街道に續いた。その中には、京から大阪へと、遊山の旅を延すのが多かつた。市九郎は、彼等の二三人を殪(たふ)して、その年の生活費を得たいと思つて居た。木曾街道にも、杉や檜に交つて咲いた山櫻が散り始める夕暮のことであつた。市九郎の店に男女二人の旅人が立ち寄つた。夫は明かに夫婦であつた。男は三十を越して居た。女は二十三四であつただらう。供を連れない氣樂な旅に出た信州の豪農の若夫婦らしかつた。

市九郎は、二人の身裝(みなり)を見ると、彼は此の二人を今年の犧牲者にしようかと、思つて居た。

「もう藪原の宿迄は、何程(いくら)もあるまいな。」かう云ひながら、男の方は、市九郎の店の前で、草鞋の紐を結び直さうとした。市九郎が、返事をしようとする前に、お弓が、臺所から出て來な

がら、

「左樣でムいます、もう此の峠を降りますれば半道もムいません。まあ、ゆつくり休んでからになさいませ。」と、云つた。市九郎は、お弓の、この言葉を聞くと、お弓が既に恐ろしい計畫を、自分に勸めようとして居るのを覺えた。藪原の宿迄には、まだ二里に餘る道を、もう何程もないやうに云ひくるめて、旅人に氣をゆるさせ、彼等の行程が、夜に入るのに乘じて間道を走つて、宿の入口で襲ふのが、市九郎の常套の手段であつた。その男は、お弓の言葉を聽くと、

「それならば、茶など一杯所望しようか。」と、云ひながら、もう彼等の第一の穽に陷つてしまつた。女は赤い紐の付いた旅の菅笠を取り外しながら、夫の傍に寄り添うて、腰をかけた。

彼等は、此處で小半刻も、峠を登り切つた疲れを休めると、鳥目を置いて、紫に暮れかゝつて居る小木曾の谷に向つて、鳥居峠を降りて行つた。

二人の姿が見えなくなると、お弓は、それとばかり合圖をした。市九郎は、獲物を追ふ獵師のやうに、脇差を腰にすると、一散に二人の後を追うた。本街道を右に折れて、木曾川の流に添うて、嶮しい間道を急いだ。

市九郎が、藪原の宿手前の並樹道に來た時は、春の長い日が全く暮れて、十日ばかりの月が木曾の山の彼方に登らうとして、ほの白い月しろのみが、木曾の山々を微かに浮せて居た。

市九郎は、街道に添うて生えて居る、一叢の丸葉柳の下に、身を隱しながら、夫婦の近づくのを、徐ろに待つて居た。彼も心の底では、幸福な旅をして居る二人の男女の生命を、不當に奪ふといふことが、どんなに罪深いかと云ふことを、考へずには居なかつた。が、一旦爲しかゝつた

仕事を、中止して歸ることは、お弓の手前彼の心に委せぬ事であつた。
彼は、此の夫婦の血を流したくはなかつた。成るべく相手が、自分の脅迫に二言もなく服從して呉れゝばいゝと、思つて居た。若し彼等が路用の金と、衣裳とを出すならば決して殺生はしまいと思つて居た。
彼の決心が漸く固まつた頃に、街道の彼方から、急ぎ足に近づいて來る男女の姿が見えた。二人は、峠からの道が、覺悟の外に遠かつた爲、疲れ切つたと見え、お互に助け合ひながら、無言の儘に急いで來た。
二人が、丸葉柳の茂みに近づくと、市九郎は、不意に街道の眞中に突立つた。そして、今迄に幾度も口にし馴れて居る脅迫の言葉を浴せかけた。すると、男は必死になつたらしく、道中差を拔くと、妻を後に庇ひながら、身構へした。市九郎は、一寸出鼻を折られた。が彼は聲を勵まして、「いやさ、旅の人、手向ひしてあたら命を落すまいぞ。命迄は取らうと云はぬのぢや。在金と衣類とを大人しく出して行け！」と、叫んだ。その顏を、相手の男は、ぢーつと見て居たが、
「やあ！　先程の峠の茶屋の主人ではないか。」と、その男は、必死になつて飛びかゝつて來た。市九郎は、もう之迄と思つた。自分の顏を見覺えられた以上、自分達の安全の爲、もう此の男女を生かすことは出來ないと思つた。
相手が必死に斬り込むのを、巧みに引はづしながら、一刀を相手の首筋に浴せた。見ると連の女は氣を失つたやうに道の傍に蹲まりながら、ブル〳〵と顫へて居た。
市九郎は、女を殺すに忍びなかつた。が、彼は自分の危急には代へられぬと思つた。男の方を

殺して、殺氣立つて居る間にと思つて血刀を振り翳しながら、彼は女に近づいた。女は、兩手を合はして、市九郎に命を乞うた。市九郎は、その瞬に見つめられると、何うしても刀を下ろせなかつた。が、彼は殺さねばならぬと思つた。此の時市九郎の慾心は此の女を斬つて、女の衣裳を臺なしにしてはつまらないと思つた。さう思ふと、彼は腰に下げて居た手拭を外して女の首を絞つた。

市九郎は、二人を殺してしまふと、急に人を殺した恐怖を感じて、一刻も居た堪まらないやうに思つた。彼は、二人の胴卷と衣類とを奪ふと、あたふたとしてその場から一散に逃れた。彼は、今迄十人に餘る人殺しをしたものゝ、夫は半白の老人とか、商人とか、さうした階級の者ばかりで、若々しい夫婦連を二人迄自分の手にかけたことはなかつた。

彼は、深い良心の苛責に囚はれながら、歸つて來た。そして家に這入ると、直ぐ樣、男女の衣裳と金とを、汚らはしいものゝやうに、お弓の方へ投げやつた。女は、悠然として先づ金の方を調べて見た。金は思つたより少く、二十兩を僅に越して居るばかりであつた。

お弓は殺された女の着物を手に取ると、「まあ、黄八丈の着物に紋縮緬の襦袢だね。だが、お前さん此の女の頭の物は、どうおしだい。」と、彼女は詰問するやうに、市九郎を顧みた。

「頭の物！」と、市九郎は半返事をした。

「さうだよ。頭の物だよ。黄八丈に紋縮緬の着付ぢや、頭の物だつて、擬物の櫛や、笄ぢやあるまいぢやないか。わたしは、先刻あの女が菅笠を取つた時に、ちらと睨んで置いたのさ。瑇瑁の揃に相違なかつたよ。」と、お弓はのしかゝるやうに云つた。殺した女の頭の物の事などは、

夢にも思つて居なかつた市九郎は、何とも答へるすべがなかつた。

「お前さん！　まさか、取るのを忘れたのぢやあるまいね。確かだとすれば、七兩や八兩は確だよ。駈け出しの泥棒ぢやあるまいし、何の爲に殺生をするのだよ。あれ丈の衣裳を着た女を、殺して置きながら、頭の物に氣が付かないとは、お前は、何時から泥棒稼業にお成りなのだえ。何と云ふどぢをやる泥棒だらう。何とか、云つて御覽！」と、お弓は、威丈高になつて、市九郎に喰つてかゝつて來た。

二人の若い男女を殺してしまつた悔に、心の底迄冒されかけて居た市九郎は女の言葉から、深く傷けられた。彼は、頭の物を取る事を、忘れたと云ふ盗賊としての失策を、或は無能を、悔ゆる心は少しもなかつた。自分は、二人を殺した事を、悪い事と思へばこそ、殺す事に氣も轉動して、女がその頭に十兩にも近い裝飾を付けて居る事を全く忘れて居た。市九郎は、今でも忘れて居たことを後悔する心は起らなかつた。强盗に身を落して、利慾の爲に人を殺しては居るものゝ、悪鬼のやうに相手の骨迄は、しやぶらなかつた事を考へると、市九郎は悪い氣持はしなかつた。夫にも拘はらず、お弓は自分の同性が無残にも殺されて、其の身に付けた下衣迄が、殺戮者に對する貢物として、自分の目の前に晒されて居るのを見ながら、尙その飽き足らない慾心は、流石悪人の市九郎の眼をこぼれた頭の物に迄及んで居る、さう考へると、市九郎はお弓に對して、居た堪らないやうな淺ましさを感じた。

お弓は、市九郎の心にかうした激變が、起つて居るのを全く知らないで、

「さあ！　お前さん！　一走り行つてお吳れ。折角、此方の手に入つて居るものを遠慮するには、

當らないぢやないか。」と、自分の云ひ分に十分な條理がある事を信ずるやうに、勝誇つた表情をした。

が、市九郎は默々として應じなかつた。

「おや！ お前さんの仕事のアラを拾つたので、お氣に觸つたと見えるね。本當に、お前さんは行く氣はないのかい。十兩に近いまうけ物を、みすくふいにしてしまふ積かい。」と、お弓は幾度も市九郎に迫つた。

何時もは、お弓の云ふ事を、唯々として聽く市九郎ではあつたが、今彼の心は烈しい動亂の中にあつて、お弓の言葉などは、耳に入らない程、考へ込んで居たのである。

「いくら云つても、行かないのだね。それぢや、私が一走り行つて來ようよ。場所は何處なの。矢ッ張り何時もの處なのかい。」と、お弓が云つた。

お弓に對して、抑へ難い嫌惡を感じ始めて居た市九郎は、お弓が一刻でも自分の傍に居なくなることを、むしろ欣んだ。

「知れたことよ。何時もの通、藪原の宿の手前の松並樹さ。」と、市九郎は吐き出すやうに云つた。

「ぢや、一走り行つて來るから。幸ひ月の夜で戸外は明るいし……。ほんたうに、へまな仕事をするつたら、ありやしない。」と、云ひながら、お弓は裾をはしをつて、草履をつゝかけると駈け出した。

市九郎は、お弓の後姿を見て居ると、淺ましさで、心が一杯になつて來た。死人の髮の物を剝

ぐ爲に、血眼になつて駈け出して行く女の姿を見ると、市九郎はその女に、曾つて愛情を持つて居た丈けに、心の底から淺ましく思はずには居られなかつた。その上、自分が惡事をして居る時、縱令無殘にも人を殺して居る時でも、金を盜んで居る時でも、自分がして居ると云ふ事が、常に不思議な分疏になつて、その淺ましさを感ずることが少なかつたが、一旦人が惡事を爲して居るのを、靜かに傍觀するとなると、その恐ろしさ、淺ましさが、飽くまで明かに、市九郎の目に映らずには居なかつた。自分が、命を賭して迄得た女が、僅か五兩か十兩の瑇瑁の爲に、女性の優しさの凡てを捨てゝ、死骸に付く狼のやうに、殺された女の死骸を慕うて駈けて行くのを見ると、市九郎は、もう此の罪惡の棲家に、此の女と一緒に一刻も居た堪まれなくなつた。さう考へ出すと、自分の今迄に犯した惡事が、一々蘇つて自分の心を喰ひ割いた。絞め殺した女の眸や、血みどろになつた繭商人の呻き聲や、一太刀浴びせかけた白髮の老人の悲鳴などが、一團になつて市九郎の良心を襲うて來た。彼は、一刻も早く自分の過去から逃れたかつた。彼は、自分自身からさへも、逃れたかつた。まして自分の凡ての罪惡の、萌芽であつた女から、極力逃れたかつた。彼は、決然として立ち上つた。彼は、二三枚の衣類を風呂敷に包んだ。先刻の男から盜つた胴卷を、當座の路用として懷ろに入れたまゝで、支度も整へずに、戸外に飛び出した。が、十間ばかり走り出した時、ふと自分の持つて居る金も、衣類も、悉く盜んだものであるのに氣が付くと、跳ね返されたやうに立ち戻つて、自分の家の上り框へ、衣類と金とを、力一杯投げ付けた。

　彼は、お弓に逢はないやうに、道でない道を木曾川に添うて、一散に走つた。何處へ行くと云ふ當もなかつた。たゞ自分の罪惡の根據地から、一寸でも、一分でも遠い處へ逃れたかつた。

三

二十里に餘る道を、市九郎は、山野の別なく唯一息に走せて、翌くる日の午下り、美濃國の大垣在の淨願寺に駈け込んだ。彼は、最初から此の寺を志して來たのではない。彼の遁走の中途、偶然此の寺の前に出た時、彼の惑亂した懺悔の心は、ふと宗教的な光明に縋つて見たいと云ふ、氣になつたのである。

淨願寺は、美濃一圓眞言宗の僧錄であつた。市九郎は、現往明遍大德衲の袖に縋つて、懺悔の眞を致した。上人は逭に、此の極重惡人をも捨てなかつた。市九郎が有司の下に、自首しようかと云ふのを止めて、

「重ね〴〵惡業を重ねた汝ぢやから、有司の手に依つて身を梟木に晒され、現在の報いを自ら受くるのも一法ぢやが、それでは未來永劫焦熱地獄の苦艱を受けて居らねばならぬぞよ。夫よりも、佛道に歸依し、衆生濟度の爲に、身命を捨てゝ人を救ふと共に、汝自身を救ふのが肝心ぢや。」と、教化した。市九郎は、上人の言葉を聽いて、又更に懺悔の火に心を爛らせて當座に出家の志を定めた。彼は、上人の手に依つて得度して、了海と法名を呼ばれ、只管佛道修業に肝膽を碎いたが、道心勇猛の爲に、僅か半年に足らぬ修行に、行業は氷霜よりも皓く、朝には三密の行法を凝し、夕には祕密念佛の安座を離れず、二行彬々として豁然智度の心萌し、天晴れの智識となり濟した。彼は自分の道心が定まつて、もう動かないのを自覺すると、師の坊の許しを得て、諸人救濟の大願を起し、諸國雲水の旅に出たのであつた。

美濃の國を後にして、先づ京洛の地を志した。彼は、幾人もの人を殺しながら、縦令僧形の姿なりとも、自分が生き永らへて居るのが心苦しかつた。諸人の爲、身を粉々に碎いて、自分の罪障の萬分の一をも償ひたいと思つて居た。殊に自分が、木曾山中にあつて、行人をなやませたことを思ふと、道中の人々に對して、償ひ切れぬ負擔を持つて居るやうに思はれた。

行住座臥にも人の爲を思はぬことはなかつた。道路に難澁の人を見ると、彼は、手を引き、腰を押して、その道中を助けた。病に苦しむ老幼を負うて、數里に餘る道を遠しとしなかつたこともあつた。本街道を離れた村道の橋でも、破壞されて居る時は、彼は自ら山に入つて、樹を切り、石を運んで修繕した。路の崩れたのを見れば、土砂を運び來つて繕うた。かくして、畿內から、中國を通して、只管善根を積むことに腐心したが、身に重なれる罪は、空よりも高く、積む善根は土地よりも低きを思ふと、彼は今更に、半生の惡業の深きを悲しんだ。市九郎は、些細な善根によつて、自分の極惡が償ひ切れぬことを知つて、心を暗うした。逆旅の宿の寢覺にはかゝる賴母しからぬ報償をしながら尙ほ生を貪つて居ることが、甚だ腑甲斐ないやうに思はれて、自ら殺したいと思つたことさへあつた。が、その度毎に、不退轉の勇を飜し、諸人救濟の大業を爲すべき機緣の臻らんことを祈念した。

享保九年の秋であつた。彼は、赤間ケ關から小倉に渡り、豐前の國宇佐八幡宮を拜し、山國川を溯つて耆闍屈山羅漢寺に詣でんものと、四日市から南に赤土の茫々たる野原を過ぎ、道を山國川の溪谷に添うて辿つた。

筑紫の秋は、驛路の宿り毎に更けて、雜木の森には櫨赤く爛れ、野には稻黃色く稔り、農家の

軒には、此の邊の名物の柿が、眞紅の珠を聯ねて居た。

夫は八月に入つて間のないある日であつた。彼は、秋の朝の光に輝く、山國川の清冽な流れを右に見ながら、三口から佛坂の山道を越えて、午近き頃樋田の驛に着いた。淋しい驛で晝食の齋に有り付いた後、再び山國谿に添うて南を指した。樋田驛から出外れると、道は又山國川に添うて、火山岩の河岸を傳うて走つて居た。

歩み難い石高道を、市九郎は、杖を頼りに辿つて居た時、ふと道の傍に、此の邊の農夫であらう、四五の人々が罵り騒いで居るのを見た。

市九郎が近づくと、その中の一人は、早くも市九郎の姿を見付けて、

「之は、よい所へ來られた。非業の死を遂げた、哀れな亡者ぢや。通りかゝられた緣に、一遍の回向をして下され。」と、云つた。

非業の死だと聞いた時、剽賊の爲にあやめられた、旅人の死骸ではあるまいかと思うて、市九郎は過去の惡業を思起して、刹那に湧く悔恨の心に、兩脚の竦むのを覺えた。

「見れば水死人のやうぢやが、所々皮肉の破れて居るのは、如何した仔細ぢや。」と、市九郎は、恐る〱訊いた。

「御出家は、旅の人と見えて、御存じあるまいが、此の川を半町も上れば、鎖渡しと云ふ難所がある。山國谿第一の切所で、南北往來の人馬が、悉く難儀する所ぢやが、此の男は此の川上柿坂郷に住んで居る馬士ぢやが、今朝鎖渡しの中途で、馬が狂うた爲、五丈に近い所を眞逆樣に落ちて、見られる通りの無殘な最後ぢや。」と、その中の一人が云つた。

「鎖渡しと申せば、兼々難所とは聞いて居たが、か樣なあはれを見ることは、度々ムるのか。」と、市九郎は、死骸を見守りながら、打ちしめつて聞いた。

「一年に三四人、多ければ十人も、思はぬ憂目を見ることがある。無双の難所故に、風雨に棧が朽ちても、修繕も思ふに委せぬのぢや。」と、答へながら、百姓達は死骸の始末にかゝつて居た。

市九郎は、此の不幸な遭難者に、一遍の經を讀むと、足を早めてその鎖渡しへと急いだ。其處迄は、もう一町もなかつた。見ると、川の左に聳える荒削りされたやうな山が、山國川に臨む所で、十丈に近い絶壁に斫り截たれて、其處に灰白色のギザ〳〵した襞の多い肌を露出して居るのであつた。山國川の水は、其の絶壁に吸ひ寄せられたやうに、此處に慕ひ寄つて、絶壁の裾を洗ひながら、濃緑の色を湛へて、渦卷いて居る。

里人等が、鎖渡しと云つたのは之だらうと、彼は思つた。道は、その絶壁に絶たれ、その絶壁の中腹を、松、杉などの丸太を、鎖で聯ねた棧道が、危げに傳つて居る。かよわい婦女子でなくとも、俯して五丈に餘る水面を見、仰いで頭を壓する十丈に近い絶壁を見る時は、魂消え、心戰くも理りであつた。

市九郎は、岩壁に縋りながら、戰く足を踏み締めて、漸く渡り終つて其の絶壁を振向いた刹那、彼の心には咄嗟に大誓願が、勃然として萌した。

積むべき贖罪の餘りに小さかつた彼は、自分が精進勇猛の氣を試すべき難業に逢ふことを祈つて居た。今目前に行人が艱難し、一年に十に近い人の命を奪ふ難所を見た時、彼は、自分の身命

を捨てゝ此の難所を除かうと云ふ思付が旺然として起つたのも無理ではなかつた。二百餘間に餘る絶壁を刳貫いて道を通じようと云ふ、不敵な誓願が、彼の心に浮んで來たのである。

市九郎は、自分が求め歩いたものが、漸く玆で見附かつたと思つた。一年に十人を救へば、十年には百人、百年、千年と經つ内には、千萬の人の命を救ふことが出來ると思つたのである。

かう決心すると、彼は、一途に實行に着手した。その日から、羅漢寺の宿坊に宿りながら、山國川に添うた村々を勸化して、隧道開鑿の大業の寄進を求めた。

が、何人も此の風來僧の言葉に、耳を傾ける者はなかつた。

「三町をも超える大盤石を、刳貫かうと云ふ瘋狂人ぢや、ハ、、、。」と、嗤ふものは、まだよかつた。

「大騙りぢや、針のみぞから天を覗くやうな事を云ひ前にして、金を集めようと云ふ、大騙りぢや。」と、中には市九郎の勸説に、迫害を加ふる者さへあつた。

市九郎は、十日の間、徒らな勸進に努めたが、何人もが耳を傾けぬのを知ると、奮然として、獨力此の大業に當ることを決心した。彼は、石工の持つ槌と、鑿とを手に入れて、此の大絶壁の一端に立つた。夫は、一個のカリカチュアであつた。削落し易い火山岩であるとは云へ、川を壓して聳え立つ蜒々たる大絶壁を、市九郎は、己一人の力で、刳貫かうとするのであつた。

「到頭氣が狂つた！」と、行人は、市九郎の姿を指しながら嗤つた。

が、市九郎は屈しなかつた。山國川の淸流に沐浴して、觀世音菩薩を祈り乍ら、渾身の力を籠めて第一の槌を下した。

夫に應じて、たゞ二三片の碎片が、飛び散つたばかりであつた。が、再び力を籠めて第二の槌を下した。更に二三片の小塊が、巨大なる無限大の大塊から、分離したばかりであつた。第三、第四、第五と、市九郎は懸命に槌を下した。空腹を感ずれば、近郷を托鉢し、腹滿つれば絶壁に向つて槌を下した。懈怠の心を生ずれば、只眞言を唱へて、勇猛の心を振ひ起した。一日、二日、三日、市九郎の努力は間斷なく續いた。旅人は、その傍を通る度に、嘲笑の聲を送つた。が、市九郎の心は、その爲に須臾も撓むことはなかつた。嗤笑の聲を聞けば、彼は更に槌を持つ手に力を籠めた。

　やがて、市九郎は、雨露を凌ぐ爲に、絶壁に近く木小屋を立てた。朝は、山國川の流れが、星の光を寫す頃から起き出で、夕は瀨鳴の音が靜寂の天地に澄みかへる頃迄も、止めなかつた。が、行路の人々は、尙嗤笑の言葉を止めなかつた。

「身の程を知らぬたはけぢや。」と、市九郎の努力を眼中に置かなかつた。

が、市九郎は一心不亂に槌を振つた。槌を振つて居さへすれば、彼の心には何の雜念も起らなかつた。人を殺した悔恨も、其處に無かつた。極樂に生れようと云ふ、欣求もなかつた。たゞそこに、晴々した精進の心があるばかりであつた。彼は出家して以來、夜毎の寢覺めに、身を苦しめた自分の惡業の記憶が、日に薄らいで行くのを感じた。彼は益々勇猛の心を振ひ起して、一向專念に槌を振つた。

　新しい年が來た。春が來て夏が來て早くも一年が經つた。市九郎の努力は、空しくはなかつた。大絶壁の一端に、深さ一丈に近い洞窟が穿たれて居た。夫は、ホンの小さい洞窟ではあつたが、

市九郎の強い意志は最初の爪痕を明かに止めて居た。

が、近郷の人々は又市九郎を嗤つた。

「あれ見られい！ 狂人坊主が、あれ丈掘り居つた。一年の間もがいて、たつたあれ丈ぢや……」と、嗤つた。が、市九郎は自分の掘り穿つた穴を見ると涙の出るほど嬉しかつた。夫は如何に淺くとも、自分が精進の力の、如實に現はれて居るものに、相違なかつた。市九郎は年を重ねて、又更に振ひ立つた。夜は如法(にょほふ)の闇に、晝も尚薄暗い洞窟の裡に端坐して、たゞ右の腕のみを、狂氣の如くに振つて居た。市九郎に取つて、右の腕を振る事のみが、彼の宗教的生活の凡てになつてしまつた。

洞窟の外には、日が輝き月が照り、雨が降り嵐が荒んだ。が、洞窟の中には、間斷なき槌の音のみがあつた。

二年の終にも、里人は猶嗤笑を止めなかつた。が、夫はもう、聲に迄は出て來なかつた。たゞ、市九郎の姿を見た後、顏を見合せて、互に嗤ひ合ふ丈であつた。が、更に一年經つた。市九郎の槌の音は山國川の水聲と同じく、不斷に響いて居た。村の人達は、もう何とも云はなかつた。彼等が、嗤笑の表情は何時の間にか、驚異の夫に變つて居た。市九郎は、梳(くしけづ)らざれば頭髮は何時の間にか、伸びて双肩を掩ひ、浴(ゆあみ)せざれば垢づきて、人間とも見えなかつた。が、彼は自分が掘り穿つた洞窟の裡に、獸の如く蠢めきながら、狂氣の如くその槌を振ひつゞけて居たのである。

里人の驚異は何時の間にか、同情に變つて居た。市九郎が暫しの暇を竊(ぬす)んで、托鉢の行脚に出かけようとすると、洞窟の出口に思ひがけなく、一椀の齋(とき)を見出すことが、多くなつた。市九郎

はその爲に、托鉢に費すべき時間を、更に絶壁に向ふ事が出來た。

四年目の終が來た。市九郎の掘り穿つた洞窟は、もはや五丈の深さに達して居た。が、その三町を超ゆる絶壁に比ぶれば、其處に尙、亡羊の嘆があつた。里人は市九郎の熱心に驚いたものゝ、未だ、かくばかり見えすいた徒勞に合力するものは、一人もなかつた。市九郎は、たゞ獨りその努力を續けねばならなかつた。が、もう掘り穿つ仕事に於て、三昧に入つた市九郎は、たゞ槌を振ふ外は何の存念もなかつた。たゞ土鼠のやうに、命のある限り、掘り穿つて行く外には、何の他念もなかつた。彼は、只一人拮々として掘り進んだ。洞窟の外には春去つて秋來り、四時の風物が移り變つたが、洞窟の中には不斷の槌の音のみが響いた。

「可哀さうな坊樣ぢや。物に狂つたと見え、あの大盤石を穿つて行くわ。十の一も穿ち得ないで、おのれが命を終らうものを。」と、行路の人々は、市九郎の空しい努力を、悲しみ始めた。が、一年經ち二年經ち、丁度九年目の終りに、穴の入口より奧迄、二十二間を計る迄に、掘り穿つた。

樋田郷の里人は始めて市九郎の事業の可能性に氣が付いた。一人の瘦せた乞食僧が九年の力で、之迄掘り穿ち得るものならば、人を增し歲月を重ねたならば、此の大壁絕を穿ち貫く事も、必ずしも不思議な事ではないと云ふ考が、里人等の胸の中に銘ぜられて來た。九年前、市九郎の勸進を擧つて斥けた山國川に添ふ七鄕の里人は、今度は自發的に開鑿の寄進に付いた。數人の石工が市九郎の事業を援ける爲に雇はれた。もう、市九郎は孤獨ではなかつた。岩壁に下す多數の槌の音は、勇ましく賑やかに、洞窟の中から、洩れ始めた。

が、翌年になつて、里人達が工事の進み方を測つた時、夫れがまだ絶壁の四分の一にも達して居ないのを、發見すると、里人達は再び落膽疑惑の聲を洩した。

「人を增しても、とても成就はせぬ事ぢや。あたら、了海どのに騙かされて入らぬ物入をした。」と、彼等は捗どらぬ工事に、何時の間にか倦き切つて居つた。市九郎は、又獨り取殘されねばならなかつた。彼は、自分の傍に槌を振る者が、一人減り二人減り、遂には一人も居なくなつたのに氣が付いた。が、彼は決して去る者は追はなかつた。默々として、自分一人その槌を振ひ續けたのみである。

里人の注意は、全く市九郎の身邊から離れてしまつた。殊に洞窟が、深く穿たれゝば、穿たれるほど、その奥深く槌を振ふ市九郎の姿は、行人の眼から遠ざかつて行つた。人々は、闇の裡に閉された洞窟の中を透し見ながら、

「了海さんは、まだやつて居るのかなあ。」と、疑つた。が、さうした注意も、しまひには段々薄れてしまつて、市九郎の存在は、里人の念頭から、屢々消失せんとした。が、市九郎の存在が、里人に對して沒交渉であるが如く、里人の存在も亦市九郎に沒交渉であつた。彼にはたゞ、眼前の大岩壁のみが、存在するばかりであつた。

然し、市九郎は、洞窟の中に端坐してから、もはや十年にも餘る間、暗澹たる冷めたい石の上に、坐り續けて居た爲に、顏は色蒼ざめ双の眼が窪んで、肉は落ち骨露はれ、此の世に生ける人とも見えなかつた。が、市九郎の心には不退轉の勇猛心頻りに燃え旺つて、たゞ一念に穿ち進む外は、何物もなかつた。一分でも、一寸でも岩壁の削り取られる每に、彼は歡喜の聲を揚げた。

市九郎は、たゞ一人取殘されたまゝに、又三年を經た。すると、里人達の注意は、再び市九郎の上に歸りかけて居た。彼等が、ホンの好奇心から、洞窟の深さを測つて見ると、全長六十五間、川に面する岩壁には、採光の窓が一つ穿たれ、もはや、此の大岩壁の三分の一は、主として市九郎の瘠腕に依つて、貫かれて居る事が判つた。

彼等は、再び驚異の眼を刮いた。過去の無智を恥ぢた。市九郎に對する尊崇の心は、再び彼等の心に復活した。やがて、寄進された十人に近い石工の槌の音が、再び市九郎の夫に和した。

又一年經つた。一年の月日が經つ裡に、里人達は、何時かしら目先の遠い出費を、悔い始めて居た。

寄進の人夫は、何時の間にか、一人減り二人減つて、おしまひには、市九郎の槌の音のみが、洞窟の闇を、打ち顫はして居た。が、傍に人が居ても、居なくても、市九郎の槌の力は變らなかつた。彼は、たゞ機械の如く渾身の力を入れて、槌を擧げ、渾身の力を以て、之を振り降ろした。彼は、自分の一身をさへ忘れて居た。主を殺した事も、剽賊を働いたことも、人を殺したことも、凡ては彼の記憶の外に、薄れてしまつて居た。

一年經ち、二年經つた。一念の動くところ、彼の瘠せた腕は、鐵の如く屈しなかつた。丁度、十八年目の終であつた。彼は、何時の間にか、岩壁の二分の一を穿つて居た。

里人は、此の恐ろしき奇蹟を見ると、もはや市九郎の仕事を、少しも疑はなかつた。彼等は、前二回の懈怠を、心から恥ぢ、七郷の人々合力の誠を盡くし擧つて市九郎を援け始めた。その歲、

中津藩の郡奉行が、巡視して、市九郎に對して、奇特の言葉を下した。近郷近在から、三十人に近い石工が蒐められた。工事は、枯葉を燒く火のやうに進んだ。

人々は、衰殘の姿いたく／＼しい市九郎に、

「もはや、そなたは石工共の統領を、なさりませ。自ら槌を振ふには及びませぬ。」と、勸めたが、市九郎は頑として應じなかつた。彼は、殪るれば槌を握つたまゝと、思つて居るらしかつた。彼は、三十の石工が、傍に働くのも知らぬやうに、寢食を忘れ、懸命の力を盡くすこと、少しも前と變らなかつた。

が、人々が市九郎に、休息を勸めたのも、無理ではなかつた。二十年にも近い間、日の光も射さぬ岩壁の奧深く、坐り續けた爲であらう。彼の兩脚は、永い端坐に傷み、何時の間にか屈伸の自在を缺いで居た。彼は、僅かの步行にも杖に縋らねばならなかつた。

その上、長い間、闇に坐して、日光を見なかつた爲でもあらう、また不斷に、彼の身邊に飛び散る碎けた石の碎片が、その眼を傷けた爲でもあらう、彼の兩眼は、朦朧として光を失ひ、物のあいろも辨へかねるやうになつて居た。

道がに、不退轉の市九郎も、身に迫る老衰を痛む心はあつた。身命に對する執着はなかつたけれど、中道にして殪れることを、何よりも無念と思つたからであつた。

「もう二年の辛抱ぢや。」と、彼は心の裡に叫んで、身の老衰を忘れようと、懸命に槌を振ふのであつた。

冒し難き大自然の威厳を示して、市九郎の前に、立ち塞がつて居た岩壁は、何時の間にか衰殘の乞食僧一人の腕に貫かれて、その中腹を穿つ洞窟は、命ある者の如く、一歩その核心を貫かんとして居るのであつた。

四

市九郎の健康は、過度の勞働に依つて、痛ましく傷けられて居たが、彼にとつて、夫よりももつと恐ろしい敵が、彼の生命を狙つて居るのであつた。

市九郎の爲に、非業の横死を遂げた中川三郎兵衞は、家臣の爲に殺害された爲、家事不取締とあつて、家は取潰され、その時三歳であつた一子實之助は、緣者の爲に養ひ育てられる事になつた。

實之助は、十三になつた時、初めて自分の父が、非業の死を遂げたことを聞いた。殊に、相手が、對等の士人でなくして、自分の家に養はれた奴僕であることを知ると、少年の心は、無念の憤に燃えた。彼は、即座に復讐の一義を、肝深く銘じた。彼は、走せて柳生の道場に入つた。十九の年に、免許皆傳を許されると、彼は直ちに報復の旅に上つたのである。若し、首尾よく本懷を達して歸れば、一家再興の肝煎もしようと云ふ、親類一同の激勵の言葉に送られながら。

實之助は、馴れぬ旅路に、多くの艱難を苦しみながら、諸國を遍歷して、只管敵市九郎の所在を求めた。市九郎を、たゞ一度さへ、見た事もない實之助に取つては、夫は雲を掴むが如き覺束

なき捜索であつた。五畿内東海東山山陰山陽北陸南海と、彼は漂泊の旅路に、年を送り年を迎へ、二十七の年迄空虚な遍歴の旅を續けた。敵に對する怨も憤も、旅路の艱難に消磨せんとすること度々であつた。が、非業に殪れた父の無念を思ひ、中川家再興の重任を考へると、奮然と志を振ひ興すのであつた。

江戸を立つてから、丁度九年目の春を、彼は福岡の城下に迎へた。本土を空しく尋ね歩いた後に、邊陲の九州をも探つて見る氣になつたのである。

福岡の城下から、中津の城下に移つた彼は、二月に入つた一日宇佐八幡宮に賽して、本懐の一日も早く達せられんことを祈念した。實之助は、參拜を終へてから境内の茶店に憩うた。其時に、ふと彼は傍の百姓體の男が、居合せた參詣客に、

「その御出家は、元は江戸から來たお人ぢやげな。若い時に、人を殺したのを懺悔して、諸人濟度の大願を起したさうぢやが、今云うた樋田の刳貫は、此の御出家一人の力で出來たものぢや。」と、語るのを耳にした。

此の話を聽いた實之助は、九年此方未だ感じなかつたやうな興味を覺えた。彼は、やゝ焦き込みながら、

「卒爾ながら、少々物を訊ぬるが、その出家と申すは、年の頃は、何程位ぢや。」と、訊いた。その男は、自分の談話が、武士の注意を惹いた事を、光榮であると思つたらしく、

「左様でムいますな。私はその御出家を拜んだ事は、ムいませぬが、人の噂では、もう六十に近いと申します。」

「丈は高いか、低いか。」と、實之助は疊みかけて訊いた。

「夫もしかとは、判りませぬ。何樣、洞窟の奥深く居られる故、しかとは判りませぬ。」

「その者の俗名は、何と申したか存ぜぬか。」

「夫も、とんと判りませんが、お生れは、越後の柏崎で、若い時に、江戸へ出られたさうでムります。」と、百姓は答へた。

玆迄聽いた實之助は、躍り上つて欣んだ。彼が、江戸を立つ時に、親類の一人は、敵は越後柏崎の生れ故、故郷へ立ち廻るかも計りがたい、越後は一入心を入れて探索せよと云ふ、注意を受けて居たのであつた。

實之助は、之ぞ正しく、宇佐八幡宮の神託なりと勇み立つた。彼はその老僧の名と、山國谿に向ふ道を訊くと、もはや八つ刻を過ぎて居たにも拘はらず、必死の力を双脚に籠めて、敵の所在へと急いだ。その日の初更近く、樋田村に着いた實之助は、直ちに洞窟へ立ち向はうかと思つたが、焦つてはならぬと思ひ返して、その夜は樋田驛の宿に、焦慮の一夜を明すと、翌日は早く起き出でゝ、輕裝して樋田の刳貫へと向つた。

刳貫の入口に着いた時、彼はそこに石の碎片を、運び出して居る石工に訊ねた。

「此の洞窟の中に、了海と云はるゝ御出家が、おはすさうぢやが、夫に相違ないか。」

「おはさないで何とせう。了海樣は、此の洞の主も同樣な方ぢや、ハ、、、。」と、石工は心なげに笑つた。

實之助は、本懷を達する事、はや眼前に在りと、欣び勇んだ。が、彼は周章てゝは、ならぬと

思つた。

「して、出入の口は茲一個所か。」と、訊いた。敵に、逃げられてはならぬと思つたからである。

「夫は知れた事ぢや。向うへ口を開ける爲に、了海樣は塗炭の苦しみを爲さつて居るのぢや。」と、石工が答へた。

實之助は、多年の怨敵が、嚢中の鼠の如く、目前に置かれてあるのを欣んだ。譬ひ、その下に使はるゝ石工が、幾人居ようとも、斬り殺すに何の雜作もあるべきと、勇み立つた。

「其方に少し賴みがある。了海どのに、御意得たい爲、遙々と尋ねて參つた者ぢやと、傳へて吳れ。」と、云つた。石工が、洞窟の中へはいつた後で、實之助は一刀の目くぎを濕した。彼は、心の裡で、生來初めて廻り逢ふ敵の容貌を想像した。洞門の開鑿を、統領して居ると云へば、五十は過ぎて居るとは云へ、筋骨たくましき男であらう。殊に、若年の頃には、兵法に疎からざりしと云ふのであるから、ゆめ油斷はならぬと思つて居た。

が、暫くして實之助の面前へと、洞門から出て來た一人の乞食僧があつた。夫は、出て來ると云ふよりも、蟇の如く這ひ出て來たと云ふ方が、適當であつた。夫は、人間と云ふよりも、むしろ人間の殘骸と云ふべきであつた。肉悉く落ちて骨露はれ、脚の關節以下は處々爛れて、永く正視するに堪へなかつた。破れた法衣に依つて、僧形とは知れるものゝ、頭髮は永く延びて皺だらけの額を掩うて居た。老僧は、灰色を爲した眼をしばたゝきながら、實之助を見上げて、

「老眼衰へはてまして、孰れの方とも辨へ兼ねまする。」と、云つた。

て居た。彼は、心の底から憎惡を感じ得るやうな惡僧を、欲して居た。然るに彼の前には、人間とも死骸とも付かぬ、半死の老僧が蹲まつて居るのである。實之助は、失望し始めた自分の心を勵まして、

「そのもとが、了海と云はるゝか。」と、息込んで訊いた。

「如何にも、左樣でムります。して其許は。」と、老僧は訝しげに實之助を見上げた。

「了海とやら、如何に僧形に身を窶すとも、よも忘れは致すまい。汝、市九郎と呼ばれし若年の砌、主人中川三郎兵衞を打つて立退いた覺があらう。某は、三郎兵衞の一子實之助と、申すものぢや。もはや、逃れぬ所と、覺悟せよ。」

と、實之助の言葉は、飽くまで落着いて居たが、其處に一歩も、許すまじき嚴正さがあつた。が、市九郎は實之助の言葉を聽いて、少しも駭かなかつた。

「如何さま、中川樣の御子息、實之助樣か。いやお父上を、打つて立退いた者、此の了海に相違ムりませぬ。」と、彼は自分を敵と狙ふ者に逢つたと云ふよりも、舊主の遺兒に逢つた親しさを以て答へたが、實之助は、市九郎の聲音に欺かれてはならぬと思つた。

「主を打つて立ち退いた非道の汝を打つ爲に、十年に近い年月を艱難の裡に過したわ。玆で會ふからは、もはや逃れぬ所と尋常に勝負せよ。」と、云つた。

市九郎は、少しも怯びれなかつた。もはや、期年の裡に成就すべき大願を見果てずして、死ぬことが稍悲しまれたが、夫もおのれが惡業の報であると思ふと、彼は死すべき心を定めた。

「實之助樣、いざお斬りなされい。お聞き及びもなされたらうが、之は了海奴が、罪亡しに、掘り穿たうと存じた洞門でムるが、十九年の歲月を費して、九分迄は竣工致した。了海、身を果つるとも、もはや年を重ねずして成り申さう。御身の手にかゝり、此の洞門の入口に血を流して人柱となり申さば、はや思ひ殘すこともムりませぬ。」と、云ひながら、彼は見えぬ眼をしばたたいたのである。

實之助は、此の半死の老僧に接して居ると、親の敵に對して懷いて居た憎しみが、何時の間にか、消え失せて居るのを覺えた。敵は、父を殺した罪の懺悔に、身心を粉に碎いて、半生を苦しみ拔いて居る。而も、自分が一度名乘りかけると、唯々として、命を捨てようとして居るのである。かゝる半死の老僧の命を取ることが、何の復讐であるかと、實之助は考へたのである。が、然し此の敵を打たざる限りは、多年の放浪を切り上げて、江戸へ歸るべきよすがは、なかつた。まして家名の再興などは、思ひも及ばぬ事であつたのである。實之助は、憎惡よりも、むしろ打算の心から、此の老僧の命を縮めようかと思つた。が、烈しい燃ゆるが如き憎惡を感ぜずして、打算から人間を殺すことは、實之助に取つて忍びがたい事であつた。彼は、消えかゝらうとする憎惡の心を、勵ましながら、打ち甲斐なき敵を打たうとしたのである。

その時であつた。洞窟の中から、走り出て來た五六人の石工は、市九郎の危急を見ると、挺身して彼を庇ひながら

「了海樣を何とするのぢや。」と、實之助を咎めた。彼等の面には仕宜に依つては、許すまじき色が歷々と見えた。

「仔細あつて、その老僧を敵と狙ひ、端なくも今日廻り合うて、本懐を達するものぢや、妨げ致すと餘人なりとも容赦は致さぬぞ。」と、實之助は凜然と云つた。彼等は實之助を取卷きながら、その裡に、石工の數は增え、行路の人々が、幾人となく立ち止つて、彼等は實之助を取卷きながら、市九郎の身體に、指の一本も、觸れさせまいと、銘々に敦圉き始めた。

「敵を打つ打たぬなどは、夫はまだ世に在る裡の事ぢや。見らるゝ通、了海どのは、染衣薙髮の身である上に、此の山國谿七鄕の者に取つては、持地菩薩の再來とも仰がれる方ぢや。」と、その中のある者は、實之助の敵打を、叶はぬ非望であるかのやうに云ひ張つた。

が、かう周圍の者から、妨げられると、實之助の敵に對する怒は何時の間にか、蘇つて居た。彼は武士の意地として、手を拱ねいて立ち去るべきではなかつた。

「讐ひ沙門の身なりとも、主殺しの大罪は免れぬぞ。親の敵を打つ者を妨げ致す者は、一人も容赦はない。」と、實之助は一刀の鞘を拂つた。實之助を圍ふ群衆も、皆悉く身構へた。すると、その時、市九郎は、しはがれた聲を張り上げた。

「皆の衆、お控へなされい。了海、打たるべき覺え十分御座る。此の洞門を穿つことも、たゞその罪滅しの爲ぢや。今かゝる孝子のお手にかゝり、半死の身を終る事、了海が一期の願ぢや。皆の衆妨げ無用ぢや。」かう云ひながら市九郎は、身を挺して實之助の傍に、ゐざり寄らうとした。兼々、市九郎の强剛なる意志を、知りぬいて居る周圍の人々は、彼の決心を翻すべき由もないのを知つた。市九郎の命、玆に了るかと思はれた。その時に、石工の統領が、實之助の前に進み出でながら、

「御武家様も、お聞き及びでもムらうが、此の刳貫は了海樣、一生の大誓願にて、二十年に近き御辛苦に身心を碎かれたのぢや。いかに、御自身の惡業とは云へ、大願成就を目前に置きながら、お果てなさるゝこと、如何ばかり無念であらう。我等の擧つてのお願ひは、長くとは申さぬ、此の刳貫の通じ申す間、了海樣のお命を、我等に預けては下さらぬか。刳貫さへ通じた節は、即座に了海樣を存分になさりませ。」と、彼は誠を表して哀願した。群衆は、口々に

「ことわりぢや／＼。」と、贊成した。

實之助も、さう云はれて見ると、その哀願を聽かぬ譯には、行かなかつた。今此處で、仇を討たうとして、群衆の妨害を受けて不覺を取るよりも、刳貫の竣功を待つたならば、今でさへ自ら進んで討たれようと云ふ市九郎が、義理に感じて首を授けるのは、必定であると思つた。又さうした打算から離れても、仇とは云ひながら此の老僧の大誓願を遂げさしてやるのも、決して不快なことではなかつた。實之助は、市九郎と群衆とを等分に見ながら、

「了海の僧形にめでゝその願ひ許して取らさう。番へた言葉は忘れまいぞ。」と、云つた。

「念もないことで御座る。一分の穴でも、一寸の穴でも、此の刳貫が向う側へ通じた節は、その場を去らず了海樣を討たさせ申さう、夫迄はゆる／＼と、此の邊りに御滯在なされませ。」と、石工の棟梁は、穩かな口調で云つた。

市九郎は、此の紛擾が無事に解決が付くと、夫に依つて徒費した時間が如何にも惜しまれるやうに、にじりながら洞窟の中へ這入つて行つた。

實之助は、大切の場合に思はぬ邪魔が入つて、目的が達し得なかつたことを憤つた。彼は如何

ともし難い鬱憤を抑へながら、石工の一人に案内せられて、木小屋の裡へ入つた。自分一人になつて考へると、仇を目前に置きながら、討ち得なかつた自分の腑甲斐なさを、無念と思はずには居られなかつた。彼の心は何時の間にか焦ら立たしい憤りで一杯になつて居た。彼は、もう刳貫の竣成を待つと云つたやうな、敵に對する緩かな心を全く失つてしまつた。彼は今宵にも洞窟の中へ忍び入つて、市九郎を討つて立ち退かうと云ふ決心の臍を固めた。が、實之助が市九郎の張り番をして居るやうに、石工達は實之助を見張つて居た。

　最初の二、三日を、心にもなく無爲に過したが、丁度五日目の晩であつた。毎夜の事なので、石工達も警戒の眼を緩めたと見え、丑に近い頃には何人もいぎたない眠に入つて居た。實之助は、今宵こそと思ひ立つた。彼は、瓦破と起き上ると、枕元の一刀を引き寄せて、靜に木小屋の外に出た。夫は早春の夜の月が冴えた晩であつた。山國川の水は月光の下に蒼く渦卷きながら流れて居た。が、周圍の風物には眼も呉れず、實之助は、足を忍ばせて潛かに洞門に近づいた。削り取つた石塊が、所々に散らばつて、歩を運ぶ度毎に足を痛めた。

　洞窟の中は、入口から來る月光と、所々に刳り明けられた窓から射し入る月光とで、所々ほの白く光つて居るばかりであつた。彼は右方の岩壁を手探り〱奥へ〱と進んだ。

　入口から、二町ばかり進んだ頃、ふと彼は洞窟の底から、クワッ〱と間を置いて響いて來る音を耳にした。彼は最初夫が何であるか判らなかつた。が、一歩進むに從つて、その音は擴大して行つて、おしまひには洞窟の中の夜の寂靜の裡に、こだまする迄になつた。夫は、明かに岩壁に向つて鐵槌を下す音に相違なかつた。實之助は、その悲壯な、凄みを帶びた音に依つて、自分

の胸が烈しく打たれるのを感じた。奥に近づくに從つて、玉を碎くやうな鋭い音は、洞壁の周圍にこだまして、實之助の聽覺を、猛然と襲つて來るのであつた。彼は、此の音をたよりに這ひながら近づいて行つた。此の槌の音の主こそ、敵了海に相違あるまいと思つた。私に一刀の鯉口を濕しながら、息を潛めて寄り添うた。その時、ふと彼は槌の音の間々に囁くが如く、うめくが如く、了海が、經文を誦する聲を聞いたのである。

そのしはがれた悲壯な聲が、水を浴びせるやうに實之助に徹して來た。深夜、人去り、草木眠つて居る中に、たゞ暗中に端坐して鐵槌を振つて居る了海の姿が、墨の如き闇にあつて尙、實之助の心眼に、歷々として映つて來た。夫は、もはや人間の心ではなかつた。喜怒哀樂の情の上にあつて、たゞ鐵槌を振つて居る勇猛精進の菩薩心であつた。實之助は、握りしめた太刀の柄が、何時の間にか緩んで居るのを覺えた。彼はふと、我に歸つた。旣に佛心を得て、衆生の爲に、碎身の苦を嘗めて居る高德の聖に對し、深夜の闇に乘じて、ひはぎの如く、獸の如く、瞋恚の劍を拔きそばめて居る自分を顧ると、彼は、强い戰慄が身體を傳うて流れるのを感じた。

洞窟を搖がせるその力强い槌の音と、悲壯な念佛の聲とは、實之助の心を散々に打ち碎いてしまつた。彼は、潔く竣成の日を待ち、その約束の果さるゝのを待つより外はないと思つた。

實之助は、深い感激を懷きながら、洞外の月光を目指し、洞窟の外に這ひ出たのである。

其の事があつてから間もなく、刳貫の工事に從ふ石工の裡に、武家姿の實之助の姿が見られた。彼はもう、老僧を闇打にして、立退かうと云ふやうな險しい心は、少しも持つて居なかつた。了

海が逃も隱れもせぬことを知ると、彼は好意を以て了海が、その一生の大願を成就する日を、待つてやらうと思つて居た。

が、それにしても茫然と待つて居るよりも、自分も此の大業に一臂の力を盡す事に依つて、幾何かでも復讐の期日が短縮せられる筈である事を悟ると、實之助は自ら石工に伍して、槌を振ひ始めたのである。

敵と敵とが、相並んで槌を下した。實之助は、本懷を達する日の一日も早かれと、懸命に槌を振つた。了海は實之助が出現してからは、一日も早く大願を成就して孝子の願を叶へてやりたいと思つたのであらう。彼は、又更に精進の勇を振つて、狂人のやうに岩壁を打ち碎いて居た。その裡に、月が去り月が來た。實之助の心は、了海の大勇猛心に、動かされて、彼自ら、刳貫の大業に讐敵の恨みを、忘れようとし勝であつた。

石工共が、晝の疲れを休めて居る眞夜中にも、敵と敵とは相並んで、默々として槌を振つて居た。

夫は了海が、樋田の刳貫に第一の槌を下してから、二十一年目、實之助が、了海に廻り合つてから一年六ケ月を經た延享三年九月十日の夜であつた。此の夜も石工どもは、悉く小屋に退いて、了海と實之助のみ終日の疲勞にめげず、懸命に槌を振つて居た。その夜九つに近き頃了海が、力を籠めて振り下した槌が、朽木を打つが如く何の手答もなく力餘つて、槌を持つた右の掌が岩に當つたので、彼は「アッ」と、思はず聲を上げた。その時であつた。了海の朦朧たる老眼にも、紛れなくその槌に破られたる小さき穴から、月の光に照されたる山國川の姿が、歷々と映つたの

である。了海は「おう！」と、全身を顫はせるやうな名状しがたき叫聲を擧げたかと思ふと、夫につゞいて狂したかと思はれるやうな歡喜の泣笑が、洞窟を物凄く動搖めかしたのである。

「實之助どの。御覽なされい。二十一年の大誓願端なくも今宵成就いたした。」かう云ひながら、了海は實之助の手を取つて、小さい穴から山國川の流を見せた。その穴の眞下に黑ずんだ土の見えるのは岸に添ふ街道に紛れもなかつた。敵と敵とは、そこに手を執り合うて、大歡喜の涙に咽んだのである。が、暫くすると了海は身を退つて、

「いざ、實之助殿、約束の日ぢや。お斬りなされい。かゝる法悅の眞中に往生致すなれば、極樂淨土に生るゝこと、必定疑ひなしぢや。いざお斬りなされい。明日ともなれば、石工共が、妨げを致さう、いざお斬りなされい。」と、彼のしはがれた聲が洞窟の夜の空氣に響いた。が、實之助は、了海の前に手を拱ねいて坐つたまゝ、涙に咽んで居るばかりであつた。心の底から湧き出づる歡喜に泣く凋びた老僧の顏を見て居ると、彼を敵として殺す事などは、思ひ及ばぬ事であつた。敵を打つなどゝ云ふ心よりも、此の羸弱い人間の双の腕に依つて成し遂げられた偉業に對する驚異と感激の心とで、胸が一杯であつた。彼はゐざり寄りながら、再び老僧の手を執つた。二人は其處に凡てを忘れて、感激の涙に咽び合うたのであつた。

藤十郎の戀

元祿と云ふ年號が、何時の間にか十餘りを重ねたある年の二月の末である。

都では、春の匂ひが凡ての物を包んで居た。つい此の間迄は、頂上の處丈は、斑に消え殘つて居た叡山の雪が、春の柔い光の下に解けてしまつて、跡には薄紫を帶びた黄色の山肌が、くつきりと大空に浮んで居る。その空の色迄が、冬の間に腐つたやうな灰色を、洗ひ流して日一日緣に冴えて行つた。

鴨の河原には、丸葉柳が芽ぐんで居た。その礫の間には、自然咲の菫や、蓮華が各自の小さい春を領して居た。河水は、日増に水量を加へて、輕い藍色の水が、處々の川瀨にせかれて、淙々の響を揚げた。

黑木を賣る大原女の暢びやかな聲までが春らしい心を唆つた。江戸へ下る西國大名の行列が、毎日のやうに都の街々を過ぎた。彼等は三條の旅宿に二三日の逗留をして、都の春を十分に樂しむと、また大鳥毛の槍を物々しげに振立てゝ、三條大橋の橋板を、踏み轟かしながら、遙な東路へと下るのであつた。

東國から、九州四國から、また越路の端からも、本山參りの善男善女の群が、ぞろ〳〵と都をさして續いた。そして彼等も春の都の渦卷の中に、幾日かを過すのであつた。

その裡に、花が咲いたと云ふ消息が、都の人々の心を騷がし始めた。祇園清水東山一帶の花が先づ開く、嵯峨や北山の花が之に續く、かうして都の春は、愈々爛熟の色を爲すのであつた。

が、その年の都の人達の心を、一番烈しく狂はせて居たのは、四條中島都萬太夫座の坂田藤十郎と山下半左衞門座の中村七三郎との、去年から持越しの競爭であつた。

三ヶ津の總藝頭とまで、讃へられた坂田藤十郎は傾城買の上手として、やつしの名人としては天下無敵の名を擅にして居た。が、去年霜月、半左衞門の顔見世狂言に、東から上つた少長中村七三郎は、江戸歌舞伎の統領として、藤十郎と同じくやつしの名人であつた。二人は同じやつしの名人として、江戸と京との歌舞伎の爲にも、烈しく相爭はねばならぬ宿縁を、持つて居るのであつた。

京の歌舞伎の役者達は、中村七三郎の都上りを聽いて、皆異常な緊張を示した。が、その人達の期待や恐怖を裏切つて七三郎の顔見世狂言は、意外な不評であつた。見物は口々に

「江戸の名人ぢや、と云ふ程に、何ぞ珍らしい藝でもするのかと思つて居たに、都の藤十郎には及び付かぬ腕ぢや。」と罵つた。七三郎を譏しる者は、たゞ素人の見物丈ではなかつた。彼の舞臺を見た役者達迄も、

「江戸の少長は、評判倒れの御仁ぢや。尤も江戸と京とでは評判の目安も違ふほどに江戸の名人は、京の上手にも及ばぬものぢや。所詮物眞似狂言は都のものと極はまつた。」と、勝誇るやうに云ひ振れた。が、七三郎を譏しる噂が、藤十郎の耳に入ると、彼は眉を顰めながら、

「われらの見る所は、また別ぢや。少長どのは、まことに至藝のお人ぢや。われらには、怖ろしい大敵ぢや。」と、只一人世評を斥けたのであつた。

果して藤十郎の評價は、狂つて居なかつた。顏見世狂言にひどい不評を招いた中村七三郎は、年が改まると初春の狂言に、『傾城淺間ヶ嶽』を出して、巴之丞の役に扮した。七三郎の巴之丞の評判は、すさまじいばかりであつた。

二

藤十郎は、得意の夕霧伊左衞門を出して、之に對抗した。二人の名優が、舞臺の上の競爭は、都の人々の心を湧き立たせるに十分であつた。が新しき物を追ふのは、人心の常である。口性なき京童は、

「藤十郎どのゝ伊左衞門は、いかにも見事ぢや、が、われらは幾度見たか數へられぬ程ぢや。去年の彌生狂言も慥か伊左衞門ぢや。もう伊左衞門には堪能いたして居るわ。それに比ぶれば、七三郎どのの巴之丞は、都にて初ての狂言ぢや。京の濡事師とはまた違うて、やさしい裡にも、東男のきつい所があるのが、てんと堪らぬ所ぢや。」と口々に云ひ囃した。

動き易い都の人心は、十年讃嘆し續けた藤十郎の王座から、ともすれば離れ始めさうな氣勢を示した。萬太夫座の木戸よりも、半左衞門座の木戸の方へと、より澤山の群衆が、流れ始めて居た。

春狂言の期日が盡きると、萬太夫座は直ぐ千秋樂になつたにも拘らず、半左衞門座は尙打ち續けた。二月に入つても客足は少しも落ちなかつた。二月が終りになつて、愈々彌生狂言の季節が、近づいて來たのにも拘はらず、七三郎は尙巴之丞の役に扮して、都大路の人氣を一杯に背負うて

居た。

「半左衞門座では、彌生狂言も『傾城淺間ヶ嶽』を打ち通すさうぢやが、かやうな例は、玉村千之丞河内通ひの狂言に、百五十日打ち續けて以來、絶えて聞かぬ事ぢや。七三郎どのゝ人氣は、前代未聞ぢや。」と、巷の風說は、たゞ此の沙汰ばかりのやうであつた。

かうした噂が、かまびすしくなるにつれ、私に腕を拱いて考へ始めたのは、坂田藤十郎であつた。

三ヶ津總藝頭と云ふ美稱を、長い間享受して來た藤十郎は、自分の藝に就ては、何等の不安もないと共に、十分な自信を持つて居た。過ぐる未年に才牛市川團十郎が、日本隨市川のかまびすしい名聲を擔うて、東からはる〴〵と、都の早雲長吉座に上つて來た時も、藤十郎の自信はビクともしなかつた。『お江戸團十郎見しやいな。』と、江戸の人々が誇る此の珍客を見る爲めに、都の人々が雪崩を爲して、長吉座に押し寄せて行つた時も、藤十郎は少しも騒がなかつた。殊に、彼が初めて團十郎の舞臺を見た時に、彼は心の中で竊に江戸の歌舞伎を輕蔑した。彼は、團十郎が一流編み出したと云ふ荒事を見て、何と云ふ粗野な興ざめた藝だらうと思つて、彼の腹心の弟子の山下京右衞門が、

「太夫樣、團十郎の藝をいかゞ思召さる、江戸自慢の荒事とやらを何う思召さる。」と訊いた時、彼は愼ましやかな苦笑を洩しながら「實事の奧義の解せぬ人達のする事ぢや。また實事の面白さの解せぬ人達の見る芝居ぢや。」と、一言の下に貶し去つた。が今度の七三郎に對しては、才牛をあしらうたやうには行かなかつた。

三

と、云つて藤十郎は、妄に七三郎を恐れて居るのではない。もとより、國十郎の幼稚な兒騙しにも似た荒事とは違うて、人間の眞實な動作を宛らに、模して居る七三郎の藝を十分に尊敬もすれば、恐れもした。が、藤十郎は藝能と云ふ點からだけでは、自分が七三郎に微塵も劣らないばかりでなく、寧ろ右際勝りであることを十分に信じた。從つて、今迄足り滿ちて居た藤十郎の心に不安な空虚と不快な動搖とを植ゑ付けたのは、七三郎との對抗などゝ云ふ事よりも、もつと深いもつと本質的なある物であつた。

彼は、二十の年から四十幾つと云ふ今迄、何の不安もなしに、濡事師に扮して來た。そして、藤十郎の傾城買と云へば、龍骨車にたよる里の童にさへも、聞えて居る。また京の三座見物達も藤十郎の傾城買の狂言と言へば、何時もながら惜し氣もない喝采を送つて居た。彼が、伊左衞門の紙衣姿になりさへすれば、見物はたわいもなく喝采した。少しでも客足が薄くなると、彼は定まつて、伊左衞門に扮した。而も、彼の伊左衞門役は、トランプの切札か何かのやうに、多くの見物と喝采とを、藤十郎に保證するのであつた。

が、彼は心の裡で、何時となしに、自分の藝に對する不安を感じて居た。いつも、同じやうな役に扮して、舌たるい傾城を相手の臺詞を云ふことが、彼の心の中に、ぼんやりとした不快を起すことが度重なるやうになつて居た。が、彼は未だいゝだらう、未だいゝだらうと思ひながら一日延ばしのやうに、自分の仕馴れた喝采を獲るに極つた狂言から、脫け出さうと云ふ氣を起さな

かつたのである。

　かうした藤十郎の心に、怖ろしい警鐘は到頭傳へられたのだ。「また何時もながら伊左衞門か、藤十郎どのゝ紙衣姿は、もう幾度見たか、數へ切れぬ程ぢや。」と、云ふ巷の評判は、藤十郎に取つては致命的な言葉であつた。彼が、怖れたのは七三郎と云ふ敵ではなかつた。彼の大敵は、彼自身の藝が行き詰まつて居ることである。今迄は、比較される物のない爲に、彼の藝が行き詰まつて居る事が、無智な見物には分らなかつたのである。彼は、七三郎の巴之丞を見た時に、傾城買の世界とは、丸切り違つた新しい世界が、舞臺の上に、浮き出されて居る事を感じない譯には、行かなかつた。たゞ浮ついた根も葉もないやうな傾城買の狂言とは違うて、一歩深く人の心の裡に踏み入つた世界が、舞臺の上に展開されて來るのを認めない譯には行かなかつた。見物は、傾城買の狂言から、たわいもなく七三郎の舞臺へ、惹き付けられて行つた。が、藤十郎は、見物のたわいもない妄動の裡に、深い尤もな理由のあるのを、看取しない譯には行かなかつたのである。

　小手先の藝の問題ではなかつた。彼は、もつと深い大切な所で、若輩の七三郎に一足、取殘されようとしたのである。七三郎の巴之丞が、洛中洛外の人氣を唆つて、彌生狂言をも、同じ藝題(だしもの)で打ち續けると云ふ噂を聞きながら、藤十郎は烈しい焦躁と不安の胸を抑へて、ぢつと思案の手を拱ぬいたのである。その時に、ふと彼の心に浮んだのは、浪華(なには)に住んで居る近松門左衞門(ちかまつもんざゑもん)の事であつた。

四

夫は、二月のある宵であつた。四條中東の京の端、鴨川の流近く瀬鳴の音が、手に取つて聞えるやうな茶屋宗清の大廣間で、萬太夫座の彌生狂言の顏つなぎの宴が開かれて居た。

廣間の中央、床柱を背にして、銀燭の光を眞向に浴びながら、どんすの鏡蒲團の上に、悠つたりと坐り、心持脇息に身を靠せて居るのは、坂田藤十郎であつた。茶せんに結つた色白の面は、四十を越した男とは、思はれぬ程の美しさに輝いて見えた。下には鼠縮緬の引かへしを着、上には黑羽二重の兩面芥子人形の加賀紋の羽織を打ちかけ、宗傳唐茶の疊帶をしめて居た。藤十郎の右に坐つて居るのは、一座の若女形の切波千壽であつた。白小袖の上に、紫縮緬の二つ重ねを着、虎膚天鵞絨の羽織に、紫の野良帽子をいたゞいた風情は、宛ら女の如く艶めかしい、此の二人を圍んで、一座の道化方、くわしや方、若衆方などの人々が、夫々華美な風俗の限を盡して居並んで居た。その中に、只一人千筋の羽織を着た質素な風俗をした二十五六の男は、萬太夫座の若太夫であつた。彼は、先刻から酒席の間を、彼方此方と廻つて、酒宴の興を取持つて居たが、漸く酩酊したらしい顏に滿面の微笑を湛へながら、藤十郎の前に改めて畏まると、恐る〳〵酒盃を前に出した。

「さあ、もう一つお受け下されませ。今度の彌生狂言は、近松樣の趣向で、歌舞伎始まつての珍らしい狂言ぢやと、都の中はたゞ此噂ばかりぢやげに厶ります。傾城買の所作は日本無雙と云はれた御身樣ぢやが、道ならぬ戀のいきかたは、又格別の御思案が厶りませうなハ、、、。」と、

巧みな追從笑ひに語尾を濁した。と、藤十郎と居並んで居る切波千壽は、急に美しい微笑を洩しながら、

「ホンに若太夫殿の云ふ通ぢや。藤十郎様には、その邊の御思案が、もうちやんと付いて居る筈ぢや。われなどは、たゞ藤十郎様に操られて傀儡のやうに動けばよいのぢや。」と、合槌を打つた。

藤十郎は、若太夫の差した酒盃を、受け取りはしたものゝ、彼の言葉にも、千壽の言葉にも、一言も返しをしなかつた。彼は、酒の味が、急に苦くなつたやうに、心持顔を顰めながら、グッと一氣にその酒盃を飲み乾したばかりであつた。

彼は、今宵の酒宴が、始まつて以來、何氣ない風に酒盃を重ねては居たものゝ、心の裡には、可なり烈しい藝術的な苦悶が、渦卷いて居るのであつた。

彼が、近松門左衞門に、急飛脚を飛ばして、割なく頼んだことは、即座に叶へられたのであつた。今迄の傾城買とは、裏と表のやうに、打ち變つた狂言として、門左衞門が藤十郎に書與へた狂言は、浮ついた陽氣なたわいもない傾城買の濡事とは違うて、命を賭しての色事であつた。打ち沈んだ陰氣な、懸命な命を捨てゝする濡事であつた。藝題は『大經師昔暦』と云つて、京の人々の、記憶にはまだ新しい室町通の大經師の女房おさんが、手代茂右衞門と不義をして、粟田口に刑死する迄の、呪はれた命懸けの戀の狂言であつた。

藤十郎の藝に取つて、其處に新しい世界が開かれた。が夫と同時に、前代未聞の狂言に對する不安と焦慮とは、自信の强い彼の心にも萌さない譯には行かなかつた。

五

藤十郎の心に、さうした屈託があらうとは、夢にも氣付かない若太夫は、芝居國の國王たる藤十郎の機嫌を、如何にもして取結ばうと思つたらしく、

「此の狂言に比べましては、七三郎殿の『淺間ヶ嶽』の狂言も童たらしのやうに、曲もなう見えまするわ。前代未聞の密夫の狂言とは、眞に門左衞門樣の御趣向ぢや。夫に付きましても、坂田樣にはかうした變つた戀のお覺えもムりませうなハ、、、。」と、時にとつての座興のやうに高々と笑つた。

今迄、おし默つて居た藤十郎の堅い唇が、綻びたかと思ふと、「左樣な事、何のあつてよいものか。」と、苦り切つて吐き出すやうに云つた。「藤十郎は、生れながらの色好みぢやが、まだ人の女房と念頃した覺えはムらぬわ。」と、冷めたい苦笑を洩しながら付け加へた。若太夫は、座興の積で云つた諧謔を、眞向から突き飛ばされて、興ざめ顏に默つてしまつた。

傍に坐つて居た切波千壽は、一座が白けるのを恐れたのであらう。取做し顏に、微笑を含み乍ら、

「ほんに、坂田樣の云はれる通ぢや。此の千壽とても、主ある女房と、念ごろした事はないわいな。」と、云ひながら女のやうに美しい口を掩うた。

が、藤十郎は、前よりも一際、苦り切つたまゝであつた。彼は今心の裡で、僅か三日の後に迫つた初日を控へて、藝の苦心に肝膽を碎いて居たのである。彼に取つて、其處に可なり危險な試

金石が横はつて居る。『あれ見よ、密夫の狂言とは、名ばかりで相も變らぬ藤十郎ぢや。』と、云はれては、自分の藝は永久に廢れるのだと、彼は心の裡に、覺悟の臍を堅めて居た。たゞ、相手の傾城が、人妻に變つたばかりで、昔ながらの藤十郎だとは、夢にも云はせてはならないと、心の裡に思ひ定めて居た。

が、夫かと云つて、藤十郎は、自分で口に出して云つた通、道ならぬ戀をした覺はさら〳〵なかつたのである。元より、歌舞伎役者の常として、色子として舞臺を踏んだ十二三の頃から、數多くの色々の色情生活を閲して居る。四十を越えた今日迄には幾十人の女を知つたか分らない。彼の姿繪を、床の下に敷きながら、焦れ死んだ娘や、彼に對する戀の叶はぬ悲しみから、淸水の舞臺から身を投げた女さへない事はない。が、かうした生活にも拘らず、天性律義な藤十郎は、若い時から、不義非道な色事には、一指をだに染めることをしなかつた。さうした誘惑に接する毎に、彼は猛然として、之と戰つて來て居る。彼が、役者にも似合はず『藤十郎殿は、物堅い御仁ぢや。』と、云はれて、芝居國の長者として、周圍から、尊敬されて居るのも、一つにはかうした譯からでもあつた。

從つて、彼は、過去の經驗から、人妻を盜むやうな必死な、空恐ろしい、夫と同時に身を燒くやうに烈しい戀に近い場合を、色々と尋ねて見たが、彼のどの戀もどの戀も極めて正當な、物柔かな戀であつて、冬の海のやうに恐ろしい戀や、夏の太陽のやうな烈しい戀の場合は、何う考へても頭に浮んでは來なかつた。

六

傾城買の經緯(いきさつ)なれば、何んなに微妙にでも、演じ得ると云ふ自信を持つた藤十郎も、人妻との呪はれた悪魔的な、道ならぬ然し懸命な必死の戀を、舞臺の上に何う演活(しいか)してよいかは、ほとほと思案の及ばぬ所であつた。之迄の歌舞伎狂言と云へば、傾城買のたわいもない戯れか、でなければ物眞似の道化に盡きて居た爲に、かうした密夫(みそかを)の狂言などに、頼(たの)まれるやうな前代の名優の仕殘した型などは、微塵も殘つて居なかつた。夫かと云つて、彼はかうした場合に、打ち明けて智慧を借るべき、相談相手を持つて居なかつた。彼の茂右衛門に、おさんを勤める切波千壽は、天性の美貌一つが、彼の舞臺の凡てゞあつた。たゞ、藤十郎の指圖のまゝに、傀儡のごとく動くのが、彼の演伎の凡てゞあつたのだ。

藤十郎は、自分自身の肝腦(あたま)を搾るより外には、工夫の仕方もなかつたのである。

藤十郎の不機嫌の背後に、さうした根本的な屈託が、潜んで居るとは氣のつかない一座の人々は、白け始めようとする酒宴の座を、何うかして引き立たせようと、思つたのだらう、五十に手の屆きさうな道化方の老優は、傍に坐つて居た二十を出たばかりの、野良(やら)帽子(う)を着た美しい若衆方を促し立てながら、おどけた連舞(つれまひ)を舞ひ始めた。

藤十郎は、二人の舞を振向きもしないで、日頃には似ず、大杯を重ねて四度ばかり、したゝかに飲み乾すと、俄に發して來た醉に、座には得堪へられぬやうに、つと席に立ちながら、河原に臨んだ廣い縁に出た。

河原の闇の底を流れる川水が、ほのかな光を放つて居る外は、晦日に近い夜の空は曇つて、星一つさへ見えなかつた。聲ばかり飛び交うて居るかのやうに、闇のなかに千鳥が、ちゝと鳴きしきつて居た。

歌舞伎の長者として、王者のやうに誇を、持つて居た藤十郎の心も、蹴合せに負けた鷄のやうに悄氣切つてしまつて居た。彼が、座を立つた爲に、上からの壓迫の取れたやうに、急にはずみかけた、酒宴の席のさわがしいどよめきを、後にしながら、彼は知らず〱靜寂な場所を求めて、勝手を知つた宗清の部屋々々を通り拔けながら、奧の離座敷を志した。

母屋からは一段と、河原の中に突出て居る離座敷には、人の氣勢もなかつた。たゞほんのりと灯つて居る、絹行燈の光の裡に、美しい調度などが、春の夜に適しい艶めいた靜けさを保つて居た。藤十郎は、人影の見えぬのを心の中に欣んだ。彼は、床の間に置いてあつた脇息を、取り下すと、それに右の肱を靠せながら、身を横ざまに伸したのである。

が、騷々しい酒宴の席から、身を脫れた欣びは、直ぐ消えてしまつた。藝の苦心が再びひしひしと胸に迫つて來る。明日からは稽古が始まる。肝腎要の茂右衞門の行き方が、定らいでは相手のおさんも、其他の人々も何う動いてよいか、思案の仕樣もないことになる。己が工夫が拙うては、近松門左が心を碎いた前代未聞の狂言も、あたら京童の笑ひ草にならぬとも限らない。かう思ひながら、藤十郎は胸の中に渦卷いて居る、もどかしさを抑へながら、一途に心をその方へ振り向けようとあせつた。

その時である。母屋の方から、とん〱と離座敷を指して來る人の足音が、聞えて來た。

七

折角、さわがしい酒席を逃れて、求め得た靜かな場所で、藝の苦心を凝らさうと思つて居た藤十郎は、自分の方へ近づいて來る人の足音を聞いて、心持眉を顰めぬ譯には行かなかつた。が、近づいて來る足音の主は、此處に藤十郎が居ようなどゝは、夢にも氣付かないらしく、足早に長い廊下を通り抜けて、此部屋に近づくまゝに、女性らしい衣ずれの音をさせたかと思ふと、會釋もなく部屋の障子を押し開いた。が、其處に横たはつて居た藤十郎の姿を見ると、吃驚して敷居際に立ち竦んでしまつた。

「あれ、藤様は玆におはしたのか。これは〱いかい粗相を。」と、云ひながら、女は直ぐ障子を閉ざして、去らうとしたが、又立ち直つて、「ほんに、このやうに冷える處で、さうして御座つて、御風邪など召すとわるい。どれ、私が夜のものをかけて進ぜませう。」と、云ひながら、部屋の片隅の押入から、夜具を取り下ろさうとして居る。

藤十郎は、最初足音を聞いた時、召使の者であらうと思つたので、彼は寢そべつたまゝ、起き直らうとはしなかつた。が、夫が意外にも、宗清の主人宗山清兵衞の女房お梶であると知ると、彼は起き上つて、一寸居ずまひを正しながら、

「いや之は、いかい御雜作ぢやのう。」と、會釋をした。

お梶は、もう四十に近かつたが、宮川町の歌妓として、若い頃に嬌名を謳はれた面影が、そつくりと白い細面の顔に、あり〱と殘つて居る。淺黄絖の引かへしに折びろうどの帶をしめ、薄

色の絹足袋をはいた年增姿は、又なく艶に美しかつた。藤十郎は、昔から、お梶を知つて居る。若衆方の隨一の美形と云はれた藤十郎が美しいか、歌妓のお梶が美しいかと云ふ物爭ひは、二十年の昔には、四條の茶屋に遊ぶ大盡達の口に上つた事さへある。その頃からの馴染である。が、藤十郎は、今迄に、お梶の姿を心にとめて、見たこともない。たゞ路傍の花に對するやうな、淡淡たる一瞥を與へて居たに過ぎなかつた。

が、今宵は、此の人妻の姿が、云ひ知れぬ魅力を以て、ぐん／＼と彼の眼の中に、迫つて來るのを覺えた。密夫と云ふ彼にとつては、未だ踏んで見た事のない戀の領域の事を、此の四五日、一心に思ひ詰めて居た爲だらう。今迄は餘り彼の念頭になかつた人妻と云ふ女性の特別な種類が、彼の心に不思議な魅力を持ち始めて、今お梶の姿となつて、ぐん／＼迫つて來るやうに覺えた。

藤十郎のお梶を見詰める眸が、異常な興奮で、燃え始めたのは無論である。人妻であると云ふ道德的な柵が取拂れて、その古木が却つて、彼の慾情を培ふ、薪木として投ぜられたやうである。彼は、娘や後家や歌妓や遊女などに、相對した時には、かつふつ懷いた事のないやうな、不思議な物狂はしい情熱が、彼の心と身體とを、沸々燃やし始めたのである。

八

藤十郎の心にさうした、物狂はしい飈風が起つて居ようとは、夢にも氣付かないらしいお梶は押入れから白絖の夜着を取出すと、藤十郎の背後に廻りながら、ふうわりと着せかけた。

白鳥の胸毛か何かのやうに、暖い柔かい、夜着の感觸を身體一面に味つた時、藤十郎のお梶に

對する異常な興奮は、危く爆發しようとした。が、彼の律義な人格は、咄嗟に彼の慾情の妄動をきつぱりと、制し得たのである。藤十郎は、宗山淸兵衞の事を考へた。また、貞淑と云ふ噂の高いお梶の事を考へた。そして自分が、今迄色事をしながらも、正しい道を踏み外さなかつたと云ふ自分自身の誇を考へた。彼のお梶に對して懷いた嵐のやうな激動は、忽ち和ぎ始めたのである。

お梶は、平素(いつも)の通のお梶であつた。彼女は夜着を着せてしまふと「さあ、お休みなされませ。彼方(あちら)へ行つたら女どもに、水など運ばせませうわいな。」と、愛想笑ひを殘して足早に部屋を出ようとした。その刹那である。藤十郎の心にある悪魔的な思付がムラ〳〵と湧いて來た。夫は戀ではなかつた。夫は烈しい慾情ではなかつた。夫は、恐ろしいほど冷めたい理性の思付であつた。戀の場合には可なり臆病であつた藤十郎は、宛も別人のやうに、先刻の興奮は、丸切り噓であつたかのやうに、冷靜に、

「お梶どの、ちと待たせられい。」と、呼び止めた。

「何ぞ、外に御用があつてか。」と、お梶は無邪氣に、振り返つた。剃り落とした眉毛の後が青々と浮んで見える色白の美顏は、絹行燈の灯影を浴びて、ほんのりと艶めかしかつた。

「ちと、御意を得たいことがある程に、坐つてたもらぬか。」かう云ひながら、藤十郎は、心持ち女の方へ膝をすゝませた。

お梶は、藤十郎の息込み方に、少し不安を、感じたのであらう。藤十郎には、餘り近寄らないで、其處に置いてある絹行燈の蔭に、踞まるやうに坐つた。

「改まつて何の用ぞいのうおほゝゝ。」と、何氣なく笑ひながらも、稍面映ゆげに藤十郎の顏

を打ち仰いだ。藤十郎の聲音は、今迄とは打つて變つて、低いけれども、然しながら力強い響を持つて居た。

「お梶どの。別儀ではムらぬが、此の藤十郎は、そなたに二十年來隱して居た事がある。夫を今宵は是非にも、聽いて貰ひたいのぢや。思ひ出せば、古いことぢやが、そなたが十六で、われらが二十の秋ぢやつたが、祇園祭の折に、河原の掛小屋で二人一緒に、連舞を舞うたことを、よもや忘れはしやるまいなあ。われらが、そなたを見たのは、あの時が初めてぢや。宮川町のお梶どのと云へば、いかに美しい若女形でも、足下にも及ぶまいと、兼々人の噂に聽いて居たが、そなたの美しさがよもあれ程であらうとは、夢にも思ひ及ばなかつたのぢや。」と、かう云ひながら、藤十郎はその大きい眼を半眼に閉ぢながら、美しかつた青春の夢を、うつとりと追うて居るやうな眼付をするのであつた。

九

「其時からぢや。そなたを、世にも稀な美しい人ぢやと、思ひ染めたのは。」と、藤十郎は、お梶の方へ雙膝を進ませながら、必死の色を眸に浮べて、かう云ひ切つた。

藤十郎に呼び止められた時から、ある不安な期待に、胸をとゞろかせて居たお梶は最初は此の美しい男の口から、自分達の華やかな青春の日の、想出話を聽かされて、魅せられたやうに、ほのぼのと二つの頰を薄紅に染めて居たが、相手の言葉が、急な轉回を示してからは、その顏の色は刹那に蒼ざめて、蹲くまつて居る華奢な身體は、わなわなと戰き始めて居た。

ぬ女を刺し透す程に、銳く見詰めて居ながら、聲丈には、烈しい熱情に顫へて居るやうな響を持たせて、

藤十郎は、戀をする男とは、何うしても受取れぬ程の、澄んだ冷めたい眼付で、顏さへ擡げ得

「そなたを見染めた當座は、折があらば云ひ寄らうと、始終念じては居たものゝ、若衆方の身は親方の掟が嚴しうて、寸時も心には委せぬ身體ぢや。たゞ心は、燒くやうに思ひ焦れても、所詮は機を待つより外はないと、諦めて居る內に、二十の聲を聞くや聞かずに、そなたは淸兵衞殿の思はれ人となつてしまはれた。その折のわれらが無念は、今思ひ出しても、此胸が張り裂くるやうでおぢやるわ。」かう云ひながら、藤十郎は座にもえ堪へぬやうな、巧みな身悶えをして見せたが、さうした戀を語りながらも、彼の二つの眸丈は、相變らず爛々たる冷たい光を放つて、女の息づかひから容子までを恐ろしき迄に見詰めてゐる。

お梶の顏の色は、彼女の心の恐ろしい激動を宛らに、映し出して居た。一旦蒼ざめ切つてしまつた色が、反動的に段々薄赤くなると共に、その二つの眼には、熱病患者に見るやうな、直にも火が點きさうな凄じい色を湛へ始めた。

「人妻になつたそなたを戀ひ慕ふのは人間のする事ではないと、心で強う制統しても、止まらぬは凡夫の想ぢや。そなたの噂を聽くにつけ、面影を見るにつけ、二十年のその間、そなたの事を忘れた日は、たゞ一日もおぢやらぬわ。」彼は、一語一語に、一句一句に巧な、今迄の彼の舞臺上の凡ての演戲にも、打ち勝つた程の仕打を見せながら、而も人妻をかき口說く、恐怖と不安とを交へながら、小鳥のやうに竦んで居る女の方へ、詰め寄せるのであつた。

「が、此の藤十郎も、人妻に戀をしかけるやうな非道な事は、なすまじいと、明暮燃え熾る心をぢつと抑へて來たのぢやが、われらも今年四十五ぢや、人間の定命はもう近い。之程の戀を――二十年來偲びに偲んだこれ程の想を、此の世で一言も打ち明けいで、何時の世誰にか語るべきと、思ふに付けても、物狂はしうなる迄に、心が攪れ申して、かくの有樣ぢや。のう、お梶どの、藤十郎をあはれと思召さば、たつた一言情ある言葉を、なあ……」と、藤十郎は狂ふばかりに身悶えしながら、女の近くへ身をすり寄せて居る。たゞ戀に狂うて居る筈の、彼の瞳ばかりは、刃のやうに澄み切つて居た。

餘りの激動に堪へかねたのであらう、お梶は、

「わつ。」と、泣き俯してしまつた。

十

恐ろしい魔女が、その魅力の犧牲者を、見詰めるやうに、藤十郎は泣き俯したお梶を、ぢつと見詰めて居た。彼の唇の邊には、凄じい程の冷たい表情が浮んで居た。が、夫にも拘らず、聲と動作とは、戀に狂うた男に適しい熱情を、持つて居る。

「のう、お梶どの。そなたは、此の藤十郎の戀を、あはれとは思さぬか。二十年來、堪へ忍んで來た戀をあはれとは思さぬか。さても、強いお人ぢやのう。」かう云ひながら、藤十郎は、相手の返事を待つた。が、女はよゝと、すゝり泣いて居るばかりであつた。

灯を慕つて來た千鳥だらう。銀の鋏を使ふやうな澄んだ聲が、瀨音にも紛れず、手に取るやう

に聞えて來る。女も藤十郎も、おし默つたまゝ、暫くは時刻が移つた。

「藤十郎の切ない戀を、情なくするとは、さても氣强いお人ぢやのう、舞臺の上の色事では日本無雙の藤十郎もそなたにかゝつては、たわいもなう振られ申したわ。」と藤十郎は、淋しげな苦笑を洩した。

と、今迄泣き俯して居た女は、ふと面を上げた。

「藤様、今仰つた事は、皆本心かいな。」

女の聲は、消え入るやうであつた。その唇が微かに痙攣した。

「何の、てんごうを云うてなるものか、人妻に云ひ寄るからは、命を投げ出しての戀ぢや。」

と、いふかと思ふと、藤十郎の顏も、さつと蒼白に變じてしまつた。浮腰になつて居る彼の膝が、かすかに顫ひを帶び始めた。

必死の覺悟を定めたらしいお梶は、火のやうな瞳で、男の顏を一目見ると、いきなり傍の絹行燈の灯を、フッと吹き消してしまつた。

恐ろしい沈默が、其處にあつた。

お梶は、身體中の毛髮が悉く逆立つやうな恐ろしさと、身體中の血潮が悉く湧き立つやうな情熱とで、男の近寄るのを待つて居た。が、男の苦しさうな息遣ひが、聞えるばかりで、相手は身動きもしないやうであつた。お梶も居竦んだまゝ、身體をわなわなと顫はせて居るばかりであつた。

突如、藤十郎の立ち上る氣勢がした。お梶は、今こそと覺悟を定めて居た。が、男はお梶の傍

を、影のやうにすりぬけると、灯のない闇を、手探りに廊下へ出たかと思ふと、母屋の灯影を目的に獣のやうに、足速く走り去つてしまつたのである。

＊　　＊　　＊

闇の中に取殘されたお梶は、人間の女性が受けた最も皮肉な殘酷な辱しめを受けて、闇の中に石のやうに、突立つて居た。

惡戲としては、命取りの惡戲であつた。侮辱としては、此世に二つとはあるまじい侮辱であつた。が、お梶は、藤十郎から之程の惡戲や侮辱を受くる理由を、何うしても考へ出せないのに苦しんだ。夫と共に、此の恐ろしい誘惑の爲に、自分の操を捨てようとした――否、殆ど捨てゝしまつた罪の恐ろしさに、彼女は腸をずた〳〵に切られるやうであつた。

十一

酒宴の席に歸つた藤十郎は、人間の面とは思へないほどの、凄じい顔をして居た。が、彼は、勸められるまゝに大盃を五つ六つばかり飲み乾すと、血走つた眼に、切波千壽の方を向きながら、「千壽どの安堵めされい。藤十郎、此度の狂言の工夫が悉く成り申したわ。」と云ひながら、聲高に笑つて見せた。が、その聲は、地獄の亡者の笑ひ聲のやうにしはがれた空つぽな、氣味の惡い聲であつた。

＊　　＊　　＊

彌生朔日から、萬太夫座では愈々近松門左が書き下しの狂言の蓋が開かれた。藤十郎の茂右衞

門と切波千壽のおさんとの密夫の狂言は、恐ろしきまで眞に迫つて、洛中洛外の評判かまびすしく、正月から打ち續けて勝ち誇つて居た山下座の中村七三郎の評判も、月の前の螢火のやうに、見る影もなく消されてしまつた。

が、此興行の評判に連れて、京童の口にかうした插話が傳へられた。夫は、『藤十郎殿は、此度の狂言の工夫には、ある茶屋の女房に僞つて戀をしかけ、女が靡いて灯を吹き消す時、急いで逃れたとの事ぢやが、眞は三國一の名人の心掛だけある。』と云ふ噂であつた。

『僞にもせよ、藤十郎殿から戀をしかけられた女房も、三國一の果報者ぢや。』と、艶めいた京の女達は、かう云ひ添へた。

かうした噂迄が、愈が上に、此の狂言の人氣を唆つた。

來る日も、來る日も、潮のやうな見物が明け方から萬太夫座の周圍に渦を卷いて居た。

彌生の半ばであつたらう。或朝、萬太夫座の道具方が、樂屋の片隅の梁に、縊れて死んだ中年の女を見出した。夫は、紛れもなく宗清の女房お梶であつた。お梶は、宗清とは屋續きの萬太夫座に忍び入つて、其處を最期の死場所と定めたのである。その死因に就ても、京童は色々に、口性ない噂を立てた。が誰人も藤十郎の僞りの戀の相手が、貞淑の聞え高いお梶だとは思ひも及ばなかつた。

たゞ、お梶の死を聽いた藤十郎は、雷に打たれたやうに色を易へた。が彼は心の中で、

『藤十郎の藝の僞には、一人や二人の女の命は。』と、幾度も力強く繰り返した。が、さう繰り返して見たものゝ、彼の心に出來た目に見えぬ深手は、折にふれ、時にふれ彼を苛まずには居

なかつた。

お梶が、樂屋で縊れた事までが、萬太夫座の人氣を培つた。

お梶が、死んで以來、藤十郎の茂右衞門の藝は、愈々冴えて行つた。彼の瞳は、人妻を奪ふ罪深い男の苦惱を、ありくと刻んで居た。彼がおさんと暗闇で手を引き合ふ時、密夫の恐怖と不安と、罪の怖しさとが、身體一杯に溢れて居た。

其處には、藤十郎が茂右衞門か、茂右衞門が藤十郎か、何の差別もないやうであつた。恐らく藤十郎自身、人の女房に云ひ寄る恐ろしさを、肝に銘じて居た爲であらう。

形

攝津半國の主であつた松山新介の侍大將中村新兵衞は、五畿内中國に聞えた大豪の士であつた。

その頃、畿内を分領して居た筒井、松永、荒木、和田、別所など大名小名の手の者で、『鎗中村』を知らぬ者は、恐らく一人もなかつたゞらう。それほど、新兵衞はその扱き出す三間柄の大身の鎗の鋒先で、魁け殿の功名を重ねて居た。その上、彼の武者姿は戰場に於て、水際立つた華やかさを示して居た。火のやうな猩々緋の服折を着て、唐冠纓金の兜を被つた彼の姿は、敵味方の間に、輝くばかりのあざやかさを持つて居た。

「あゝ猩々緋よ唐冠よ」と敵の雜兵は、新兵衞の鎗先を避けた。味方が崩れ立つた時、激浪の中に立つ巖のやうに敵勢を支へて居る猩々緋の姿は、どれほど味方にとつて頼もしいものであつたか判らなかつた。又嵐のやうに敵陣に殺到するとき、その先登に輝いて居る唐冠の兜は、敵にとつてどれほどの脅威であるか判らなかつた。

かうして鎗中村の猩々緋と唐冠の兜は、戰場の華であり敵に對する脅威であり味方にとつては信賴の的であつた。

「新兵衞どの、折入つてお願ひがある。」と元服してからまだ間もないらしい美男の士は、新兵衞の前に手を突いた。

「何事ぢや、そなたとわれらの間に、左樣な辭儀は入らぬぞ。望みと云ふを、はやう云つて見い。」と育ぐくむやうな慈顏を以て、新兵衞は相手を見た。

その若い士は、新兵衞の主君松山新介の側腹の子であつた。そして、幼少の頃から、新兵衞が守役として、我子のやうに慈しみ育てゝ來たのであつた。

「外の事でもをりない。明日はわれらの初陣ぢやほどに、何ぞ華々しい手柄をして見たい。ついては御身樣の猩々緋と唐冠の兜を借してたもらぬか。あの服折と兜とを着て、敵の眼を驚かして見たう在る。」

「ハヽヽヽ、念もない事ぢや。」新兵衞は高らかに笑つた。新兵衞は、相手の子供らしい無邪氣な功名心を快く受け入れることが出來た。

「が、申して置く、あの服折や兜は、申さば中村新兵衞の形ぢやわ。そなたが、あの品々を身に着ける上からは、われらほどの肝魂を持たいでは叶はぬことぞ。」と云ひながら、新兵衞は又高らかに笑つた。

そのあくる日、攝津平野の一角で、松山勢は、大和の筒井順慶の兵と鎬を削つた。戰ひが始まる前いつものやうに猩々緋の武者が唐冠の兜を朝日に輝かしながら、敵勢を尻目にかけて、大きく輪乘をしたかと思ふと、駒の頭を立てなほして、一氣に敵陣に乘り入つた。

吹き分けられるやうに、敵陣の一角が亂れた處を、猩々緋の武者は鎗を付けたかと思ふと、早くも三四人の端武者を、突き伏せて、又悠々と味方の陣へ引かへした。

その日に限つて、黑皮縅の冑を着て、南蠻鐵の兜を被つて居た中村新兵衞は、會心の微笑を含みながら、猩々緋の武者の華々しい武者振を眺めて居た。そして自分の形だけすら之れほどの力

を持つて居ると云ふことに、可なり大きい誇を感じて居た。

彼は二番鎗は、自分が合はさうと思つたので、駒を乘り出すと、一文字に敵陣に殺到した。猩々緋の武者の前には、戰はずして浮足立つた敵陣が、中村新兵衞の前には、びくともしなかつた。その上に彼等は猩々緋の『鎗中村』に突き擾された恨みを、此の黑皮縅の武者の上に復讐せんとして、猛り立つて居た。

新兵衞は、何時もとは、勝手が違つて居ることに氣が付いた。何時もは虎に向つて居る羊のやうな怖氣が、敵に在つた。彼等が狼狽へ血迷ふところを突き伏せるのに、何の雜作もなかつた。今日は、彼等は戰ひをする時のやうに、勇み立つて居た。どの雜兵もどの雜兵も十二分の力を新兵衞に對し發揮した。二三人突き伏せることさへ容易ではなかつた。敵の鎗の鋒先が、ともすれば身をかすつた。新兵衞は必死の力を振つた。平素の二倍もの力をさへ振つた。が、彼は兎もすれば突き負けさうになつた。手輕に兜や猩々緋を借したことを、後悔するやうな感じが頭の中をかすめた時であつた、敵の突き出した槍が、縅の裏をかいて彼の脾腹を貫いて居た。

名君

十四代将軍家茂公は、先刻から悪戯ばかりして居る。戸川播磨守が、懸命に書いた千字文の中の『雲騰致雨露結爲霜』と云ふ楷書の立派なお手本の方などは見向きもしないで、奉書のお草紙の上に、やたらに筆をのたくらせて居る。雲と書き始めた文句が、雨とならない裡に、筆がのたくつて、龍のやうな滅茶苦茶な曲線を、幾つも書いて居る。一番最初の雲と云ふ字でさへ、まだハッキリとした形を成して居ない。まして騰ると云つたやうな難しい字は、まるで書く意志がないらしい。雲の形が、中途から崩れ出して、雲中の龍のやうな出鱈目な曲線になつてしまふのである。そして、時々眼がお草紙から離れて、傍の金蒔繪の火鉢の方に移つて行く。が、その火鉢の手觸りの柔かさうな灰に立てられて居る線香は、まだ半分もたつて居ない。それを見ると、態々退屈し初めた十四代将軍は、二間ばかりの下座に畏まつて居るお氣に入りの小姓の一人に、目顏で笑ひかけて見る。が、小姓が案外眞面目くさつて居るので、また仕方なしにお草紙に雲と書き始める。が、雲はいつまで經つても、混沌としたまゝである。雲と書き始めた筆が自由に活潑に紙の上を、無意味に一巡すると、家茂公は手荒く新しい紙をめくる。先刻から、何枚眞新しい御獻上物の奉書を無駄にしたかも知れない。奉書のお草紙は、十五枚綴ぢになつて居る。線香の方は兎も角も、お草紙の方さへ片が附けば、その日のお稽古は終つたことになるのだ。線香が仲々たゝないと見てとつた家茂公は、今度は非常手段に出て、お草紙の方を、なすり潰さうとして居るのである。

戸川播磨守安清は、默然として家茂公の亂行を見て居た。彼が、習字の御相手として召出され

てからまだ一月も經つて居ない。片假名やいろは假名のお稽古が濟んで、漢字のお習字に移ることになつて、彼は御相手として特に召出されたのである。林家の人々などを、差超えてのかうした沙汰は、彼として絶大な名譽であつた。彼は、老後の凡てをお役目の爲に盡くさうとして居る。そして將軍家の御手蹟を少しでもよくすれば、此上の御奉公はないと思つて居る。

處が、肝腎の家茂公は、彼が手を執つて、敎へ始めてから、一字一畫も、眞面目に書いたことはない。いろは假名の稽古の御相手が、大奧の中臈であつた爲だらう、習字と云へば、ただ惡戲(わるさ)をして、時間を潰しさへすればいゝと思つて居るらしい。

幼少の折から、嚴しい師に就て、一點一畫も、忽(ゆるがせ)にしないやうにと敎へられた播磨守は、書道に對して可なり敬虔な心持を懷いて居る。彼は、口を漱(ゆす)いで手を淨めた後でなければ筆を執つたことさへない。それだのに、家茂公は彼の面前で、惡戲ばかりしてゐる。書を書くことの尊さを少しも知つて居られない。慰み事か、弄び事か何かのやうに、書を瀆(けが)してゐる。家茂公の爲すことが凡て、播磨守の心を痛めた。七十を三つも越して居る一徹な播磨守の心を痛めた。彼は、何うにかして、主君のかうした心掛を矯(なほ)さなければならないと思つた。その爲には、縱令御不興を蒙らうとも、お役御免にならうとも、厭ふところはないとまで思つて居た。お稽古の日が重なるに連れて、彼の決心は愈々堅くなつて來た。ところが、今日は家茂公の惡戲が、何時もよりも、もつとひどい。一字だつて眞面目には書かれないのである。

白絹のやうにつや／＼光る奉書を、五六枚も無駄にして、更に幾枚目かの紙に、出鱈目な曲線を書かれようとした時である。播磨守は無言のまゝ家茂公の筆を持つた掌を、キュッと握りしめ

た。家茂公は、ハッと本能的に駭かれたやうであるが、直ぐ子供ながらに、自分の位置の優越を思ひ出されると、威壓的な烈しい目附で播磨守の顔を、ぢつと見られた。が、播磨守はビクともしなかつた。彼は、柔い小鳥のやうに生温い掌を、意識して強く、少しは懲罰的に痛さを感ぜしめる位に強く握りしめながら、奉書の上に『雲騰致雨露結爲霜』と、書かせた。家茂公は、筋ばつた掌で握りしめられる痛みに、堪へかねて、中途で二三度振りほどかうとした。が、播磨守は、いつかな放さなかつたが、その八字がスツカリ書き了へられた時である。播磨守が、その堅い把握の手を緩めて、ぢつと兩手を膝に置きながら、公が書いたと云ふよりも、自分の書いた八字に眺め入つた時だつた。赤くなつた右の掌をぢつと見て居た家茂公は、机の上にあつた青磁の水入れを、持つて立ち上ると、いきなりたつぷりと湛へられて居た水を、播磨守の白髪の頭へ、ザブリとかけたまゝ、

「わあつはゝゝわあつはゝゝ」と、笑ひながら大奥の方へ走り込まれたのである。

一徹な播磨守は、主君から――幼少な年齢から來る悪戯ではあるとは云へ――烈しい侮辱を受けたので、頭から落ちる雫を拭ひもやらず、机に兩手をかけたまゝ、暫くは、身動きもしないで考へ込んだ。

駭いて馳け寄つたお側衆の小出勢州は、懐紙を出して、播磨守の額から顎にかけて拭き下しながら、

「餘りのお悪戯ぢや。御幼少であるとは云へ餘りな御亂行ぢや。御主君とは云へ、心外で御座らう。拙者から、御大老に申上げて、きつい御諫言を申上げることに致さう。御堪辨なされい、

御堪辨なされい！」と、氣の毒さうに慰めた。

播磨守は、默然として勢州の拭くのに委かせて居たが、濡れた上下の威儀を正すと、心持聲を落しながら、

「井伊侯に申上ぐるなど、輕はずみな事をして下さるな。今日と云ふ今日は、上様の御仁慈のほどが骨身に徹へ申したわ。勢州殿、有様は斯様で御座る。拙者今日はお机の前に坐つて以來、頻りに小用を催したのを、ぢつと辛抱致し居つたところ、老年の悲しさには、懸命にお手を執つた砌り、つい失念して尿を少々洩したので御座る。君前に於てかゝる大不敬を犯したことが、若し大目附の耳に入らうなら、謹愼閉門はおろか、切腹の御沙汰にも至らうかと、心も心ならず苦慮致し居つたのを、それとお察し遊ばした上様は、拙者の失策を御自身の悪戯で掩ひかくして給はつたのぢや。御仁慈のほど、骨身に徹し申したわ。」

と播磨守は、老いた兩眼に淚をヒタ／＼と湛へて居たのである。

小出勢州を初め、並居る近衆達は、アッとばかり膝を叩いて、家茂公の聰明な仁慈に感嘆の聲を上げたのである。

その事があつてから、此の逸話は、江戸城の隅から隅へと傳へられた。登場する大名の一人から一人へと傳へられた。皆が異口同音に、名君家茂公の君德を讃へぬ者はなかつた。たゞ之を聞いた井伊大老直弼丈は、話を半分ほど聞くと、眉をひそめながら、

「お悪戯にも程のあつたものぢや。」と言つたまゝ、話手が家茂公を讃め上げるのを聞いて、

ニコリともしなかつた。

蘭學事始

一

杉田玄白が、新大橋の中邸を出て、本石町三丁目の長崎屋源右衛門方へ着いたのは、巳刻を少し廻つたばかりだつた。

が、顏馴染の番頭に案内されて、通辭西善三郎の部屋へ通つて見ると、昨日と同じやうに、良澤はもうとつくに來たと見え、悠然と坐り込んで居た。

玄白は、善三郎に挨拶を濟すと、良澤の方を振向きながら、

「お早う！　昨日は、失禮致し申した。」と、挨拶した。

が、良澤は、光澤のいゝ總髮の頭を、輕く下げた丈で、その白皙な、鼻の隆い、薄菊石のある大きい顏を、ニコリともさせなかつた。

玄白は、毎度のことだつたが、一寸嫌な氣がした。

彼は、中津侯の醫官である前野良澤の名は、豫てから知つて居た。そして、その篤學の評判に對しても、可なり敬意を拂つて居た。が、親しく會つて見ると、不思議に、此の人に親しめなかつた。

彼は、今迄に五六度も、茲で良澤と一座した。去年加比丹が、此の旅館に逗留して居た時にも、二度ばかり落合つたことがある。今年も月の廿日に、加比丹が、江戸に着いてから、今日で七日になる間、玄白は三四度も、良澤と一座した。

それで居て、彼はどうにも此の人に親しめなかつた。それかと云つて、彼は良澤を嫌つて居る

のでもなければ、憎んで居るのでもなかつた。たゞ、一座する度に、彼は良澤から、妙な威壓を感じた。彼は、良澤と一座をして居ると、良澤が居ると云ふ意識が、彼の神經にこびり付いて離れなかつた。良澤の一擧一動が氣になつた。彼の一顰一笑が、氣になつた。彼が、氣にしまいとすればするほど、氣になつて仕方がなかつた。

それだのに、相手の良澤が、自分のことなどは、殆ど眼中に置いて居ないやうな態度を見ると、玄白は良澤に對する心持を、愈々こじらせてしまはずには居られなかつた。

長崎表での蘭館への出入は、常法があつて、可なり嚴しく取締られて居たが、加比丹が、江戸に逗留中の旅宿である、此の長崎屋への出入は、暫くの間の事とて、自然何の構もなき姿であつた。

從つて、阿蘭陀流の醫術、本草、物產、究理の學問に志ある者を初め、好事の旗本富商の輩までが毎日のやうに、押しかけて居た。

殊に御醫師の、野呂玄丈や、山形侯の醫官安富寄碩、同藩の中川淳庵、藏前の札差で、好事の名を取つた靑野長兵衞、讃岐侯の浪人平賀源內、御坊主の細井其庵、御儒者の大久保水湖などの顏が見えぬことは、稀だつた。

さうした一座は、覺束ない內通辭を通じて、加比丹にいろ〳〵な質問をした。それが、大抵は阿蘭陀の異風異俗に就ての、たわいもない愚問であることが多かつた。加比丹の答に依つて、それが愚問であることが分ると、皆は腹を抱へて笑つた。

また、ウエールガラス（晴雨計）や、テルモメートル（寒暖計）や、ドンドルガラス（震雷驗

器）などを、見せられると、彼等は、子供が珍らしい玩具にでも、接したやうに欣んで騒いだ。

が、こんな時、一座を冷然と見下すやうに坐つて居るのは良澤だつた。彼は、みんなが發するやうな愚問は、決して發しなかつた。彼は、初から終まで、冷笑とも微笑とも付かない薄笑ひを、唇の端に浮べながら默つて聽いて居た。

一座が、たわいもなく笑つても、彼のしつかりと、閉された口は、容易にほころびなかつた。が、ある問題で、一座が問ひ疲れて、自然に靜かになつた頃に、良澤は定まつて、一つ二つ問ひ質した。一座の者には、その質問の意味が、分らないことさへ多かつた。が、加比丹が、通辭から、その質問を受取ると、彼はいつも、駭いたやうに、目を瞠りながら、急に眞面目な態度になつて、長々と答へるのが常だつた。

一座の者は、良澤のさうした――彼一人高しとして居るやうな態度を、少しも氣に止めて居ないらしかつたが、玄白丈はそれが、妙に氣になつて仕方がなかつた。

つい、昨日もこんな事があつた。それは云つて見れば、何でもないことだが、加比丹のカランスが、座興の爲だつたのだらう、小さい袋を取り出して、皆に示した。通辭は、加比丹の意を受けて、こんなことを云つた。

「カランス殿の云はれるには、此の袋の口を、試みに開けて御覽じませ。見事開けた方に此の袋を進ぜられるとあるのぢや。」

カランスは、一面に髯の生えた顏の相恰を崩して、ニコ〳〵笑つて居た。

一座は、可なり打ち興じた。一番に、細井其庵が、手に取り上げた。が、性急な彼は、暫らく

いぢつて居たかと思ふと、直ぐ投げ出してしまつた。

「どれ〳〵拙者が。」と、安富寄碩が、仔細らしく取上げたが、これも暫らく考へて居たかと思ふと、思案に餘つて投げ出してしまつた。その袋は、一座の者の手から手へ渡つた。一人一人失敗する毎に一座は聲高く笑つた。カランスは皆が開けかねて居るのを、嬉しさうに、ニコ〳〵見て居た。

玄白の手許に來たとき、彼もニコ〳〵笑ひながら取り上げた。袋の口には、金具が付いて居た。それは、恐らく智惠の輪の仕掛になつて居たのだらう。玄白は、所々を押したり引いたりして見たが、口は一分も開かなかつた。

彼は、到頭持て餘した。彼は、苦笑しながら、それを次ぎの者に讓らうとした。が、その時に、一座の者は、大抵それを試みて居た。たゞ玄白の右手に、坐つて居る良澤丈には、彼が餘り端然と控へて居るために、誰もがそれを手渡し兼ねて居た。

「前野氏、如何で御座る？」

玄白は、氣輕にそれを良澤に、手渡さうとした。が、良澤は冷然として、それを受取らうとはしなかつた。彼は、恐らく一座の者が、つまらない玩び物で、打ち興じて居ることが、餘りに苦苦しく思はれたのだらう。否、士大夫ともあるべきものが、つまらない玩び物で、加比丹から體よく翫弄されて居ることを苦々しく思つたのだらう。彼は、玄白が差し出したその袋を、見向きもしようとしなかつた。

その袋は、玄白と良澤との中間に、置かれたまゝ、一座は一寸白けかゝつて居た。

が、丁度その時、折よく平賀源内が、遅れて入つて來た。彼は、その袋の事を、一座の者から聽くと、それを無雜作に、取上げたかと思ふと、忽ち口を開けてしまつた。

一座は、源内の奇才を賞する聲で、充ち滿ちた。彼の奇才は、一座の白けかゝるのを救つたのである。

が、玄白の良澤に對する、意地とも反感とも付かぬ物は、彼の心の中で、此時からだん／＼判然とした形を、取りかけて居た。

玄白は、良澤が一座に居ると、心に思ひ浮ぶ質問の半分も、口に出すことが、出來なかつた。良澤には、自分の訊いて居ることが、もうとつくに解つては居はしないかなどと思ふと、質問をすることが、良澤の前で、自分の無智を告白して居るやうで、何うにも氣が進まなかつた。玄白は、さうした外聞とか見得とか云つたやうな心持を、心の裡で可なり恥ぢて居た。が、恥ぢながらも、それに拘泥(こだは)らずには居られなかつた。彼は、阿蘭陀の事物、學術殊に醫術に對する智識慾に渇ゑながら、妙な意地から、心のまゝに、質問することが出來なかつた。

その日も、彼は皆が來ない前、特に良澤の來ない前に、自分一人で、善三郎に會ひたかつたのである。彼は阿蘭陀文字を讀まうと云ふ自分の豫てからの宿願を述べて、その志願の可能不可能を、善三郎に質して見たかつたのである。

そのために、昨日より半刻(はんとき)も早く來た玄白には、良澤が自分よりも早く來て居たことが、可なりの打擊だつた。

が、彼は良澤に介意(かま)ひすぎる自分の心持を恥ぢた。彼は、良澤ただ一人しか居ないのを幸ひに、

自分の素志を述べて見た。

「西氏！ 今日は、ちと御邊に折入つてお訊ねしようと思ふことが御座るのぢや、それは餘の儀では御座らぬ。總體、阿蘭陀の文字と申すものは、われら異國の者にも、讀めるもので御座らうか。それとも、いかほど刻苦いたしても讀めないもので御座らうか。有様にお答へ下されい。われら存ずる仔細も御座るほどに。」

玄白の問には、眞摯な氣が、充ちて居た。西は玄白の熱心を嘉みするやうに、二三度肯いた。が、彼の與へた答は、否定的だつた。彼は、西海の人に特有な快活な調子で答へた。

「さればさ、それは、三四の方々からも訊ねられた事で御座る。なれど、われら答へ申すには、たゞ御無用になされと申す外は御座らぬ。いかほど、辛勞なされても、所詮及ばぬことで御座る。有様を申せば、われら通辭の者にても、阿蘭陀の文字を心得居るものは、われら一兩人の外は、とんと御座らぬ。餘の者は、音ばかりを假名で書き留め、口づから記憶じ申して、折々の御用を辨じて居るので御座る。彼の國の言葉を、一々に理會いたさうなどは、われら異國人には、所詮及ばぬことで御座る。例へて申さうなら、彼の國の加比丹又はマダロスなどに、湯水又は酒を呑むを何と申すかと、訊ね申すには、最初は手眞似にて問ふ外は、御座らぬ。茶碗などを持ち添へ、注ぐ眞似を致し、口に付けてこれはと問へば、デリンキと教へ申す。デリンキは、呑むことゝ承知いたす。茲までは、仔細は御座らぬ。なれど、今一足進み申して、上戸と下戸との區別を問はうには、ハタと當惑いたし申す。手眞似にて問ふべき仕方は御座らぬ。屢々、呑む眞似をいたして、上戸の態を示し申しても、相手にはとんと通じ申さぬ。さればぢや、多く呑みても、酒を好

まざる人あり、少く呑みても好む人あり、形丈にては上戸下戸の區別は、とんと付き申さぬ。かやうに、情の上のことは、いかやうに手眞似を盡くしても、問ふべき仕方は御座らぬ。」

「なるほどな。御尤もで御座る。」

玄白も、相手の返事の道理を、肯かずには居られなかつた。

玄白が、首肯するのを見ると、西はやゝ得意に語りつづけた。

「阿蘭陀の言葉の、むつかしき例には、かやうな事も御座る。アーンテレッケンと申す言葉が御座る。好き嗜むと云ふ言葉で御座るが、われら、通辭の家に生れ、幼少の折より、この言葉を覺え、幾度となく使ひ申したが、その言葉の意は、一向悟り申さなんだところ、年五十に及んで、此度の道中にてやつと會得いたして御座る。アーンは、元と云ふ意で御座る。テレッケンとは、引くと云ふ意で御座る。アーンテレッケンとは、向うのものを手元へ、引きたいと思ふ意で御座る。酒を好むとは、酒を手元へ引きたいと云ふ意で御座る。故郷をアーンテレッケンするとは、故郷を手元へ引き寄せたいほど、懷しむと云ふ意で御座る。斯様に、一つの言葉にても、むつかしきものに御座れば、われらの如き、幼少より阿蘭陀人に朝夕親炙いたし居る者にても、なかなか會得いたし兼ねて御座る。況んや、江戸などに御座しては、所詮叶はぬことで御座る。御存じでも御座らう。野呂玄丈殿、青木文藏殿など、御用にて、年々當旅宿へ、お越しなされ、一方ならず御出精なされても、はかばかしう御合點も參らぬやうで御座る。其許も、さ様な思召立は、必ず御無用になされた方がよろしからう。」

西は、自分自身も、とつくに諦め切つて居るやうに云つた。

「なるほど、道理で御座る。」

玄白も、さう答へる外はなかつた。相手が切に止めるものを、强ひて學習の方法などを訊く譯にも行かなかつた。

「なるほど、大通辭の御邊が、左樣に思うて居らるゝことを、われらが如何やうに思ひ立つても、及ばぬことで御座る、所詮は、思ひ切る外は御座らぬ。」

玄白が、何氣なくさう云つた時だつた。今まで默つて、西と玄白との問答を聽いて居た良澤が、急に口を挾んだ。

「いや、御兩所のお言葉では御座るが、われらの存ずる仔細は別ぢや。凡そ、紅毛人とは申せ、同じ人間の作つた文字書籍が、同じ人間に會得出來ぬと云ふ道理は、更々御座らぬわ。われらが、平生讀み書きいたし居る漢字漢語も、又われら士太夫が、實踐いたし居る孔孟の教も、傳來の初には、只今の阿蘭陀の文字同樣一切不通のものであつたに相違御座らぬわ。それを、われらの遠つ祖どもが、刻苦いたして、一語半語づつ、理會いたして參つたに相違御座らぬ。遠つ祖どもの苦心があればこそ、二千年この方、幾百億の人々が、その餘澤に潑うて御座るのぢや。良澤の志は、其處で御座る。われらは、此後に來る者のためには、彫心鏤骨の苦しみも、厭ひ申さぬ覺悟で御座る。杉田氏も、お志をお捨てなされないで、お始めなされい。われらは、今年四十九では御座るが、倒れるまで、努めて見る積りで御座る。」

玄白は、良澤の志を聽いて、心から恥ぢずには居られなかつた。その雄渾な志を聽いて、心から恥ぢずには居られなかつた。彼は之れを自分に對する有難い忠言だと思はずには居られなかつ

た。が、彼は餘りに觸れられたくない急所に、相手が唐突に、觸れて來たことに、可なりな不快を感ぜずには居られなかつた。此方が、半分は挨拶旁々、云つて居ることに、何の容赦もなく、眞劍に向つて來た相手に、ある不快を感ぜずには居られなかつたのである。

二

玄白が、蘭書ターヘルアナトミアを手に入れたのは、それから五日とは經たない頃だつた。

玄白の志は、元來阿蘭陀流の醫術に在つた。彼が蘭語を學びたく思つたのも、それに依つて療術方藥に關する蘭書を讀破したい爲であつた。

從つて、彼はターヘルアナトミアを、ある內通辭から示されると、彼は驚喜の目を、刮らずには居られなかつた。濃い赤と靑とで、彩られた臟腑骨節の、精緻な繪畫を見ると、彼は其處に人體に就いての凡ての祕奧が、解き明されてあるやうに思はれた。その繪畫と繪圖との間に走つて居る、模樣のやうな阿蘭陀の文字は、一字も半字も、讀めなかつたけれども、彼の心は烈しい好奇と感激とに充たされずには居なかつた。

彼は、心の底からそれに垂涎した。價は、二十五人扶持の彼に取つては、力に餘る三兩と云ふ大金だつた。が、彼は前後の思慮もなかつた。懷中して居た一朱銀を、手金として、その通辭に渡すと、彼は金策のために、藩邸へ馳せ歸つた。

彼が、驅け付けて行つたのは、家老岡新左衞門の邸であつた。岡は、豫てから、玄白に好意を持つて居た。彼は玄白の懇願を聽くと、

「それは求めて置いて、用立つものか。用立つものならば、價は上より下し置かれるやう、取計つて得させよう。」と、云つた。

さう答へられると、玄白も感奮した。

「されば、必ずかうと云ふ目當は御座りませねども、是非とも用立つものにして、お目に掛けるで御座らう。」と、誓はずには居られなかつた。

丁度、座に小倉左衞門と云ふ男が、居合はした。

「それは、何卒調へて遣はされたい。杉田氏はそれを空しくする人では御座るまい。」と、助言して呉れた。

ターヘルアナトミアを、自分のものにして玄白は、雀躍して欣んだ。

三

三月三日の事であつた。玄白は、その日も長崎屋へ出向いて居た。將軍家の阿蘭陀人御覽が、昨日滯りなく終つたので、加比丹を初、二人の書記役、大小の通辭達も、みなのび〳〵とした氣持になつて居たので、會談が何時になく賑つた。到頭、おしまひに加比丹が、珍酡と云ふ珍らしい酒を出して、皆を饗應した。

その日は、良澤の顏が見えない外、一座の者は、中川淳庵、小杉玄適、嶺春泰、鳥山松園、など、皆醫師ばかりであつたので、對話は多岐に彌らずして、緊張して居た。殊に、書記役の一人のバブルは、外科の巧者であつたので、皆はバブルを圍んで、貪るやうに、いろ〳〵な質問を發

して居た。

殊に、嶺春泰は、刺絡の術を、熱心に訊いて居た。

春の永い日が暮れて、阿蘭陀人達が、食事のために、退いたとき、皆は緊張した對話から、ホッとして我に歸つて居た。彼等が、急いで歸り支度にかゝつて居る時だつた。中川淳庵の私宅から、小者が赤紙の附いた文箱を持つて、駈け付けて來た。

淳庵は、その至急を示した文箱を、一寸不安な顔附で、取り上げたが、中の書狀を讀んで居る裡に彼の不安な顔は、欣びで崩れてしまつた。

「諸君！　お欣びなされい！　かねての宿願が、叶ひ申したぞ。明日、骨ヶ原で腑分がある！　腑分がある！」

彼は、喜悅の聲を揚げながら、一座の者にその書狀を差し示した。それは、いかにも町奉行曲淵甲斐守の家士得能萬兵衞から、明四日千住骨ヶ原にて、手醫師何某が、腑分をすることを、內報して來た書狀だつた。

「腑分が！　腑分が！」

皆は、口々に欣びの聲を出した。

淳庵、玄適、玄白など、阿蘭陀流の醫術に志すものに取つては、觀臟は年來の宿願だつた。が、その機會は容易に得られなかつたのだ。

殊に、彼等は今日此頃、バブルから、身體內景の有樣を、新しく聞いて居たので、腑分に對する宿望は、更に油が注がれたやうに、燃えて居た。

殊に、玄白は腑分と聽くと、自分の心が、飛揚するのを抑へることが出來なかつた。彼は、ターヘルアナトミアを手にして以來、腑分の日を、一日千秋の思で待つて居た。彼は、ターヘルアナトミアの繪圖が、古人の諸說と悉く違つて居るのを知つて居つた。彼は、それを實地に照して、一日も早く確めたかつたのである。

一座の人々の顏は、欣びに輝いて居た。

「それでは、今夜は直ちに歸宅して休息いたし、明日早天に、山谷町出口の茶屋で待ち合はすことにいたさう。」

淳庵は、座中を見廻して云つた。一座は、直ぐそれに同意した。

その時に、玄白の頭の中に、ふと良澤の顏が浮んだ。彼は、良澤がやはり、觀臟の希望の切なことを知つて居た。一座の誰にも、劣らないほど、切なのを知つて居た。縱令、良澤が、この席に居合はさずとも、明日の一擧に洩すべき人でないことを、感じて居た。

が、彼は良澤の名を、氣輕に口にすることが出來なかつた。良澤に對する輕い反感のために、たやすく口にする事が出來なかつた。その上、彼の心の一隅には、日頃一座に對して高飛車な、見下したやうな態度を取つて居る良澤が、大切な企に洩れることを、いゝ見せしめだと思ふ心が、かすかではあるが動いて居た。

それに、誰もが良澤のことに、氣が付いて居ない以上、自分が特に注意するにも、當らないと思つて居た。

が、一座がその儘に、立ち上りさうになると、玄白の心は、だん〳〵苦しくなつて居た。輕い

苛責が、彼の心を鞭打つた。彼は、良澤に對する自分の態度の卑しさに、氣づかずには居られなかつた。

彼は、到頭默つては居られなかつた。

「前野氏が居る！　前野氏が居る！　前野氏へも、何とかいたして知らせたいもので御座る。」

さう云つたとき、玄白は自分自身、救はれたやうな明るい氣持になつた。

「おゝ前野氏が居る！　前野氏の事を、とんと失念致して居た。前野氏へは、是非一報いたさいで叶はぬ事ぢや。」

玄適が、直ぐそれに應じた。が、他の者は餘り、氣が乘つて居るやうでもなかつた。淳庵は、云ひ譯のやうに云つた。

「前野氏にも、知らせたうは御座るが、前野氏の麹町の住居までは、餘程の道程で御座る。もう、初更も過ぎて居るほどに、知らすべき便は御座らぬ。前野氏には、また此次の機も御座らう。」

玄白は、もう默つて居ようかと思つた。自分の心持丈は、これで濟んで居る。前野を、是非とも、明日の企に與らせねばならぬほどの、義理も責任もないと思つて居た。が、彼は自分の心の底に、良澤の來ないことを、欣ぶやうな心が、潛んで居ることに、氣付いて居る丈に、そのまゝ默つて居るのが、疚しかつた。

「いや、知らすべき便がないとは、限り申さぬ。本石町の木戸際には、定めし辻籠が居ることで御座らう。手紙を調へ、辻籠の者に置捨に致さすれば、念がとゞかぬことは御座るまい。」

玄白の考は、時に取つて名案だつた。

「それは、天晴のお心付きぢや。」

一座の者は、皆それに贊成した。玄適が、直ぐ手紙を書きにかゝつた。

玄白は、自分で良澤を呼びながら、一方それを悔いて居るやうな心持が、動いて居ないこともなかつた。が、ふと自分の持つて居るターヘルアナトミアのことを考へると、また別な心持が動いた。彼は、その珍書を、皆の前で、披露するときの、得意な心持を考へた。殊に、良澤の前で――いつも、それとなく氣壓され居るやうに思ふ良澤の前で、ターヘルアナトミアを開いて見せる自分の心持を考へて見た。

彼は、やつぱり良澤を呼んで、いゝ事をしたと思つた。

四

三月四日の朝、玄白は寅の二つに近い頃、新大橋の藩邸を出て、淺草橋から藏前を通つて、廣小路に出て、馬道から山谷町の出口の茶屋に着いたのは、春の引き明けの薄紫の空に、淺草寺の明六つの鐘が、かう〳〵と鳴り渡つて居る頃であつた。

茶屋の座敷に上つて見ると、もう玄適と良澤とが、朝寒の部屋に、火鉢を圍ひながら向ひ合つて居た。

麴町平河町に住んで居る良澤が、自分より先きへ來て居るのを見ると、玄白は心中少からず、駭かずには居られなかつた。

良澤は、玄白が入つて來るのを見ると、何時になく叮嚀に會釋した。
「杉田氏！　昨夜は、貴所の肝煎で、使を下さつたさうで、有難く存じ居る。お蔭で、斯様な會ひがたき企に與り申して、大慶に存じ居る所で御座る。」
さう、眞正面から感謝されると、玄白は自分の今迄の、良澤に對する心持を、心の裡でやゝ恥しく思はずには居られなかつた。
玄適が、横から口を挾んだ。
「杉田氏！　前野氏は、昨夜から、一睡もなされないさうで御座る。使の者が參つたのが、子に近い頃で、お宅を出られたのが、丑二つ頃ぢやと申す。その間も、今日の企のことを思はれると、心が躍るやうで、一睡もなされなんださうで御座る。」
玄白は、良澤の執心が、自分以上に、烈しいことを知ると、どんな點でも、良澤には及ばないと云つたやうな、寂しさを感ぜずには居られなかつた。
が、さうした寂しさも、自分が懐中して居るターヘルアナトミアのことを、考へると、直ぐ慰められた、今日の參會に、此の珍書を持つて居る者は、自分一人だと思ふと、良澤に對するさうした寂しさも直ぐ消えてしまつた。
その裡に淳庵が見えた。小半刻ばかり經つ頃に、春泰と良圓とが、連れ立つてやつて來た。六人の顔が揃ふと、打ち連れ立つて骨ヶ原に向つた。
春の早朝の微風に顔を吹かせながら、六人は興奮してよく喋べつた。六人とも、中年を越した者ばかりであつたけれども、彼等の心持は、期待のために、躍つて居た。六人の歩調が、何時の

間にか、早くなつて居た。小男の淳庵が、ともすれば、遲れ勝であつた。

玄白は、いつターヘルアナトミアを、取り出して、皆に披露しようかと思つて居た。彼は、先刻山谷町の茶屋で、披露しようと思ひながら、ついその時機を得なかつた。

骨ケ原の刑場に近づくと、街道に面した梟木の上に、刑死して間もないやうな老婆の首が、かけられて居た。その胴體が、今日腑分けせられるのだと氣が付くと、六人は一寸不快な感じを懷かずには居られなかつた。

非人頭が、六人を刑場の入口にある與力詰所へ案內した。腑分けの準備が整ふまで、六人は其處で待たなければならぬのだつた。

玄白は、今こそと思ひながら、懷中のターヘルアナトミアに手をかけようとした。が、それと同時に、良澤が思ひ出したやうに、右の手に持つて居た風呂敷包みを、解きながら云つた。

「左樣！ 左樣！ 各々方に、御披露するものが、御座つた。先年長崎へ參つた折、求め歸つて家藏いたし居る、阿蘭陀解剖の書で御座るが。」

さう云ひながら、彼は風呂敷包みの中から、取り出した一本を、皆の前に指し示した。

玄適が、好奇の眼を輝かしながら、それを受取つた。五人の眼が、一齊にそれに注がれた。が、玄白は一目見ると、自分の眼を疑はずには居られなかつた。それは、自分が懷中して居る、ターヘルアナトミアと、寸分違はぬ同版同刻の書であつた。

彼は、茫然として語がなかつた。良澤に對して、主張し得ると思つて居た、彼が最後の據りど

ころは、脆くも蹂み躙られてしまつたのであつた。が、玄白は、懷中して居る自分の本を出さない譯にも行かなかつた。

「前野氏は、豫てから御所持で御座つたか。實は、拙者もこのほど、一本を求め申して御座る。」

玄白は何氣ないやうに、披露した。が、彼が昨夜から、樂しみにして居た披露する折の得意さ、晴がましさなどは微塵も感じられなかつた。韮を噛むやうな氣持であつた。

が、良澤は、それを見ると、心から駭いたらしかつた。彼は玄白の差し出した本を取り上げながら表紙や扉を打ち返して見た。

「これは紛ぎれもなく同本ぢや。不思議な奇遇で御座る。奇遇で御座る。」

さう云ひながら、良澤は幾度も手を拍つた。良澤の態度は、天空の如く開濶だつた。

「貴所と、某とが期せずして、ターヘルアナトミアを所持いたし居るなど、これは阿蘭陀醫術が、開くべき吉瑞とも申すべきで御座る。」

良澤は、さう語をつゞけて哄笑した。彼は、書中の一圖を玄白に指し示しながら云つた。

「御覽なされい！　これが、ロングと申し肺で御座る。これがハルトと申し心で御座る。これはマーグと申し胃で御座る。これは、ミルトと申し脾で御度る。醫經に申す、五臟六腑、肺の六葉、兩耳肝の左三葉、右四葉などの說とは、似ても似ぬことで御座る。今日こそ、漢說が正しいか、阿蘭陀の繪圖が正しいか、試すべき時期で御座る。」

良澤の顏は、究理に對する興奮で輝いて居た。玄白も、良澤の高朗な熱烈な氣持に接して居る

と、自分の心の裡の妙なこだはりなどは、何時の間にか忘れて居た。

五

やがて、六人は打ち連れて、觀臓の場所へ行つた。

刑場の一部に、蓆を以て、粗末な假小屋が、設けられて居た。手醫師の何某が、三人の小吏と、二人の與力と一緒に待つて居た。

死體は、案の如く、首丈は梟木の上にかけられて居る、老婆のそれであつた。老婆は青茶婆と云つて、幾人となく貰ひ子を殺した大罪の女であつた。若い時、艶名を謳はれたと云はれるだけに、五十を越して居ると云ふにも拘はらず、白い肥肉の身體には、まだ少しの皺も見えなかつた。刀を執る者は、虎松と云ふ九十に近い小吏だつた。刑死人の死體の脂肪が、にじみ出て居るのではあるまいかと思はれるやうな、赤黑い皮膚をした健やかな老人であつた。

彼は、若い時から、腑分けは幾度も手にかけ、數人を解いたことがあると自慢をした。

究理のために、勇み立つて居る六人ではあつたけれども、その首のない、生白い無恰好な死體を見たときに、皆は思はず、顏を背けずには居られなかつた。眼や鼻から受ける醜惡な感じで、六人の胸は閉された。が、良澤も淳庵も、玄白も、必死な色を浮べて、さうした感じに堪へて居た。

老人の小吏は、磨ぎすました出刃を、逆手に持つと、獸の肉をでも、剖くやうに、死體の胸をずぶ／＼と切り開いて行つた。まだ首が離れてから、半刻と經つて居ない死體からは、出刃の切先の進むに連れて、かたまりかけて居る血が、とろ／＼と滲み出た。

胸が、第一に切り剖かれた。良澤も玄白も、ターヘルアナトミアの胸の繪圖を開きながら、眞赤に開かれて行く死體の胸と、一心に見比べてゐた。

それが、良澤と玄白とに取つて、何と云ふ不思議であつただらう。出刃の切先に切られて行く骨の一つも、筋の一つも、肉の間に網の如く走つて居る白い奇怪な線條も、白く浮き上つて居る脂肪も、びろ〳〵と胸廓一杯に、氣味惡く擴がつて居る肺も、左肺の下から覗いて居る、眞赤な桃の實の如き心の臟も、ターヘルアナトミアの繪圖と、一分一點の違ひもなかつた。

良澤も玄白も、他の四人も深い感嘆のために、聲も出なかつた。

續いて、腹が剖かれた。そこに見出された胃、奇怪な形に蹲踞つて居る腸、腸胃の陰にかくれた名も知らぬ臟腑まで阿蘭陀圖と、寸分の違ひもなかつた。

老屠が、出刃を持つ手を止めると、良澤は初めて、我に歸つたやうに叫んだ。

「至極ぢや。至極ぢや。蘭書の繪圖と、寸分の違ひも御座らぬ。和漢千載の諸説は、みな取るに足らぬ妄説と、定まり申した。醫術はもはや阿蘭陀に止めを刺し申した。」

「至極ぢや。至極ぢや！」

皆は、良澤の感激に聲を合せた。

刑場からの歸途、春泰と良圓とは、一足遲れたゝめ、良澤と玄適と淳庵、玄白の四人連であつた。四人は、同じ感激に浸つて居た。それは、玄妙不思議な阿蘭陀の醫術に對する讚嘆の心であつた。

刑場から、六七町の間、皆は默々として銘々自分自身の感激に浸つて居たが、淺草田圃に差しかゝると、淳庵が感に堪へたやうに云つた。

「今日の實驗、たゞ〳〵驚き入るの外はないことで御座る。かほどの事を、これまで心付かずに、打ち過したかと思へば、此上もなき恥辱に存ずる。われ〳〵醫を以て、主君々々に仕へるものが、その術の基本とも申すべき、人體の眞形をも心得ず、今日まで一日一日と、その業を務め申したかと思へば、面目もないことで御座る。何とぞ、今日の實驗に基づき、大凡にも身體の眞理を辨へて、醫をいたせば、醫を以て天地間に身を立つる申譯にもなることで御座る。」

良澤も玄白も玄適も、淳庵の述懐に同感せずには居られなかつた。玄白は、その後を承けて云つた。

「いかにも、尤もの仰せぢや。それに付けても拙者は、如何にも致して、このターヘルアナトミアの一卷を、飜譯いたしたいものぢやと存ずる。これだに、飜譯いたし申せば、身體内外のこと、分明を得て、今日以後療治の上にも、大益あることゝ存ずる。」

良澤も、心から打ち解けて居た。

「いや、杉田氏の仰せ、尤もで御座る。實は、拙者も年來蘭書讀みたき宿願で御座つたが、志を同じうする良友もなく、慨き思ふのみにて、日を過して御座る。もし、各々方が、志を合せて下されば何よりの幸ひぢや。幸ひ、先年長崎留學の砌、蘭語少々は記憶いたして御座るほどに、それを種と致し、共々此のターヘルアナトミアを、讀みかゝらうでは御座らぬか。」と、云つた。

玄白も、淳庵も、玄適も、手を拍つてそれに同じた。彼等は、異常な感激で結び合された。

「然らば、善はいそげと申す。明日より拙宅へお越しなされい！」

良澤は、その巨きい眼を輝しながら云つた。

六

約の如く、その翌日を初とし、四人は平河町の良澤の家に、月五六回づつ相會した。

良澤を除いた三人は、阿蘭陀文字の二十五字さへ、最初は定かには覺えて居なかつた。良澤は、三人の人々に、蘭語の手ほどきをした。彼は、遉に長崎に留學したことがある丈に、多少の蘭語と、章句語脈のことも、少しは心得て居たけれども、それも殆ど云ふに足りなかつた。

一月ばかり經つと、良澤が三人に教へることは、もう何も殘つて居なかつた。

三人の手ほどきが濟むと、四人は初めて、ターヘルアナトミアの書に向つた。

が、開卷第一の頁から、たゞ茫洋として、艫舵なき船の大洋に乘出せしが如く、何處から手の付けやうもなく、あきれにあきれて居る外はなかつた。

が、二三枚めくつた處に、仰けに伏した人體全象の圖があつた。彼等は考へた。人體內景のことは知りがたいが、表部外象のことは、その名所も一々知つて居ることであるから、圖に於ける符號と說の中の符號とを、合せ考へることが一番取付き易いことだと思つた。

彼等は、眉、口、唇、耳、腹、股、踵などに附いて居る符號を、文章の中に探した。そして、眉、口、唇などの言葉を、一つ一つ覺えて行つた。

が、さうした單語丈は分つても、前後の文句は、彼等の乏しい力では一向に解し兼ねた。一句

一章を、春の長き一日、考へあかしても、彷彿として明らめられないことが、屢々あつた。四人が、二日の間、考へぬいて、やつと解いたのは『眉ト八目ノ上ニ生ジタル毛ナリ』と云ふ一句だつたりした。四人は、そのたわいもない文句に哄笑しながらも、銘々嬉し涙が眼の裡に、滲んで來るのを感ぜずには居られなかつた。

　眉から目と下つて鼻の處へ來たときに、四人は、鼻とはフルヘッヘンドせしものなりと云ふ一句に、突き當つてしまつて居た。

　無論、完全な辭書はなかつた。たゞ、良澤が、長崎から持ち歸つた小册に、フルヘッヘンドの譯註があつた。それは、『木の枝を斷ちたる迹、その迹フルヘッヘンドをなし、庭を掃除すれば、その塵土聚りて、フルヘッヘンドをなす』と云ふ文句だつた。

　四人は、その譯註を、引き合はしても、容易には解しかねた。

「フルヘッヘンド！　フルヘッヘンド！」

　四人は、折々その言葉を、口ずさみながら、巳の刻から申の刻まで考へぬいた。四人は目を見合せたまゝ、一語も交へずに考へぬいた。申の刻を過ぎた頃に、玄白が躍り上るやうにして、その膝頭を叩いた。

「解せ申した。解せ申した。方々、斯樣で御座る。木の枝を斷り申したる迹、癒え申せば堆くなるで御座らう。塵土聚れば、これも堆くなるで御座らう。されば、鼻は面中に在りて、堆起するもので御座れば、フルヘッヘンドは、堆しと云ふことで御座らうぞ」と云つた。

　四人は、手を拍つて欣びあつた。玄白の眼には涙が光つた。彼の欣びは、連城の玉を、獲るよ

りも勝つて居た。が、神經(シンケイ)などと云ふ言葉に至つては、一月考へ續けても解らなかつた。

彼等は、最初難解の言葉に接するごとに、丸に十文字を引いて印とした。それを、轡十文字と呼んで居た。初(はじめ)一年の間、どの頁にもどの頁にも、轡十文字が、無數に散在した。が、彼等の先驅者としての勇猛精進は、凡てを、征服せずには居なかつた。一ヶ月六七回の定日を怠りなく守つた甲斐はあつた。一年餘を過ぎた頃には、譯語の數も殖え、章句の脈も、明かに、書中の轡十文字は、殘り少なくかき消されて居た。

先驅者としての苦鬪は、やがて先驅者のみが知る欣びで酬はれて居た。語句の末が明になるに從つて、次第に蔗(きび)を噉(くら)ふが如く、その中に含まれた先人未知の眞理の甘味が、彼等の心に浸み付いて居た。

彼等は、邦人未到の學問の沃土に、彼等のみ足を踏み入れ得る欣びで、會集の期日毎に、兒女子の祭見に行く心地にて、夜の明くるのを待ち兼ねるほどになつて居た。

七

玄白が、最初良澤に對して懷いて居た輕い反感などは、もう迹形もなかつた。彼は良澤の爲人(ひととなり)とその篤學に、心からなる尊敬を拂つて居た。

が、飜譯の業が、進んで行くのに從つて、玄白はだん／＼自分の志と、良澤のそれとが、離れて居るのに氣が付いた。

玄白の志は、ターヘルアナトミアを、一日も早く飜譯して、治療の實用に立て、世の醫家の發明の種にすることだつた。彼は、心の裡で思つて居た。漢學が日本へ傳來して大成するまでには、數代數十代の努力を要して居る。それと同じやうに、蘭學の大成も、數代を要すに違ひないと思つて居た。彼は、さうした一代に期しがたい大業を志すよりも、一事一書に志を集めて、一代に成就することを期するに如かじと思つて居た。五色の絲の亂れしは、美しけれども、實用に供することは赤とか黃とかの一色に決し、他は皆切り棄つるに如かずと思つて居た。

從つて、彼はターヘルアナトミアの飜譯に、餘念もなかつた。彼は、一日會して、解し得るところは、家に歸つて、直ちに飜譯した。

が、良澤の志は、遠大だつた。彼の志は、蘭學の大成に在つた。ターヘルアナトミアの如きは殆ど眼中になかつた。彼は、阿蘭陀語の悉くに、通達し、彼の國の書籍何にても讀破したい大望を懷いてゐた。

最初、一二年は、良澤と玄白との間に、何等意見の扞格（かんかく）もなかつた。が、彼等の力が進むに從つて二人はいつも同じやうな口諍（あらそ）ひを續けて居た。

「此の處の文意はよく解り申した。いざ先きへ進まうでは御座らぬか。」

玄白は、常に先きを急いで居た。が、良澤は、悠揚として落着いて居た。

「いや、お待ちなされい。文意は通じても、語義が通じ申さぬ。凡そ、語義が通じ申さないで、文意のみが通ずるは、當推量と申すもので御座る。」

良澤は、頑として動かなかつた。

八

四年の月日は過ぎた。

玄白は、ターヘルアナトミアの稿を更へること、十二回に及んだ。が、篇中、未解の場所五ヶ所、難解の場所十七ヶ所あつた。玄白は、只管（ひたすら）に上梓を急いだ。が、良澤は、未解難解の場所を、解するまではとて、上梓を肯んじなかつた。

良澤と玄白とは、それに就て幾度も論じ合つた。が、二人は幾何（いくら）論じあつても、一致點を見出さなかつた。それは、二人の蘭學に對する態度の根本的な相違だつた。

玄白は、到頭自分一人の名前で、ターヘルアナトミアの飜譯たる解體新書を上梓する決心をした。

が、遉（さすが）に彼は良澤の名を無視する譯には行かなかつた。飜譯の筆記こそ、玄白の手に依つて行はれたものゝ、飜譯の功は、半ば良澤に歸すべきものだつたから。

玄白は、良澤を訪うて序文を懇願した。が、良澤は序文をも、次ぎのやうに云つて斷つた。

「いや、拙者曾て、九州を歴遊いたした折、太宰府（だざいふ）の天滿宮（てんまんぐう）へ參詣いたした節、斯樣に申して、起誓したことが御座る。良澤が、蘭學に志を立て申したは、眞の道理を究めよう爲で、名聞利益の爲では、御座らぬゆゑ、この學問の成就するやう冥護を垂れたまへと、斯樣に祈り申したのぢや。この誓ひにも、背き申すゆゑ、序文の儀は平に、許させられい！」

それを、聽いた玄白は、寂しかつた。が、彼は自分の態度を卑下する氣には、少しもなれなか

つた。彼は、良澤の態度を尊敬した。が、それと同時に、彼は自分の態度も肯定せずには居られなかつた。

彼は、晩年蘭學興隆の世に會つた時の手記に、自分の態度を、次ぎのやうに主張した。

「翁は、元來疎漫にして不學なるゆゑ、可成りに蘭說を飜譯しても、人のはやく理會し、曉解するの益あるやうになすべき力はなく、されども人に托しては、我本意も通じがたく、やむことなく拙陋を顧みずして、自ら書き綴れり。其中に精密の微義もあるべしと思へるところも、解しがたきところは强ひて解せず、たゞ意の達したるところを、擧げ置けるのみ。譬へば、京へ上らんと思ふには、東海東山二道あるを知り、西へ〳〵と行けば、終には京へ上り付くと云ふ所を、第一とすべし。その道筋を敎へる迄なりと思へば、その荒増を唱へ出せしなり。首めて唱る時に當りては、なか〳〵後の譏を恐るゝやうなる疎々たる了簡にて企事は出來ぬものなり。くれ〴〵も大體に本づき、合點の行くところを譯せし迄なり。梵譯の四十二章經も、漸く今の一切經に及べり。之が、翁が、その頃よりの宿志にして企望せし所なり。世に良澤と云ふ人なくば、此道開くべからず。されど翁の如き、素意大略の人なければ、此道かく速かに開くべからず、是もまた天助なるべし。』

入れ札

上州岩鼻の代官を斬り殺した國定忠次一家の者は、赤城山へ立て籠つて、八州の捕方を避けてゐたが、其處も防ぎ切れなくなると、忠次を初、十四五人の乾兒は、辛く一方の血路を、斫り開いて、信州路へ落ちて行つた。

夜中に利根川を渡つた。澁川の橋は、捕方が固めて居たので、一里ばかり下流を渡つた。水勢が烈しいため、兩岸に綱を引いて渡つたが、それでも乾兒の一人は、つい手を離したゝめ流されてしまつた。

澁川から、伊香保街道に添うて、道もない裏山を、榛名にかゝつた。一日、一晩で、やつと榛名を越えた。が、榛名を越えてしまふと、直ぐ其處に大戸の御番所があつた。

信州へ出るのには、この御番所が、第一の難關であつた。此の關所をさへ越してしまへば、向うは信濃境まで、山又山が續いて居る丈であつた。

忠次達が、關所へかゝつたのは、夜の引き明けだつた。わづか、五六人しか居ない役人達は、忠治達の勢に怖れたものか、彼等の通行を一言も咎めなかつた。

關所を過ぎると、流石に皆は、ほつと安心した。本街道を避けて、裏山へかゝつて來るに連れて、夜がしら〳〵と明けて來た。丁度上州一圓に、春蠶が孵化らうとする春の終の頃であつた。山上から見下すと、街道に添うた村々には、青い桑畑が、朝霧の裡に、何處までも續いて居た。

關東縞の袷に、鮫鞘の長脇差を佩して、脚絆草鞋で、嚴重な足ごしらへをした忠次は、菅のふき下しの笠を冠つて、先頭に立つて、威勢よく歩いて居た。小鬢の所に、傷痕のある淺黑い顏が、

一月に近い辛苦で、少し窶れが見えたゝめ、一層凄味を見せて居た。乾兒も、大抵同じやうな風體をして居た。が、忠次の外は、誰も菅笠を冠つては居なかつた。中には、片袖の半分斷れかけて居る者や、脚絆の一方ない者や、白つぽい縞の着物に、所々血を滲ませて居るものなども居た。

街道を避けながら、而も街道を見失はないやうに、彼等は山から山へと辿つた。大戸の關から、二里ばかりも來たと思ふ頃、雑木の茂つた小高い山の中腹に出て居た。ふと振り顧ると、今まで見えなかつた赤城が、山と山の間に、ほのかに浮び出て居た。

「赤城山も見收めだな。おい、此處いらで一服しようか。」

さう云ひながら、忠次は足下に大きい切り株を見付けて、どつかりと、腰を降した。彼の眼は、暫らくの間、四十年見なれた懷しい山の姿に囚はれてゐた。赤城山が利根川の谿谷へと、緩い勾配を作つて居る一帶の高原には、彼の故郷の國定村も、彼が賣出しの當時、島村伊三郎を斬つた境の町も、彼が一月前に代官を斬つた岩鼻の町もあつた。

國越をしようとする忠次の心には、さすがに淡い哀愁が、感ぜられて居た。が、それよりも、現在一番彼の心を苦しめて居ることは、乾兒の始末だつた。赤城へ籠つた當座は、五十人に近かつた乾兒が、日數が經つに連れ、二人三人潛かに、山を降つて逃げた。捕方の總攻めを喰つたときは、二十七人しか殘つて居なかつた。それが、五六人は召捕られ、七八人は何處ともなく落ち延びて、今殘つて居る十一人は、忠次のためには、水火をも辭さない金鐵の人々だつた。國を賣つて、知らぬ他國へ走る以上、此先、あまりいゝ芽も出さうでない忠次のために、一緒に關所を破つて、命を投げ出して呉れた人々だつた。が、代官を斬つた上に、關所を破つた忠次として、

十人餘の乾兒を連れて、他國を横行することは出來なかつた。人目に觸れない裡に、乾兒の始末を付けてしまひたかつた。が、みんなと別れて、一人限になつてしまふことも、いろ〳〵な點で不便だつた。自分の目算通に、信州追分の今井小藤太の家に、ころがり込むにした所が、國定村の忠次とも云はれた貸元が、乾分の一人も連れずに、顔を出すことは、沽券にかゝはることだつた。手頃の乾兒を二三人連れて行くとしたら、一體誰を連れて行かう。さう思ふと、彼の心の裡では、直ぐその顔觸が定つた。平生の忠治だつたら、

「おい！淺に、喜藏に、嘉助とが、俺と一緒に來るんだ！外の野郎達は、銘々思ひ通りに落ちて呉れ！路用の金は、分けてやるからな！」

と、何の拘泥もなく云へる筈だつた。が、忠次は赤城に籠つて以來、自分に對する乾兒達の忠誠をしみじみ感じて居た。鰹節や生米を噛つて露命を繋ぎ、岩窟や樹の下で、雨露を凌いで居た幾日と云ふ長い間、彼等は一言も不平を滾さなかつた。忠次の身體が、赤城山中の地藏山で、危險に瀕したとき、みんなは命を捨てゝ働いて呉れた。平生は老ぼれて、物の役には立つまいと思はれて居た闇雲の忍松までが、見事な働きをした。

　さうした乾兒達の健氣な働きと、自分に對する心持とを見た忠次は、その中の二三人を引き止めて他の多くに暇をやることが、何うしても氣がすゝまなかつた。皆一樣に、自分のために、一命を捨てゝかゝつて居る人々の間に、自分が甲乙を付けることは、何うしても出來なかつた。剛愎な忠次も、打ち續く艱難で、少しは氣が弱くなつて居る故もあつたのだらう。別れるのなら、いつそ皆と同じやうに、別れようと思つた。

彼は、さう決心すると、

「おい！ みんな！」と、周圍に散かつて居る乾兒達を呼んだ。烈しい叱り付けるやうな聲だつた。喧嘩の時などにも、叱咤する忠次の聲丈は、狂奔して居る乾兒達の耳にもよく徹した。草の上に、蹲まつたり、寢ころんだり、銘々思ひ〳〵の休息を取つて居た乾兒達は、忠次の一喝でみんな起き直つた。數日來の烈しい疲勞で、とろ〳〵眠りかけて居るものさへあつた。

「おい！ みんな。」

忠次は、改めて呼び直した。『壺皿見透し』と、若い時綽名を付けられて居た、忠次の大きい眼がギロリと動いた。

「みんな！ 一寸耳を貸して貰ひてえのだが、俺これから、信州へ一人で、落ちて行かうと思ふのだ。お前達を、連れて行きてえのは山々だが、お役人をたゝつ斬つて、天下のお關所を破つた俺達が、お天道樣の下を、十人二十人つながつて歩くことは、許されねえ。もつとも、二三人は、一緒に行つて貰ひてえとも思ふのだが、今日が日まで、同じ辛苦をしたお前達みんなの中から、汝は行け汝は來るなと云ふ區別は付けたくねえのだ。連れて行くからなら、一人殘らず、みんな一緒に連れて行きてえのだ。別れるからなら、恨みつこのねえやうに、みんな一樣に別れてしまひてえのだ。さあ、玆に使ひ殘りの金が、百五十兩ばかりあらあ。みんなに、十二兩宛、呉れてやつて、殘つたのは俺が貰つて行くんだ。銘々に、志を立てゝ落ちて呉れ！ 隨分、身體に氣を付けろ！ 忠次が、何處かで捕まつて、江戸送りにでもなつたと聞いたら、線香の一本でも上げて呉れ！」

忠次は、元氣にさう云ふと、胴卷の中から、五十兩包みを、三つ取り出して、熊笹の上に、ずしりと投げ出した。

が、誰もその五十兩包みに、手を出すものはなかつた。みんなは、忠次の突然な申出に、何う答へていゝか迷つて居るらしかつた。一番に、乾兒達の沈默を破つたのは、大間々の淺太郎だつた。

「そりや、親分惡い了簡だらうぜ。一體俺達が、妻子眷族を見捨てゝ、此處までお前さんに、從いて來たのは、何の爲だと思ふのだ。みんな、お前さんの身の上を氣遣つて、お前さんの落着く所を、見屆けたいと思ふ一心からぢやないか。いくら、大戶の御番所を越して、もうこれから信州までは大丈夫だと云つたところで、お前さんばかりを、一人で手放すことは、出來るものぢやねえ。尤も、かう物騷な野郎ばかりが、つながつて步けねえのは、道理なのだから、お前さんが、此奴だと思ふ野郎を、名指してお吳んなせえ。何も親分乾兒の間で、遠慮することなんかありやしねえ。お前さんの大事な場合だ！　恨みつらみを云ふやうな、ケチな野郎は一人だつてありやしねえ。なあ兄弟！」

みんなは、異口同音に、淺太郎の云ひ分に贊意を表した。が、さう云はれて見ると、忠次は尙更選みかねた。自分の大事な場所である丈に、彼等の名前を指すことは、彼等に對する信賴の差別を、露骨に表はす事になつて來る。それで、選に洩れた連中と――內心、忠次を怨むかも知れない連中と――其儘、再會の機も期し難く、別れてしまはねばならぬ事を考へると、忠次は何うしても、氣が進まなかつた。

忠次は口を噤んだ儘、何とも答へなかつた。親分と乾兒との間に、不安な沈默が暫らく續いた。

「あゝ、いゝ事があらあ。」釋迦の十藏と云ふ未だ二十二三の男が叫んだ。彼は忠次の盃を貰つてから未だ二年にもなつて居なかつた。

「籤引がいゝや、みんなで籤を引いて、當つた者が親分のお供をするのがいゝや。」

當座の妙案なので、忠次も乾兒も、十藏の方を一寸見た。が、嘉助といふ男が直ぐ反對した。

「何を云つてやがるんだい！ 籤引だつて！ 手前の樣な青二才に籤が當つて見ろ、反つて、親分の足手纏ひぢやねえか。籤引なんか、俺あ眞つ平だ。此麼時に一番物を云ふのは、腕つ節だ。おい親分！ くだらねえ遠慮なんかしねえで、一言、嘉助ついて來いと、云つてお呉んなせい。」

四斗樽を兩手に提げ乍ら、足駄を穿いて歩くと云ふ嘉助は一行中で第一の大力だつた。忠次が心の裡で選んで居る三人の中の一人だつた。

「嘉助の野郎、何を大きな事を云つてやがるんだい。腕つ節ばかりで、世間は渡られねえぞ。まして此れから、知らねえ土地を遍歴つて、上州の國定忠次で御座いと云つて歩くには、駈引萬端の軍師がついて居ねえ事には、どうにもならねえのだ。幾ら手前が、大力だからと云つて、ドヂ許りを踏んで居ちや、旅先で、飯にはならねえぞ。」

さう云つたのは、松井田の喜藏と云ふ、分別盛りの四十男だつた。忠次も喜藏の才覺と、分別とは認めて居た。彼は、心の裡で喜藏も三人の中に加へて居た。

「親分、俺あお供は出來ねえかねえ。俺あ腕節は强くはねえ。又、喜藏の樣に軍師ぢやねえ。が、お前さんの爲には、一命を捨てゝもいゝと、心の內で、とつくに覺悟を極めて居るんだ。」

闇雲の忍松が、其處迄云ひかけると、乾兒達、周圍から口々に罵つた。

「何を云つてやがるんだい、親分の爲に命を投げ出して居る者は、手前一人ぢやねえぞ、巫山戯た事をぬかすねえ。」

さう云はれると、忍松は一言もなかつた。半白の頭を、テレ隱しに掻いて居た。

さうして居るうちに、半時ばかり經つた。日光山らしい方角に出た朝日が、もう餘程さし登つて居た。忠次は、默々として、みんなの云ふ事を聽いて居た。二三人連れて行くとしたら、彼は籤引では連れて行きたくなかつた。やつぱり、信頼の出來る乾兒を自ら選びたかつた。彼は不圖一策を思ひ付いた。それは、彼が自ら選ぶ事なくして、最も優秀な乾兒を選み得る方法だつた。

「お前達の樣に、さうザワ／＼騷いで居ちや、何時が來たつて、果てしがありやしねえ。俺一人を手離すのが不安心だと云ふのなら、お前達の間で入れ札をして見ちや、どうだい。札數の多い者から、三人丈連れて行かうぢやねえか。こりや一番怨みつこがなくつて、いゝだらうぜ。」

忠次の言葉が終るか終らないかに、

「そいつあ思ひ付きだ。」乾兒のうちで一番人望のある喜藏が贊成した。

「そいつあ趣向だ。」大間々の淺太郎も直ぐ贊成した。

心の裡で、籤引を望んで居る者も數人あつた。が、忠次の、怨みつこの無いやうに、而も役に立つ乾兒を、選ばうと云ふ肚が解ると、みんなは異議なく入れ札に贊成した。

喜藏が矢立を持つて居た。忠次が懐から、鼻紙の半紙を取り出した。それを喜藏が受取ると、長脇差を拔いて、手際よくそれを小さく切り分けた。さうして、一片宛みんなに配つた。

先刻(さつき)からの經路を、一番厭な心で見て居たのは稻荷(いなり)の九郎助(ろすけ)だつた。彼は年輩から云つても、忠次の身內では、第一の兄分でなければならなかつた。が、忠次からも、乾兒からも、そのやうには扱はれて居なかつた。去年、大前田の一家と一寸した出入のあつた時、彼は喧嘩場から、不覺にも大前田の身內の者に、引つ擔(かつ)がれた。それ以來、彼は多年培つて居た自分の聲望がめつきり落ちたのを知つた。自分から云へば、遙かに後輩の淺太郎や喜藏に段々凌がれて來た事を、感じて居た。それればかりでなく、十年前迄は、兄弟同樣に賭場から賭場を、一緒に漂浪して步いた忠次迄が、何時となく、自分を輕んじて居る事を知つた。皆は表面こそ『阿兄(あにい)！阿兄！』と立てゝ居るものゝ、心の裡では、自分を重んじて居ないことが、あり〳〵と感ぜられた。

入れ札と云ふ聲を聽いたとき、九郎助は悪いことになつたなあと思つた。今迄、表面丈は兎も角も保つて來た自分の位置が、露骨に崩されるのだと思ふと、彼は厭な氣がした。十一人居る乾兒の中で自分に入れて吳れさうな人間を考へて見た。が、それは彌助(やすけ)の他には思ひ當らなかつた。彌助も九郎助と同樣に、古い顏であつて、後輩の淺太郎や、喜藏などが、グン〳〵頭を擡げて來るのを、常から快からず思つて居るから、かうした場合には、屹度自分に入れて吳れるだらうと思つた。が、彌助丈は自分に入れて吳れるとしても、彌助の一枚丈で、三人の中に入ることは考へられなかつた。淺太郎には四枚入るだらうと思つた。喜藏に三枚入るとして、十一枚の中、後へ四枚殘る。その中、自分の一枚をのけると三枚殘る。若し、その中、二枚が、自分に入れられて居れば、三人の中に加はることは出來るかも知れないと思つた。が、彌助の他に、自分に入れて吳れさうな人は、どう考へても當がなかつた。ひよつとしたら、並川(なみかは)の才助(さいすけ)がとも思つた。あの

男の若い時には、可成り世話を焼いてやつた覺えがある。が、それは六七年も前のことで、今では『淺阿兄、淺阿兄』と、淺にばかりくつ付いて居る。さう思ふと、彌助の入れて吳れる一枚の他には、今一枚を得る當は、何うにもつかなかつた。乾兒の中で年頭でもあり、一番兄分でもある自分が、入れ札に落ちることは――自分の信望が少しも無いことがまざ〱と表はれることは、もう既定の事實のやうに、九郎助には思はれた。不愉快な寂しい感じに堪へられなくなつて來た。

一本しか無い矢立の筆は、次から次へと廻つて來た。

「おい！　阿兄！　筆をやらあ。」

ぼんやり考へて居た九郎助の肩を、つゝきながら横に居た彌助が、筆を渡して呉れた。彌助は筆を渡すときに、九郎助の顏を見ながら、意味ありげに、ニヤリと笑つた。それは、たしかに好意のある微笑だつた。『お前を入れたぜ。』と云ふやうな、意味を持つた微笑であるやうに九郎助は思つた。さう思ふと、九郎助は後のもう一枚が、どうしても欲しくなつた。後の一枚が、自分の生死の境、榮辱の境であるやうに思はれた。忠次に着いて行つたところで、自分の身に、いゝ芽が出ようとは思はれなかつたが、入れ札に洩れて、年甲斐もなく置き捨てにされることが何うしても堪らなかつた。淺太郎や喜藏の人望が、自分の上にあることが、マザ〱と分ることが、何うしても堪らなかつた。

かれは、筆を持つてぼんやり考へた。

「おい！　阿兄！　早く廻してくんな！」

横に坐つて居る淺太郎が、彼に云つた。阿兄！　と云ひながらも、語調丈は、目下を叱して居

るやうな口調だつた。九郎助は、毎度のことながらむつとした。途端に、相手に對する烈しい競爭心が――嫉妬がムラ〳〵と彼の心に渦卷いた。

筆を持つて居る手が、少しブル〳〵顫へた。彼は、紙を身體で掩ひかくすやうにしながら、假名で『くろすけ』と書いた。

書いてしまふと、彼はその小さい紙片をくる〳〵と丸めて、眞中に置いてある空になつた割籠(わりご)の蓋の中に入れた。が、入れた瞬間に、苦い悔悟が胸の中に直ぐ起つた。

『賭博(ばくち)は打つても、卑怯なことはするな。男らしくねえことはするな。』

口癖のやうに、怒鳴る忠次の聲が、耳のそばで、ガン〳〵鳴りひびくやうな氣がした。彼は皆が自分の顔を、ジロ〳〵見て居るやうな氣がして、何うしても顔を上げることが出來なかつた。

吉井(よしゐ)の傳助(でんすけ)は、無筆だつたので、彼は仲よしの才助に、小聲で耳打ちしながら、代筆を頼んだ。

皆が、札を入れてしまふと、忠次が、

「喜藏！　お前讀み上げて見ねえ！」と言つた。

皆は、緊張のために、眼を輝かした。過半數のものは諦めて居たが、それでも銘々、うぬぼれは持つて居た。壺皿を見詰めるやうな目付で、喜藏の手許を睨んで居た。

「あさ、あゝ淺太郎の事だな、淺太郎一枚！」

さう叫んで喜藏は、一枚、札を別に置いた。

「淺太郎二枚！」彼は續いてさう叫んだ。

又、淺太郎が出たのである。淺太郎が、此の二三年忠次の信任を得て、影の形に付き從ふやう

に、忠次が彼を身邊から放さなかつたことは、乾兒の者が皆よく知つて居た。淺太郎の聲がつゞくと、忠次の淺黒い顔に、ニッと微笑が浮んだ。

「喜藏が一枚！」

喜藏は、自分の名が出たのを、嬉しさうに、ニコリと笑ひながら叫んで、

「嘘ぢやねえぞ！」と、付け足しながら、その紙を右の手で高く上げて差し示した。

「その次ぎが又、喜藏だ！」

喜藏は得意げに、又紙札を高く差上げた。

「嘉助が一枚！」

第三の名前が出た。忠次は、心の中で、私(ひそか)に選んで居る三人が、入札(いれふだ)の表に現はれて來るのが、嬉しかつた。乾兒達が自分の心持を、察して居て呉れるのが嬉しかつた。

「何だ！ くろすけ。九郎助だな。九郎助が一枚！」

喜藏は、聲高く叫んだ。九郎助は、顔から火が出るやうに思つた。生れて初めて感ずるやうな羞恥と、不安と、悔悟とで、胸の裡が掻きむしられるやうだ。自分の手蹟を、喜藏が見覺えては、居はしないかと思ふと、九郎助は立つても坐つても居られないやうな氣持だつた。が、喜藏は九郎助の札には、こだはつて居なかつた。

「淺が三枚だ！ その次は、喜藏が三枚だ！」

喜藏は大聲に叫びつゞけた。札が次ぎ〳〵に讀み上げられて、喜藏の手にたつた一枚殘つたとき、淺が四枚で、喜藏が四枚だつた。嘉助と九郎助とが、各自一枚宛だつた。

九郎助は、心の裡で懸命に彌助の札が出るのを待つて居た。彌助の札が出ないことはないと思つて居た。もう一枚さへ出れば、自分が、三人の中に入るのだと思つて居た。が、最後の札は、彼の切ない期待を裏切つて、嘉助に投ぜられた札だつた。

「さあ！ みんな聞いてくれ！ 淺と喜藏とが四枚だ。嘉助が二枚だ。九郎助が一枚だ。疑はしいと思ふ奴は、自分で調べて見るといゝや。」喜藏は最後の決定を傳へながら、一座を見廻した。誰も調べて見ようとはしなかつた。誰よりも先に、九郎助はホッと安心した。

忠次は自分の思ひ通りの人間に、札が落ちたのを見ると滿足して、切り株から、立ち上つた。

「ぢや、みんな腑に落ちたんだな。それぢや、淺と喜藏と嘉助とを連れて行かう。九郎助は、一枚入つて居るから連れて行きたいが、最初云つた言葉を變改することは出來ねえから、勘辨しな。さあ、先刻からえらう手間を取つた。ぢや、みんな金を分けて銘々に志すところへ行つて呉れ。」

乾兒の者は、忠次が出してあつた裡から、銘々に十二兩宛を分けて取つた。

「ぢや、俺達は一足先に行くぜ。」忠次は選まれた三人を、麾くと、みんなに最後の會釋をしながら、頂上の方へぐんぐんと上りかけた。

「親分、御機嫌よう。御機嫌よう。」

去つて行く忠次の後から、乾兒達は口々に呼びかけた。

忠次は、振り向きながら、時々、被つて居る菅笠を取つて振つた。その長身の身體は、山の中腹を掩うて居る小松林の中に、暫くの間は見え隱れして居た。

取り殘された乾兒達の顏には、それぞれ失望の影があつた。

「淺達が付いて居りや、大した間違はありやしねい!」

口々に同じやうなことを云つた。が、やつぱり、銘々自分が入れ札に洩れた淋しさを持つて居た。

が、忠次達の姿が見えなくなると、四五人は諦めたやうに、草津の方へ落ちて行つた。

九郎助は、忠次と別れるとき、目禮したまゝぢつと考へて居た。落選した失望よりも、自分の淺ましさが、ヒシ〳〵骨身に徹へた。二三人に蒐まつて居るところを見ると、みんな親分の爲を計つて、淺や喜藏に入れたのだ。親分の心を汲んで、淺や喜藏を選んだのだ。さう思ふと、自分の名をかいた卑しさが愈々堪へられなかつた。

朝の微風が吹いて來て、入れ札の紙が、熊笹を離れて、ひら〳〵と飛びさうになつた。

「あゝ、こんなものが殘つて居ると、とんだ手がかりにならねえとも限らねえ。」

さう云ひながら、九郎助は立ち上つて散ばつて居る紙片を取り蒐めると、めちや〳〵に引き斷つて投げ捨てた。九郎助の顏は、凄いほどに蒼かつた。

「俺、秩父の方へ落ちようかな。」

九郎助は獨言のやうに云つた。彼は仲間の誰とも顏を合して居るのが厭だつた。秩父に遠緣の者が居るのを幸に、其處で百姓にでもなつてしまひたかつた。

彼は、草津へ行つた連中とは、反對に榛名の西南の麓を目ざして、ぐん〳〵山を降りかけた。

彼が、二三町も來たときだつた。後から聲をかけるものがあつた。

「おい阿兄！　稲荷の阿兄！」

　彼は、立ち止つて振り顧つた。見ると、彌助が、息を切らしながら、追ひかけて來たのであつた。彼は彌助の顏を見たときに、烈しい憎惡が、胸の裡に湧いた。大切な場合に自分を裏切つて居ながらまだ身の振方をでも相談しようとするらしい相手の、圖々しい態度を見ると、彼はその得手勝手が、叩き切つてやりたいほど、癪に障つた。

「俺あ、よつぽど草津から越後へ出ようと思つたが、よく考へて見ると、熊谷在に伯父が居るのだ、少しは、熊谷は危險かも知れねえが、故郷へかへる足溜りには持つて來いだ。それで俺も武州の方へ出るから、途中まで付き合つて呉れねえか。」

　九郎助は、返事をする事さへ厭だつた。默つてすたこら歩いて居た。

　彌助は、九郎助が機嫌が惡いのを知ると、傍へ寄つた。

「俺あ、今日の入れ札には、最初から厭だつた。親分も親分だ！　餓鬼の時から一緒に育つたお前を連れて行くと云はねえ法はねえ。淺や喜藏は、いくら腕節や、才覺があつても、云はゞ、お前に比べればホンの小僧つ子だ。たとひ、入れ札にするにしたところが、野郎達、お前を入れねえと云ふことはありやしねえ。十一人の中でお前の名をかいたのは、この彌助一人だと思ふと、俺あ彼奴等の心根が、全くわからねえや。」

　默つて聞いた九郎助は、火のやうなものが、身體の周圍に、閃いたやうな氣がした。

「此の野郎！」さう思ひながら、脇差の柄を、左の手で、グッと握りしめた。もう、一言云つて見ろ、拔打ちに斬つてやらうと思つた。

て歩いて居た。

柄を握りしめて居る九郎助の手が、段々緩んで來た。考へて見ると、彌助の嘘を咎めるのには、自分の恥しさを打ち開けねばならない。

その上、自分に大嘘を吐いて居る彌助でさへ、自分があんな卑しい事をしたのだとは、夢にも思つて居なければこそ、こんな白々しい嘘を吐くのだと思ふと、九郎助は自分で自分が情けなくなつて來た。口先丈の嘘を平氣で云ふ彌助でさへが考へ付かないほど、自分は卑しいのだと思ふと、頭の上に輝いて居る晩春のお天道様が、一時に暗くなるやうな味氣なさを味つた。

山の多い上州の空は、一杯に晴れて居た。峰から峰へ渡る幾百羽と云ふ小鳥の群が、黄い翼をひらめかしながら、九郎助の頭の上を、ほがらかに鳴きながら通つて居る。行手には榛名が、空を劃つて蒼々と聳えて居た。

俊寛

治承二年九月二十三日の事である。

若し、それが都であつたならば、秋が更けて、變り易い晩秋の空に、北山時雨が、折々襲つて來る時であるが、薩摩潟の沖遙かな鬼界ヶ島では、まだ秋の初めでゝもあるやうに暖かだつた。

三人の流人達は、海を見降す砂丘の上で、日向ぼつこをして居た。ぽか〳〵とした太陽の光に浴して居ると、所々破れほころびて居る袷を着て居ても、少しも寒くはなかつた。

四五日吹き續いた風の名殘が、まだ折々水沫を飛ばす波がしらに、現はれて居るものゝ、空は一杯に晴れ渡つて、漣のやうな白雲が、太陽をかすめて、棚引いて居る丈だつた。さうした晴れ渡つた蒼空から、少しの慰めも受けないやうに、三人の流人達は、疲れ切つた獸のやうに、默つて砂の上に蹲まつて居る。康賴は、先刻から左の手で手枕をして、横になつて居る。

康賴も、成經も俊寛も、一年間の孤島生活で、その心も氣力も、スツカリ叩きのめされてしまつて居た。最初、彼等は革命の失敗者として、清盛を罵り平家の一門を呪ひ、陰謀の周密でなかつたことを後悔し、悲憤慷慨に夜を徹することが多かつた。が、一月二月經つ裡に、さうした悲憤慷慨が結局鬼界ヶ島の荒磯に打ち寄する波と同じに、無意味な繰返しに過ぎない事に氣が付くと、もう誰も、さうした事を口にする勇氣も無くして居た。その上に、都會人である彼等に、孤島生活の慘苦が、ヒシ〳〵と迫つて來た。毎日のやうに、水に浸した乾飯や、生乾きの魚肉のあぶつたものなどを口にする苦しみが、骨身に徹へて來た。彼等は、さうした苦痛を壓倒するや

うな積極的な心持は、少しも動かない。彼等は苦痛が重れば重るほど悄氣切つてしまひ、飯を食ふ外は、天氣のよい日は、海濱の砂地で、雨の降る日は、仕方なくその狹い小屋の中で、たゞ溜息と愚痴との裡に、一日々々を過して居た。その裡に三人とも烈しい不眠症に襲はれた。その中でも、神經質の康頼が、一番ヒドかつた。彼は、夜中眠られない癖が、付いてしまつたので、晝間よく假睡をする。先刻からも、横になつたかと思ふと、もうかすかないびきを立てゝ居る。長い間、剃刀を當てない髯が、ぼう〳〵としてその痩せこけた頰を掩うて居る。その上、褪せた唇の下端には、涎が今にも落ちさうに湛へて居る。

成經は、成經で、妖怪に憑かれたやうな、キヨトンとした眼附で、晴れた大空を、當度もなく見ながら、溜息ばかり吐いて居る。俊寛は、一緒に陰謀を企てた連中の、かうした辛抱のない、腑甲斐ない容子を見て居ると、自分自身までが情なくなる。陰謀を企てた人間として、今少しは男らしい、毅然とした所があつてもいゝ。刑罰の下に、かうまで、へこたれてしまはなくつてもいゝと思ふ。彼は成經がもう一度、溜息を吐いたら、それを機會に、たしなめてやらうと思ひながら、ぢつと成經の顏を見据ゑて居たが、成經はそれと悟つた譯でもあるまいが、クルリと俊寛の方へ、背を向けると海の方へ向いたまゝ、これもしばし、まどろむ積りだらう、默り込んでしまつた。

二人の友達が默つてしまふと、俊寛の心も張合が拔けたやうに、淡い悲しみに囚はれる。彼にも島の生活が、堪らなく苦痛になつて來た。都へ歸りたい。さうした渴に似た感情で、胸を責められるその上、成經康頼等の心持と、自分の心持と、日に增しこじれて來ることを感じた。人間

が、三人蒐まるときは、屹度その中の二人丈が仲よくなり、一人丈は孤立する傾きのあるものだが、今の場合には、それが殊に烈しかつた。康頼も、成經も、彼等の生存が、苦しくなればなるほど、愚痴になつて來る。そして、過ぎ去つた謀反の企てを心の裡で後悔し始める。人間は如何なる場合でも、自分を怨まないで、他人を怨む。そして、陰謀の發頭人であつた西光を恨む。引いては西光と一番親しかつた俊寛を怨む。彼等を、かうした絶海の孤島で、悶えさせるのは、淸盛の責任でなくして、本當は、西光が陰謀を發頭した爲めであるかのやうな事を云ふ。西光の人格や陰謀の動機を、よく理解して居る俊寛には、彼等のさうした愚痴が、癪に觸つて仕方がない。彼の神經は、日に增しイラ〳〵する。さうして、何かの機みから、つい氣色ばんで、云ひ爭ふ。二人は俊寛を煙たく思ひ始める。そして、剛愎な俊寛に一致して反抗の氣勢を示す。そして、お互に心持を荒ませる。

此の頃、俊寛はよく、二人が意識して、自分を疎外して居るのを感ずる。硫黄を採りに行く時でも、海藻を採りに行く時でも、よく二人限で行つてしまふ。その上、三人で居るときでも、二人はよく顔を寄せ合つて、ヒソ〳〵話を始める。そんなとき、俊寛は堪らない寂寥と、不快を感ずる。三人限の生活では、他の二人に背かれると云ふことは、人間全體から背かれると云ふことと、同じことだつた。俊寛は、さうした心苦しさを免かれようとして、自分一人で、行動して見ようかと考へた。が、一日自分一人で、離れて居ると、烈しい寂しさに襲はれる。そして、意久地なく成經と康頼との所へ歸つて來る。そして再び、不快な感情の裡に、心を傷けながら生活して行く。

今朝も、鹿ヶ谷の會合の發頭人は、誰だと云ふことで、俊寛は成經と、可なり烈しい口論をした。成經は眞の發頭人は、西光だと云つた。だから、西光丈は平相國が、直ぐ斬つたではないかと云つた。俊寛は、いな御身の父の成親卿こそ、眞の發頭人である。淸盛が、御身の父を都で、失はなかつたのは、藤氏一門の考へやうを、憚かつたからである。その證據には、備前へ流されると直ぐ人知れず殺されたではないかと云つた。父のことを、惡しざまに云はれたので、日頃は言葉少い成經も、烈火のやうに激して、俊寛と一刻近くも、烈しく云ひ爭つた。二人が、口論に疲れて、傷けられた胸を懷きながら、默つてしまふまで。

成經と、康賴とが、橫になつて居るいぎたない容子を見て居ると、俊寛は意地にも、その眞似をする氣にはなれなかつた。彼は、胸の裡の、寂しさとムシヤクシヤした鬱懷とを洩す所のないまゝに腕組をして、ぢつと考へる。すると、何時もの癖であるやうに、妻の松の前や、娘の鶴の前の姿が、まぼろしのやうに、胸の中に浮んで來る。それから、京極の宿所の釣殿や、鹿ヶ谷の山莊の泉石のたゝずまひなどが、髣髴として想ひ出される。都會生活に對するあこがれが、心を爛らせる。澤山使つて居た下僕の一人でもが、今侍いて居て異れゝばなどと思ふ。

俊寛が、かうした回想に耽つて居るとき、寢入つて居たと思つた成經が、急に立ち上つた。彼は、悲鳴とも歡聲とも付かない聲を出したかと思ふと、砂丘を海の方へ一散に馳け降りた。

彼は、波打際に立つと、躍るやうに兩手を打ち振つた。

「判官どの。白帆にて候ぞ。白帆にて候ぞ。」

さう云つて、康賴に知らせると、又悲鳴のやうな聲を揚げながら、濱邊を北へ北へと走つた。

康頼も、あわたゞしい聲に直ぐ起き上つた。俊寛も、白帆だと聞くと、直ぐ立ち上らずには居られなかつたが、白帆が見えると云つて、成經が濱邊を走つたことは、これ迄に二三度あつた。彼はよく、白雲の影を、白帆と間違へたり、波間に浮ぶ白鳥から、白帆の幻影を見た。

康頼は、逍に直ぐ後に續いて走つたが、俊寛は又かと思ひながら、無言のまゝ、跡から隨いて行つた。成經と康頼とは砂濱を根よく走りつゞけた。俊寛も、彼等の熱心な走り方を見ると、自分の足並が、何時の間にか、急ぎ足になるのを何うともすることが出來なかつた。

その裡に、疑深い俊寛の眸にも、遙か彼方の水平線に、浪に浮んで居る白千鳥のやうに、白い帆を一杯に張りながら、折柄の微風に、動くともなく近づいて來る船の姿が、映らずには居なかつた。

俊寛も、狂氣のやうに走り出した。三人は半町ばかり隔りながら、懸命に走つた。お互に立ち止つて、待ち合せる餘裕などはなかつた。走るに従つて、白帆もだん／＼近づいて來るのだつた。それは、九州から硫黄を買ひに來る船のやうな、小さい船ではなかつた。

成經は、感激のために、泣きながら走つて居る。康頼もさうだつた。俊寛も、胸が熱くるしくなつて眼頭が、妙にむづかゆくなつて來るのを感じた。見ると、船の舳には、一流の赤旗が、へんぽんと飜つて居る。平家の兵船だと思ふと、その船に赦免の使者が、乘つて居ることが、三人に直ぐ感ぜられた。

船は、流人達の姿を見ると、舳を岸の方へ向けて、帆をひた／＼と降し始めた。やがて、船は岸から、三反とない沖へ錨を投げる。三人は岸邊に立ちながら、聲を合せて欣びの聲を揚げた。

遺に、俊寛をも除外しないで、三人は、手を執り合つたまゝ聲を揚げて、泣き始めたのである。

二

船は、流人達の期待に背かず、淸盛からの赦免の使者丹左衛門尉基康を乘せて居た。が、基康の持つて居た淸盛の教書は、成經と康頼とを、天國へ持ち上げると共に、俊寛を地獄の底へ押し陷した。俊寛は、狂氣のやうに、その教書を基康の手から奪ひ取つて、血走る眼を注いだけれども、其處には俊寛とも僧都とも書いてはなかつた。俊寛は、激昂の餘り、最初は使者を罵つた。俊寛の名が漏れたのは、使者の怠慢であると云ひ募つた。が、基康が、その鋒鋩を避けて、相手にしないので今度は自分を捨てゝ行かうとする成經と康頼とに喰つてかゝつた。そして、成經と康頼とを卑怯者であり、裏切者であると罵倒した。成經が、それに堪へかねて、二言三言言葉を返すと、俊寛は直ぐカッとなつて、成經に摑みかゝらうとして、基康の手の者に、取りひしがれた。

それから後、幾時間かの間の俊寛の憤りと悲しみと、恥とは喩へるものもなかつた。彼は、目の前で、成經と康頼とがその垢じみた衣類を脱ぎ捨てゝ、都に在る縁者から贈られた、眞新しい衣類に着換へるのを見た。嬉し涙を滾しながら、親しい者からの消息を、讀んで居るのを見た。が、重科を赦免せられない俊寛には、一通の玉章をさへ受くることが許されて居なかつた。俊寛は、砂を嚙み、土を掻きむしりながら、泣いた。

船は、飲料水と野菜とを積み込み、成經と康頼とを收めると、手を合して乘船を哀願する俊寛

を濱邊に押し倒したまゝ、岸を放れた。

そして、俊寛をもつと苦しめる爲めの故意からするやうに、三反ばかりの沖合に錨を投げて、其處で一夜を明すのであつた。

俊寛は、終夜濱邊に立つて、叫びつゞけた。最切は哀願し、中途では罵り、最後には、タワイもなく泣き叫んだ。

「判官どの、のう！ 今一言申し殘せしことの候ぞ。小舟なりとも寄せ候へ。」

「基康どの、僧都をあはれと思召さば、せめて九國の端までも、送り屆け得させ給へ。」

が、俊寛の聲は、渚を吹く海風に吹き拂はれて、船へは少しも聞えないのだらう。闇の中に、一の灯もなく黑く纜つて居る船からは、應と云ふ一聲さへなかつた。

夜が更くるに付け、俊寛の聲は、かすれてしまつた。おしまひには、傷ついた海鳥が泣くやうなかすかな悲鳴になつてしまつた。が、どんなに聲が、かすれても、根よく叫び續けた。

その裡に、夜はほの〴〵と明けて行つた。朝日が渺々たる波の彼方に昇ると船はから〳〵と錨を揚げ、帆を朝風にはた〳〵と靡かせながら捲き上げた。俊寛は、最後の叫び聲を揚げようとしたけれども、聲は少しも咽喉から出なかつた。船の上には、右往左往する水夫どもの姿が見える丈で、成經康賴はもとより、基康も姿を現はさない。

見る間に船は、滑るやうに動き出した。もう、乘船の望みは、少しも殘つては居なかつたが、それでも俊寛は船を追はずには居られなかつた。船は、島に添ひながら、北へ北へと走る。俊寛は、それを狂人のやうに、こけつまろびつ追つた。が、三十町も走ると、其處は島の北端である。

船は、俊寛の苦悶などには、何の容赦もなく、半刻も經たない裡に、水平線に漂ふ白雲の裡に、紛れ込んでしまつた。船の姿を見失つたとき、俊寛は絶望のために、昏倒した。昨夜來叫びつゞけた疲勞が、一時に發したのだらう、其儘茫として眠り續けた。

彼は、その巖壁の上で、昏倒したまゝ、何時間眠つて居たかは、自分にも分らなかつた。一度目覺めたときは、夜であつた。彼は、自分の頭の上の大空が、大半は暗い雲に掩はれて、そのわづかな切れ目から、二三の星が瞬いて居るのを見た。彼は烈しい渇と、全身を碎くやうな疼痛を感じた。

彼は、水を飮みたいと思ひながら、周圍を見廻した。が、巖壁の背後は、直ぐ磽确な山になつて居るらしく、小川とか泉とかゞ、ありさうにも思へなかつた。それでも、烈しい渇は、彼を一刻も、ぢつとして居させなかつた。彼は、寢て居た岩から、身を剝がすやうにして立ち上つた。立ち上るとき身體のもろ〳〵の關節が、音を立てゝ軋るやうに思つた。彼は、それでも這ふやうにして、巖壁を降りることが出來た。彼は晝間、(それは昨日であるのか一昨日であるのか分らなかつたが)夢中で、走つた道を、二町ばかり引返した。彼は、晝間其處を走つたとき、榕樹が五六本生えて居て、其の根に危く躓きさうになつたのを覺えて居た。彼の濁つてしまつて居る頭

の中でも、榕樹の周圍を探せば水があるかも知れないと云ふ考が、ぼんやり浮んで居た。が、榕樹の生えて居る周圍を、海の水あかりで、二三度探して廻つて見たけれども、其處らは一面に、唐竹が密生して居る丈で、水らしいものは、少しも見當らない。俊寛は、その捜索に殘つて居た精力を費ひ盡して、崩れるやうに地上へ横はると、再び昏々として眠り始めた。

二度目に目が覺めたとき、それは朝だつた。疲れ萎びて居る俊寛の頰にも、朝の微風が快かつた。彼が、目を開くと、自分の身體の上に茂り重つて居る蒼々たる榕樹の梢を洩れた、清々しい朝の日光が、美しい幾條の縞となつて、自分の身體に注いで居るのを見た。遉に、暫らくの間は、淨らかな氣持がした。が、直ぐ二三日來の出來事が、悪夢のやうに歸つて來、そして烈しい渴を感じたので、彼はよろ〳〵と立ち上つた。それでも、縹渺と無邊際に擴がつて居る海を、未練にももう一度見直さずには、居られなかつた。が、群青色にはろ〳〵と續いて居る大洋の上には、信天翁の一群が、飛び交うて居る外は、何物も見えない。成經や康頼を乘せた船が、今まで視野の中に止まつて居る筈はなかつた。

彼が再び地上に身を投げたとき、身を燒くやうな渴と饑とが、烈しく身に迫つて來た。

彼は、赦免の船が來て以來、何も食つて居ないのだつた。基康は遉に彼をあはれがつて、船の中で炊いだ飯を持つて來て與れたのであるが、瞋恚の火に心を焦して居た俊寛は、その久し振の珍味にも目を與れないで、水夫の手から、それを地上に叩き落した。むろん、今でも自分の小屋まで歸れば乾飯も澤山殘つて居る。が、俊寛には一里に近い道を歩く勇氣などは、殘つて居なかつた。

烈しい渇と餓とは、彼の心を荒ませ、自殺の心を起させた。彼は、目の前の海に身を投げることを考へた。さうして、何故基康の船が居る裡に、死なゝかつたかを後悔した。基康や、あの裏切者の成經や、康頼の目前で、死んだならば少しは腹癒せにもなるのだつたと思つた。今死んでは犬死であると思つた。が、死なうと云ふ心は變らなかつた。歸洛の望を永久に斷たれながら、募して行くことは彼には堪へられなかつた。二十間ばかり向うの岸に、一つの岩があり、その下の水が、殊更に深いやうに見えた。

彼が、決心して立ち上つたとき、彼はふと水の匂ひを嗅いだ。それは、眞水の匂であつた。極度に渴して居る彼の鼻は、犬のやうに鋭くなつて居るのだつた。彼は、水の匂ひを嗅ぐと、その方角へ本能的に走り出した。唐竹の林の中を、彼は獸のやうに、潜つた。十間ばかり潜つたとき、その林が盡きて、其處から岩山が聳えて居た。

ふと、其處に、大きい岩を背後にして、此の島には、珍らしい椰子の樹が、十本ばかり生えて居るのを見た。そしてその椰子に掩はれた蒼色の岩から、一條の水が、銀の絲のやうに滴つて、それが椰子の根元で、小さい泉になつて居るのを見た。水は淺いながらに、澄み切つて、沈んで居る木の葉さへ、一々に數へられた。渴し切つて居る俊寛は、犬のやうに、つくばつて、その冷たい水を思ひ切り、ガブ〱飲んだ。それが、何と云ふ快さであつただらう。それは、彼が鹿ケ谷の山莊で飲んだ如何なる美酒にも勝つて居た。彼が、その清冽な水を味つて居る間は、淸盛に對する怨みも、島に、たゞ一人殘された悲しみも、忘れ果てたやうに淸々しい氣持だつた。彼は、蘇つたやうな氣持になつて、立ち上つた。そして、椰子の梢を見上げた。すると、梢に大きい實

が二つばかり生つて居るのを見た。俊寛は、疲勞を忘れて、猿のやうによぢ昇つた。それを叩き落すと、傍の岩で、打ち碎き、思ふさま貪り食つた。

　彼は、生れて以來、これほどの有難さと、これほどのうまさとで、飮食したことはなかつた。彼は椰子の實の汁を吸つて居ると、自分の今までの生活が夢のやうに淡く薄れて行くのを感じた。淸盛、平家の一門、丹波少將、平判官、丹左衞門尉、そんな名前や、そんな名前に對する自分の感情が、この口の中の凡てを、いな心の中の凡てを、溶かしてしまふやうな木の實の味に比べて、全く空虛なつまらないものゝやうな、氣がし始めた。

　俊寛は、口の中に殘る快い感覺を、樂みながら、泉のほとりの靑草の上に寢た。そして、過去の自分の生活のいろ〳〵な相を、心の中に想ひ出して見た。都に於けるいろ〳〵な暗鬪、陷穽、戰爭、權勢の爭奪、それから來る嫉妬、反感、憎惡、さう云ふ感情の動くまゝに、狂奔して居た自分の淺ましさが、しみ〴〵解つたやうな氣がした。船を追つて、狂奔した昨日の自分までが、餓鬼のやうにあさましい氣がした。煩惱を起す種のない、此の絶海の孤島こそ、自分に取つて、唯一の淨土ではあるまいか。康賴や、成經が傍に居たために、都の生活に對する、いな人生に對する執着が切れなかつたのだ。此の島を、假のすみかと思へばこそ、硫黄ケ岳に立つ煙さへ、焦熱地獄に續くものゝやうに、ものうく思はれたのだ。玆こそ、つひのすみかだ。あらゆる煩惱と執着とを斷つて、眞如の生活に入る道場だ。さう思ひ返すと、俊寛は生れ變つたやうな、ほがらかな氣持がした。

　ふと、寢がへりを打つと、直ぐ自分の鼻の先に、撫子に似た眞赤な花が咲いて居た。それは、

都人の彼には、名も知れない花だつた。が、その花の眞紅の花瓣が、何と云ふ美しさと、淨らかさを持つて居たことだらう。その花を、ぢつと見詰めて居ると、人間の凡てから知られないで、美しく香つて居る、かうした名も知れない花の生活と云つたやうなものが考へられた。すると、孤島の流人である自分の生活でさへ、むげに生甲斐のないものだとは思はれなくなつた。彼は、自殺しようとした自分の心の淺墓さを恥ぢた。平素は、彼の心には、今新しい力が湧いた。彼は踴躍して立ち上つた。そして、海岸へ走り出た。平素は、魂も眩むやうに、ものうく思はれた大洋が、何と美しく輝いて居たことだらう。十分昇り切つた朝の太陽の下に、紺碧の潮が、後から〳〵湧くやうに躍つて居た。海に接して居る砂濱は、金色に輝き、飛び交うて居る信天翁の翼から、銀の光を發するかと疑はれ、平素は、見ることを厭つて居た硫黄ヶ岳に立つ煙さへ、今朝は澄み渡つた朝空に、琥珀色に、優にやさしく棚曳いて居る。

俊寛は、童のやうなのびやかな心になりながら、兩手を差擴げ、童のやうに叫びながら自分の小屋へ、馳け戻つた。

三

島に來て以來一年の間、俊寛の生活は、成經や康頼との昔物語から、謀反の話をして、おしまひには、お互の境遇を嘆き合ふか、でなければ、砂丘の上などに昇りながら、浪路遙かな都を偲んで溜息を吐きながら、一日を茫然と過してしまふのであつたが、俊寛はさうした生活を根本から改めようと決心した。

彼は、努めて都のことを考へまいとした。從つて、成經や康頼のことを、考へまいとした。彼は、成經や康頼が、深切に殘して置いて呉れた狩衣や刺貫を、海中へ取り捨てた。長い生活の間には、衣類に困るのは、解り切つて居た。が、困つたら、土人のやうに木の皮を身に纏うても差支ないと考へた。

その上、三人で居た間は、肥前の國加瀬の莊にある成經の舅から平家の眼を忍んでの仕送りで、ほそ〴〵ながら、朝夕の食に事を缺かなかつた。その爲めでもあるが、三人は大宮人の習慣を持ち續けて、爲すこともなく、毎日暮して居た。俊寛は、さうした生活を改め、自分で漁りし、自分で狩りし、自分で耕すことを考へた。

彼は、さう云ふ生活に入る第一歩として、成經や康頼の記憶が、付き纏つて居る今までの小屋を燒き捨て、自分で發見したあの泉の畔に、新しい家を自分で建てることを考へた。

彼は、その日から、泉に近い山林へ入つて、樹を伐つた。彼が、持つて居る道具は、一挺の小さい鉞と二本の小太刀であつた。周圍が一尺もある樹は、伐り倒すのに、四半刻近くかゝつた。が、彼が額に汗を流しながら、その幹に鉞を打込むとき、彼は名狀しがたい壯快な氣持がする。清盛に對する怨などは、さうした瞬間、泡のやうに彼の頭から消え去つて居る。そして、その樹が鉞の幾落下に依つて、力盡き、地を搖がせて倒れるとき、俊寛の燒けた顏には、會心の微笑が浮ぶ。彼はさうして伐り倒した樹の枝を拂ひ、一本宛やつとの思ひで、泉の畔へ引いて來る。彼は、その粗な丸太を地面に立て、柱とした。小太刀や、鉞で、穴を掘ることは可なり骨が折れた。殊に、さう云ふ仕事に用ゐることで、是から先の生活に、どんなに必要であるかも知れない道具

の、破損することを恐れねばならなかつた。屋根は、唐竹で葺いた。此島の大部分を掩うて居る唐竹は、屋根を葺くのには、藁よりも、遙に秀れて居た。樹の枝を、横に幾つも並べて壁にした。そして、近所から粘(ねば)い土を見出して、その上から塗抹した。彼は、此の新しい家を建てるために、二十日ばかりも懸つた。が、彼は自分の住む家を、自分で建てることが、どんなに樂しみの仕事であるかゞ分つた。その間、清盛に對する怨や、妻子に對する戀しさが、燒くやうに胸に迫ることがある。そんなとき、彼は常よりも、二倍も三倍も烈しく働く。無論、島に夕暮が來て、日が荒寥たる硫黃ケ岳の彼方に落ち、唐竹の林に風が騷ぎ、名も知れない海鳥が鳴くときなど、灯もない小屋の中に蹲まつて居る俊寛に、身を裂くやうな寂しさが、襲つて來る。が、晝間の烈しい勞働が產む疲勞は、直ぐ彼を、さうした寂しさから救つて呉れ、そして彼に安らかな眠りを與へて呉れる。

新しい小屋が出來たとき、彼はその次ぎには、食物のことを考へた。三人で、食ひ殘した乾飯は、まだ二月三月は、俊寛一人を支へることが出來た。が、成經が居なくなつた今は、成經の舅から、仕送りがある筈はなかつた。今は、自分で食物を耕し作るより外はなかつた。俊寛は、新しい小屋から、二町ばかり隔つた處に、やゝ潤(ひら)けた土地があり、硫黃ケ岳に遠いために硫黃の氣が少しもないことを知つた。

彼は、其處を冬の間に開墾し、春が來れば麥を植ゑようと思つた。が、差し當つては漁りと獵をする外に、食料を得る道はなかつた。

彼は、堅牢な唐竹を伐つて、それに蔓を張つて弓にした。矢は、細身の唐竹を用ゐ、矢尻は銳

い魚骨を用ゐた。本土ならばかうした矢先にかゝる鳥は、一羽も居なかつただらうが、此島に住んで居る里鳩、唐鳩、赤髭、青鷺などは、俊寛の近づくのを少しも恐れなかつた。半日山や海岸を馳け廻ると、運び切れないほどの獲物があつた。

今までの彼は、狩はともかく、漁りはむげに卑しいことだと思つて居た。只管に、都會生活に憧れて居た彼は、さうしたことを眞似て見ようと云ふ氣は起らなかつた。が、現在の彼は、土人に習つて漁りをして見ようと考へた。その頃の島は、鰻を取る季節であつた。永良部鰻は、秋から冬にかけて島の海岸の暖い海水を慕つて來て、其處へ卵を産むのであつた。土人は、海水の中に、身を浸してそれを手捕りにした。俊寛も、それに習つた。最初は、幾度摑んでも摑み損ねた。土人は、あやしい言葉で、何か云ひながら、俊寛を嗤つた。が、俊寛は屈しなかつた。三日ばかりも、根よく續けて試みて居る中に、魯鈍で、一番不幸な鰻が、俊寛の手にかゝる。五日と經ち、七日と經つ裡に、どんな敏捷な鰻でも、俊寛の手から、逃れることが出來なくなつて來る。彼は、何十疋と獲た鰻のアゴに、蔓を通し、それを肩に擔ぐ。蔓が、肩に喰ひ入るやうに重い。が、自分が獲つたのであると思ふと、一疋だつて、捨てる氣はしない。小屋へ歸つてから、彼は小太刀で、腹を割き、腸を去つてから、それを日向へ乾す。半月ばかり、鰻を取つて居る裡に、小屋の周圍は乾した鰻で一杯になる。その裡に、鰻の取れる季節は、過ぎ去つてしまふ。そして、冬が來た。

冬の間、俊寛は畑を作ることに、一生懸命になつた。彼は、先づ畑の爲めに選定した彼の廣濶な土地へ、火を放つた。そして、雜草や灌木を燒き拂つた。それから、燒き殘つた木の根を掘返し、岩や小石を取去つた。彼の鉞は、今度は鍬の用をした。道具がないために、彼の仕事は捗らなか

つた。土人の所に行けば、鍬に似たものがあるのを知つて居た。が、報酬なしに土人が、何物をも貸さないことを知つて居た。が、彼の精根は、さうしたものに、凡て打ち克つた。冬の終る頃には、一町近い畑が、彼の力に依つて、拓かれた。彼は、今最も必要なことは、其處に蒔かねばならない麥の種であつた。彼は、麥の種を土人が手放さないのを知つて居た。彼は、それと交易するために、自分の持物の中で、土人の欲しがりさうなものを、いろ〳〵考へて見た。土人の欲しがりさうなものは、自分の生活にも、缺くべからざるものだつた。俊寛は、ふと鳥羽で別れるとき、妻の松の前から、形見に贈られた素絹の小袖を、今も尙そのまゝに、持つて居るのに氣が付いた。それは、現在の彼に取つて、過去の生活に對する唯一の記念物だつた。彼は、一晩考へた末、此の過去の生活に對する記念物を、現在の生活の必須品に換へることを決心した。彼は、いとしい妻の形見を、一袋の麥に換へた。そして、それを彼が自分で拓いた土地に、蒔いた。

自分で拓いた土地に、自分の手で蒔いた種の生えるのを見ることは、人間の喜びの中では、一番素晴らしいものであることを、俊寛は悟つた。ほのかな、麥の芽が磽确な地殼から、オヅ〳〵と頭を擡げるのを見たとき、俊寛は嬉し涙に咽んだ。彼は跪いて、目に見えぬ何物かに、心からの感謝を捧げたかつた。

鬼界ヶ島にも春は廻つて來る。島の周圍の海が、薄紫に輝き始める。そして、全島には、椿の花が一面に咲く。信天翁が、一日一日多くなつて、硫黃ヶ岳の中腹などには、雪が降つたやうに、集つて居る。

生れて初めての自然生活は、俊寛を見違へるやうな立派な體格にした。生白かつた頰は、褐色

に燒けて輝いた。去年、着續けて居た僧侶の服は、いろ〳〵のことをするのに、不便なので、思ひ切つて、それを脫ぎ捨て、思ひ切つて、皮かつらを身に纏つた。生年三十四歲。その壯年の肉體には、原始人らしい凡ての活力が現れ出した。彼は、生え伸びた髮を無雜作に蔓で束ねた。六尺豐かの身體は、鬼のやうな土人と比べてさへ、一際立ち勝つて見えた。

彼は、時々自分の顏を、水鏡で映して見る。が、その變りはてた姿を、あさましいなどと思つたことはない。むろん現在の彼には、妻子が時々思ひ出される丈で、淸盛の事などは、念頭になかつた。平家が、千里の彼方で、奢つて居ようが居まいが、そんなことは、孰らでもよかつた。それよりも彼は、自分が植ゑ付けた麥が、成長するのが、一日千秋の思で待たれた。

麥の畑に生ふる雜草を取ることは、彼の半日の仕事として、十分だつた。が、午後からは海岸へ出て、毎日のやうに鰤を釣つた。絲は太い蔓を用ゐ、鈎は獸の骨で作つた。三四尺の大魚は、鈎を入れると同時に、無雜作に食ひ付く。それを引き上げるのが、どんなに壯快であつたゞらう。それは、魚と人間との格鬪であつた。俊寬は危く海の中へ、引きずり込まれさうになる。それを、巖角へ足をふんばつて、ぐつと持ち堪へる。魚はそのかゝつた鈎を脫さうとして、波間で白い腹をかへしながら身を悶える。さうした格鬪が、半刻近くもつゞく。その裡に、魚の力が弱つて來る。それでも尙、身體を烈しく捻ぢ曲げながら、水面に引き上げられる。

此の豪快な鰤釣が、此頃の俊寬に取つては、仕事でもあり、娛樂でもあつた。四尺を越す大魚を三四匹繫いで、砂の上を小屋まで引きずつて歸るのは苦しい仕事であつた。が、それを炙ると、新鮮な肉からは、香ばしい匂が立ち、俊寬の健啖な食慾を、いやが上にも刺戟する。

彼は、毎日のやうに、近所の海角に出て、鰤を釣つた。彼は、その魚から油を取つて、灯火の油にしようと考へたのである。

鰤は、群を成して、島の周圍を廻つて居た。俊寛は、その群を追うて、自分の小屋から、一里近くも遠方へ出ることもあつた。

その日も、俊寛は、鰤を釣るために、硫黄ヶ岳の直ぐ麓の海岸まで行つた。其處からは土人の部落が、半里とも隔つて、居なかつた。土人達は、本土の人間を恐れ嫌つた。三人で居たときは、土人達は遠方から三人の姿を見ると、避けた。俊寛一人になつてからは、恐れはしなかつた。が、一種氣味の惡いもののやうに、決して近づいては來なかつた。俊寛も、なるべく土人と交渉することを避けた。土人の部落へは、出來る丈近寄らないやうにした。が、その日は、近所の海岸には、鰤の姿が見えないため、それを探しながら、到頭、土人の部落近くまで來てしまつた。

彼の鈎に、そこの海岸で、今まで上つた事のないやうな大魚がかゝつた。それは、鰤としても珍らしい五尺を越える大魚だつた。彼は、その巖角で、一刻近くも、それを釣り上げるために、奮闘した。彼は魚が逸しようとするときには、それに逆はないやうに、手の中の蔓を延ばした。もう延ばすべき蔓が、無くなると、蔓は緊張して、水を切りながらキイキイ鳴つた。

彼は、魚が頭を自分の方へ向けたと知ると、その機を逸しないで、蔓を手早く手許へ繰り寄せる。一間ばかりの水底まで來た魚は、奇怪な姿を見せながら、狂ひ廻る。が、水際までは決して上らない。そして、俊寛の手が、少しでも緩むと矢のやうに、沖へ逸走する。彼は蔓を延ばしたり、緩めたりすることに依つて、水中の魚を疲らせようとする。半裸體のまゝ巖頭に立つて、活

動する俊寛の姿は目ざましいものであつた。

到頭、俊寛は、その五尺を越ゆる大魚を征服してしまふ。巖の上に釣り上げられた後も、尙跳躍して海に入らうとする魚の頭を、俊寛は傍の大石で、一打ちする。魚は尾や鰭を顫はせながら、死んでしまふ。俊寛は、その二十貫を越える大魚の腹に、足をかけながら、初めて會心の微笑を洩す。

その時俊寛は、ふと人の氣勢(けはひ)を感じた。魚を釣るために、夢中になつて居た俊寛は、氣が付いて周圍を見廻した。見ると、何時の間に近寄つたのだらう、一人の土人の少女が、十間ばかりの後方に立ちながら、俊寛の姿をぢつと見詰めて居るのだつた。恐らく、俊寛の勇ましい活躍を先刻から見て居たのだらう。

年は、十六七であつたらう。が、背丈はすく〱と延びて、都の少女などには、見られないやうな高さに達して居た。腰の周圍に、木の皮を纒つた丈で、よく發達した胸部を惜し氣もなく見せて居た。髮は梳(くしけづ)らず、蓬草をさねかづらにして居た。色は、黑かつたが、瞳が黑く人なつこく光つて居た。

長い間、女性と接したことのない俊寛は、この少女を一目見ると、自分の裸體が、氣恥しくなつて、思はず顏が赤くなつた。が、相手が少しの猜疑もなく、無邪氣に自分を凝視して居るのを見ると、俊寛はそれに答へるやうに、輕い微笑を見せずには居られなかつた。少女は、微笑はしなかつたが、その物珍らしげに刮(みは)つて居る眼に、好意を示す表情が動いたことは確かだつた。俊寛は、久し振に人間から、好意のある表情を見せられたので、胸がきゆつとこみ上げて來るやう

に感じた。

彼は、再び鈎を海中に投じた。魚は、直ぐ食ひ付いた。その魚を引き上ぐる間、少女は熱心に見物して居る。そして第三番目の鈎を投じても、少女は去らない。少女の方を振向きながら時々、微笑を見せる。少女は、硫黄を採るために來たのだらう。俊寛は、少女の方を振向きながら時々、微笑を見せる。少女は、硫黄を採るために來たのだらう。が、硫黄を入れる筥を傍へ置き捨てたまゝ、何時までも俊寛が鰤を釣上ぐるのを見て居る。

到頭夕暮が來た。俊寛は、釣上げた魚を、引きずりながら、自分の小屋への道を辿る。一町ばかり歩いて、後を振返つた。少女も家路に、向はうとして立ち上つて居る。が、歩き出さないで、俊寛の方を、ぢつと見詰めて居る。

俊寛は、その日から自分の生活に、新しい希望が湧いたことに氣が付く。彼は、その翌日も、同じ場所に行つた。すると、昨日の少女が、昨日彼女が蹲まつて居たのと同じ場所に、蹲まつて居るのを見る。俊寛の胸には、湧き上るやうな欣びが、感ぜられる。今日こそ、昨日よりも、もつと大きい鰤を釣り上げて、少女に見せてやらうと思ふ。が、昨夜の間に、鰤は此海岸を離れたと見え、幾何鈎を投げても、手答がない。

彼はいら〳〵して、幾度も〳〵鈎を投げ直す。が、幾度投げ直しても、手答がない。彼は、少女が退屈して、立ち上りはしないかと思ふといら〳〵して來る。が、少女はぢつと蹲まつたまゝ身動きもしない。俊寛は、外の釣場所を探らうと思ふけれども、少女が若し隨いて來なかつたらと思ふと、此の場所を動く氣はしない。その裡に、俊寛は疲れて、鈎を水中に投じたまゝ、手を休めてしまふ。

その時に、突然彼の少女が叫び始めた。俊寛は、最初彼女が、何か自分に話しかけて居るのではないかと思つた。が、少女は天の一方を見詰めながら叫んで居る。その裡に、俊寛は、その叫び聲の中に、ある韻律があるのに氣が付く。

そして、此少女が歌をうたつて居るのだと云ふことが分る。それは朗詠や今様などとは違つて、もつと急調な烈しい調子である。が、その聽き馴れない調子、意味の全く分らない詞(ことば)の中に、此の少女の迫つた感情が、漲つて居るのを俊寛は感ぜずには居られなかつた。

俊寛は、やるせなく此少女が、いとしくなる。歌ひ終ると、少女は俊寛の方へ、その黑い瞳の一瞥を投げる。俊寛は堪らなくなつて立ち上り、少女の方へ進む。すると、今まで蹲まつて居た少女は、急に立ち上つて五六間向うへ逃げる。が、其處に立ち止まつたまゝ、それ以上は逃げようとはしない。俊寛は、微笑をしながら、手招きする。が、少女は微笑を以て、それに答へるけれども、決して近寄らない。俊寛は、じれて元の場所へ歸る。すると、少女も元の場所へ歸つて蹲まる。そして、時々思ひ出したやうに歌ひつゞける。

その翌日も、俊寛は同じ場所に行つた。その翌々日も、俊寛は同じ場所へ行つた。もう鰤を釣る目的ではなかつた。

幾日も〳〵、さうした情景が續いた後、少女は到頭その牝鹿のやうに、しなやかな身體を、俊寛の强い双腕に委してしまつた。

俊寛は、もう孤獨ではなかつた。彼の少女は、間もなく俊寛のために、從順な愛すべき妻となつた。無論、土人達は彼等の少女を拉したのを知ると、大擧して俊寛の小屋を襲つて來た。二十

人を越す大勢に對して、少しも怯む所なく、鉞を以て、立ち向つた俊寛の勇ましい姿は、少女の俊寛に對する愛情を增すのに、十分であつた。が、恐しい慘劇が始まらうとする刹那、少女はいちはやく、土人の頭らしい老人の前に身を投じた。それは、少女の父であるらしかつた。老人は、少女から何事かを聽くと、怒り罵る若者達を制して、事もなく引き上げて行つた。

その事件があつた後は、俊寛の家庭には、幸福と平和の外は、何物も襲つて來なかつた。

手助けの出來た俊寛は、自分達の生活を、いろ〳〵な點で、よくして行つた。都會生活の經驗のよい所丈を、妻に教へた。無智ではあつたが、利發な彼女は俊寛のいふことを理解して、少しづつ家庭生活を愉快にして行つた。

結婚してから、直ぐ俊寛は、妻に大和言葉を教へ始めた。三月經ち四月經つ裡には、日常の會話には、事を缺かなかつた。蔓草のさねかづらをした妻が、閑雅な都言葉を口にすることは俊寛に取つて、此上もない樂しみであつた。言葉を、一通り覺えてしまふと、俊寛は、よく妻を砂濱へ連れて行つて、字を書くことを教へた。淺香山の歌を幾度となく砂の上に書き示した。

妻は、その年の裡に、姙娠した。かうした生活をする俊寛に取つて、子供が出來ると云ふことは普通人の想像も及ばない喜びだつた。俊寛は、身重になつた妻を嘗めるやうに、劬るのであつた。翌年の春に、妻は玉のやうな男の子を產んだ。子供が出來てからの俊寛の幸福は、以前の二倍も三倍もになつた。

俊寛の畑は毎年よく實つた。彼は子供が出來たのを機會に、妻に手傳はせて、小屋を新しく建て直した。もう、どんな嵐が來ても、ビクともしないやうな堅牢なものになつた。

男の子が生れたその翌年に、今度は女の兒が生れ、その二年目に今度は又男の子が生れた。子供の成長と共に、俊寛の幸福は、限りもなく大きくなつて行つた。彼は、鬼界ヶ島に流されたことが、自分の不運であつたか、幸福であつたか分らないとまで、考へるやうになつて居た。

四

有王が、故主の俊寛を尋ねて、都からはる〴〵と、九國に下り、其處の便船を求めて、硫黃商人の船に乘り、鬼界ヶ島へ來たのは、文治二年の如月半ばの事だつた。

壽永四年に、平家の一門は悉く西海の藻屑となり、今は源家の世となつて居るのであるから、俊寛に對する重科も、自然消え果てゝ、赦免の使者が、朝廷から到來すべき筈であつたが、世は平家の餘類追討に急がはしく、その上、俊寛は過ぐる治承三年に、鬼界ヶ島にて、絶え果てたと云ふ風聞さへ傳はつて居たから、俊寛の事などは、何人の念頭にもなかつた。

たゞ、故主を慕ふ有王丈は、俊寛の最期を見屆けたく、千里の旅路に、憂き艱難を重ねて、鬼界ヶ島へ下つたのである。

島へ上陸した有王は、三日の間、島中を探し廻つた。が、それらしい人には絶えて會はなかつた。島人には、言葉不通のため、訊き合はすべき、よすがもなかつた。その裡に、便乘して來た商人船の出帆の日が迫つた。今は俊寛が生活した舊蹟でも見たいと思つて、人の住む所と否とを問はず、島中を縫ふやうに馳け廻つた。

四日目の夕暮、有王は人里遠く離れた海岸で、人聲を聞いた。それが思ひがけなくも大和言葉

であつた。有王は、林の中を潜つて、人聲のする方へ、行つた。見ると、其處は、ひろ〴〵と拓かれた畑で、二人の男女の土人が、並んで耕して居るのであつた。然も、彼等は大和言葉で、高高と打ち語つてゐるのであつた。有王は、駭きの餘りに、畑の畔に立ち竦んでしまつた。有王の姿を見たその男は、直ぐその鍬を捨てゝつか〳〵と傍へ寄つて來た。

その男は、ぢつと有王の姿を見た。有王も、ぢつとその姿を見た。その男の眉の上のほくろを見出すと、有王は

「俊寛僧都どのには、ましまさずや。」

さう叫ぶと、飛鳥のやうに、俊寛の手許に飛び縋つた。

その男は、大きく肯いた。そして、その日に焼けて、赤銅のやうに光つて居る頬を、大粒の涙がほろ〳〵と流れ落ちた。二人は涙の裡に、暫くは言葉がなかつた。

「あなあさましや。などかくは、變らせ給ふぞ。法勝寺の執行として時めき給ひし君の、かくも變らせ給ふものか。」

有王は、さう叫びながら、さめ〴〵と泣き伏した。が、最初邂逅の涙は、一緒に流したが、然しその次ぎの詠嘆には俊寛は一致しなかつた。俊寛は逞しい腕を組みながら、泣き沈む有王の姿を、不思議さうに見て居た。

彼は、有王が泣き止むのを待つて、有王の右の手を摑んで、妻を麾くと、有王をグン〳〵引張りながら、自分の小屋へ連れて歸つた。有王は、その小屋で、主に生き寫しの二人の男の子と三人の女の子を見た。俊寛は、長男の頭を擦りながら、これが徳壽丸であると云つて、有王に引き

合せた。その顔には、父らしい嬉しさが、隠し切れない微笑となつて浮んだ。
が、有王は凡てをあさましいと考へた。村上天皇の第七子具平親王六世皇孫である俊寛が、南蠻の女と契るなどは、何事であらうと考へた。彼は、主が流人になつたため、心までが畜生道に陥たのではないかと嘆き悲しんだ。
彼は、その夜、夜を徹して、俊寛に歸洛を勸めた。平家に對する謀反の第一番である丈に、鎌倉に在る右府どのが、僧都の御身の上を、決して疎かには思ふまいと云つた。
俊寛は、平家の一門が、滅んだと聞いたときには、流石に會心の微笑を洩し、妻の松の前や鶴の前が、身まかつたと云ふことを聞いたときには、涙を流したが、歸洛の勸めには、最初から首を横に振つた。有王が、涙を流しての勸說も、どうすることも、出來なかつた。
夜が明けると、それは有王の船が、出帆の日であつた。有王は、主の心に物怪が憑いたものとして歸洛の勸めを思ひ切るより外はなかつた。
俊寛は、妻と五人の子供とを連れながら、船着場まで、見送りに來た。
そこで、形見にせよと云つて、俊寛が自分で刻んだ、木像を呉れた。それは、俊寛が、彼自身の妻の像を刻んだものだつた。俊寛の歸洛を妨げるものは、彼の妻子であると思ふと、有王はその木像までが、忌はしいものに思はれたが、主の贈物をむげに斥ける譯にも行かないので、船に乘つてから捨てる心算で、何氣なくそれを受取つた。
別れるとき、俊寛は、『都に歸つたら、俊寛は治承三年に、島で果てたと云ふ風聞を決して、打ち消さないやうにして呉れ。島に生き永らへて居るやうなことを、決して云はないやうにして

呉れ。松の前か、鶴の前が生き永らへて居たら又思ふやうもあるが、今はたゞひたぶるに、俊寛を死んだものと、世の人に思はすやうにして呉れ。』そんな意味を云つた。その大和言葉が、可なり訛が烈しいので、有王は言葉通りには覺えて居られなかつた。

有王の船が出ると、俊寛及びその妻子は、暫らく海邊に立つて見送つて居たが、やがて皆は揃つて、彼等の小屋の方へ歩き始めた。五人の子供達が、父母を中に挾んで嬉々として、戯れながら歸つて行く一行を、船の上から見て居た有王は、最初はそれを獸か何かの一群のやうにあさましいと思つて居たが、その裡に何とも知れない熱い涙が、自分の頰を傳つて居るのに氣が付いた。

頸縊り上人

小原の光明院に、寂眞法師と云ふ上人が住んでゐた。何某の大納言の叔父君に當つてゐる上、學問も秀れ、戒行も拙くなかつたから、あつぱれ上人やとて、歸服し奉る僧俗も、數少くはなかつた。

その頃の習ひとて、上人も忍んで通つて居る兒が、五條あたりに在つた。眉目いと美しかつたが、志はさらに深かつた。一年、卯月の末つかた、ほとゝぎすが、鳴きしきる夕暮、上人は輿を、卯の花ほのじろうにほへる垣根のほとりに寄せて、久しく打ち絶えたる兒を訪うたことがあつた。兒は上人の顔を見ると「夏衣」と云つたまゝ、面を伏せて、とみには物も云はなかつた。上人も、鼻じろみておはしたが、そのまゝ席を立つて、歸らうとした。

兒は、あわてゝ上人を止め、

「などて物ものたまはで、歸り給ふぞ、情なし。」

と恨んだ。

上人は兒の顔をのぞいておはしたが、しばしありて、

「情なしとは、わが恨むべき言の葉ぞ。稀に問ひたるわれに、夏衣と宣ひたる、必定『止めても止まらぬ春もあるものを云はぬに來る夏衣かな』の心なるべし。かくばかり、うとんじおはする方に、などてしも止るべき。」

と云つた。

兒は、非常にかなしがつて答へた。

「存じも寄らぬことを承るものかな。『夏衣われは一重に思へども人の心に裏やあるらむ』と申す本歌の心にて久しく打ち絶えたるを恨み申せしなり。」

と云つた。

上人み氣色斜ならず、その後は志もいやまさりて、通うてゐた。

が、生者必滅老少不定の例を、目のあたりに見するやうに、この兒が今年の九月の初に急に死んでしまつた。病氣はひどい瘧疾であつた。典藥頭大江實房にも、私のつてがあつたので、診て貰うたし、もろ〳〵の加持祈禱も修し、おしまひには上人自身、肝膽を碎き、諸天諸尊を駭し、責めに責めて祈られたが、露ばかりも、効驗がなくて、九月五日と云ふに、つひに空しくなつてしまつたのである。

上人の嘆きは、世の常ではなかつた。宛ら、掌中の玉の見る〳〵露と消え、翳しの花の忽ち、嵐に吹き折られた思がして、心地生きぬべうもなかつた。

上人は、今年六十五であつた。あまりに生き永らへばこそ、かゝる悲しき思もするのだ。いとしきものを先き立てゝ、命永らへて何かはせんと思つた。法師としても僧正にこそなつてはゐないが、世の覺え、人の聞えも、限なくいみじき身であるから、もうこの上の望はない。いとしきものゝ先立ちしこそ、早く寂光淨土へ往生せよと如來の結緣したまふなるべしと思つた。

上人は、さう考へて來ると、悲しみの心の裡にも、ほの〴〵と光明が、射して來るやうな氣がして、如來の來迎とはかゝることをや云ふなるべしとさへ思つた。

上人は、いろ〳〵考へた末、三七日の間無言して、結願の日に、首を縊りて、往生せんと思ひ

企てた。最初、上人はそれを自分ひとりで、わきまへて行はんと思つたが、かくては、心變はりすることとあるべし。一定往生せんには、人にもきこえて、おのが心のいましめともせんと思つたから、ある夜ひそかに小原の僧正なる顯眞上人を訪ひまゐらせて、志のほどを打ちかたらつた。

僧正は、初はいと心得ぬ氣に、聞いておはしたが、上人の志の動しがたいのを見ると、あまたたび感嘆して、

「いみじくも思ひ立たれつるかな。さばかり、思ひ立たせたまふを、止めんも心なければ思のまゝに執り行はせたまへ。極樂に往生し給はんこと、ゆめ疑はじ。」と、勵ましてくれた。

上人は、心の裡が、秋の空のやうに、澄みわたる心地がした。煩惱の雲名殘なく晴れ、雜念の嵐跡を絶ちて、往生の朝の一日も早いことを待つて居た。

顯眞僧正は、上人の企てを誰人にも云ふつもりではなかつたが、古しへにも後世にも、ためし稀なほど、有難く尊いことだと思ふに付けても、自分一人の心裡に、隱してゐることが、勿體ないやうに思はれ、往生の一事があつた後に、あはれさる有難き生佛ならば、姿をも拜み奉るべかりしになど、諸人の怨みつらんほども考へられたので、おのづと噂が立つやうにもてなして寺中の人達に知らしてしまつたのである。

寺中の兒、法師達の駭きは、一方でなかつた。觀音菩薩の生身のお姿が、現はれたか何かのやうにおちどよもして口々にあがめ奉らぬはなかつた。

上人は、寺中のどよめきを外に、四五日は行ひ澄ましてゐたが、齋を參らせる兒などの上人に對する容子が、とみに革まつて、宛ら本尊の大日如來の前にでも出たやうに、いみじくをろがみ

奉つたから、上人はかたはらいたくは思つたが、さてわるい氣持がするほどでもなかつた。ひとり、給仕に出る兒ばかりではない。廊下で行き交ふ役僧や、靑法師、さてはやんごとなき上人までが、あはれ末代にも、逢ひがたき人にておはすかな、いみじく思ひ立たれたりなど、向うざまに賞め奉つた。初は、いと面伏せに思はれたが、だん〳〵人が賞めて吳れるのが、當り前のやうに、考へるやうになつて居た。

が、噂は、寺內だけに止まつて居なかつた。一人二人、參詣の人が聞き知ると、霜月の野を燒く火のやうに、忽ち都の內にひろがつてしまつた。

「小原には、目のあたりに、極樂に往生し給ふと云ふめでたき上人おはします。行きて結緣し奉らばや。」

と、都の人々が、老いも若きも、男も女も數を盡くして小原へ集つて來た。小原の僧正も、佛緣を結ぶには又となき時と思つたので、一七日の間、往生講を催し、都の名僧を數多請じて、別時念佛を始めた。その騷ぎが、光明院始つて、空前絕後と云ふほど、いみじいものだつた。

都より小原まで、人垣を作りて詣うで來る人、日に千萬と云ふ數を知らず、檢非違使の廳より、一人の長に數多の放免を附けて、非違を警しめるほどになつてしまつた。

上人は自分の投げた礫が、あまりに大きい波紋を描いたので、少し空恐しう思はれたが、諸人にかくまでをろがまれることの、こよなううれしかりければ、仔細に行ひ澄して、日に五度と、數を定めて、出でゝ拜まれるのであつた。が、同法の上人の中には、出でゝ拜まれるなどと云ふことは、少しやり過ぎてゐる。いさゝか、興行めきて居て、穩當でないと云ふ非難があつたが、

さばかりにと慕ひまつりて、遙々と來る人々を、むげに返しぬる事やあるとて、續けて拜まれてゐるのであつた。

　その裡に、日が經つて、後一七日ばかりになつてしまつたが、參詣の群衆は、一日々々と數が增してゆくばかりであつた。上人は、初めは往生の心が、ほがらかに澄み渡つて、障碍の雲の立ちのぼるべき、山の端さへないやうだつたが、僧俗男女に、あがめ奉らるゝに、名聞の心は、はしなくも萠した。かくばかり、人々にあがめられて、世を過さば、いかばかり樂しくうれしかるらんと、思ふにつけても、結願の日の近づくことが、少し物憂く思はれるやうになつた。

　折しも、九月の半で毎夜のやうに、月が澄み渡つた。これまでは、いつでも見える月、今年見ないでも、來年は見られる月だと思つて、そんなに心にも、止めて見なかつたが、一七日の後には、死ぬるべき身に、これや今生の月の名殘りと思へば、白銀の光いと冴えかへりて、あはれいやまさり、彌陀の淨土の無量光の光と云へども、これにはよも過ぎずと思ふにつけても、あわただしくも去る浮世の名殘が、だん〳〵悲しまれるやうになつて來た。どうせ、老先のない身體だから、自分で往生を急ぐにも及ばなかつたのだと思つた。

　その上、一番いけないことは、兒が死んだのを悲しむ心が、だん〳〵薄くなつてゐることだつた。初めは、今日にも往生して、なつかしき面影を見むと思つて居たが、そんな心も、だん〳〵無くなつた。その上、兒が自分の言葉にも背き、念佛なども、唱へた事のないのを思ひ合はせると、必定極樂にて、廻り合はんとも定つてゐない。そんなことを考へると、いよ〳〵往生するのが、心細くなつて來た。

が、それにも拘はらず、一日々々結願の日は、近づいて來る。そして、一日々々參詣の老若男女の數が殖えて來る。

「はや四日にて、ありがたき往生の姿を見奉らんぞ。あはれ、紫の雲や虚空にたなびき渡らむ。樂の音や雲間にひゞかなむ。」

などと、上人の耳ちかく呟くものさへあつた。上人は無言の行を修しながらも、いよいよ堪らなくなつて來た。などてかくは、人々のかしましくひしめき合ふならむ。自分一人、往生の素懐を遂げようとするのに、何にも他人が、こんなにざわめかなくつてもいゝではないか。これと云ふのも、顯眞座主が、自分のそつと相談したことを公けに洩らされたのが、わるいのだと、今は心の裡でそつと、恨み奉るやうになつてゐた。

群衆は、日毎々々に增して來て、お天氣のよい日などには、坊の周圍に、蟻の甘きに付くやうに、むらがつてゐた。中には、物賣る翁さへ交じつてゐる。その人達の擧ぐる念佛の聲や讚美の聲が、上人の耳におどろ〳〵しく聞えて來る。

結願の二日前には、これまでにない群衆だつた。そのうちに、いとうつくしき女車二つまで、交つてゐた。何某の內親王のあまりに、尊くや思はれけむ、ひそかにまゐりたまふぞと聞えて、道俗どもの、のゝしり騷ぐ聲かまびすしく聞えて來た。

上人は、願を起した始には、心もほがらかにおはして、自分自身發心のことであるから、いさみはげみておはせしが、世の人に聞えて、道俗男女の、打ちさわぐまゝに、今はこれらの人々に追ひやられて、無理矢理に首を縊らされるやうに考へられて來て、心が鉛のやうに重くなつてゐ

るのである。

結願の日が、二日三日と迫るまゝに、上人はます〳〵悩みもだえて來た。兒に對する追慕の心などは、自分の悩のために、もうとつくに忘れてしまつた。とにかく、今しばし生き永らへて、何うにでもならう。何か生き永らへる方法はないかしらんと考へた。天變地妖などの出でよかし、畿内中國などに、いみじき謀反人の起れよかし、都に大火事が起らないかしらん。この坊も、潰れるやうな大地震もふるへかし。そんな風な大事件に、取りまぎれて、世間の人々が、自分のことを忘れて呉れゝばいゝのだがと思つたが、何うして上人の望みは叶ひさうもなかつた。世は太平が打ち續いて、時津風枝も鳴らさず、諫鼓苔深しと云つた有樣で、殊に今年は稀なる豐年である。都に鬼の出る噂もなければ、小さい彗星さへ出ない。たゞ、上人がふと考へついたことは、中宮の御懷胎だと云ふ一事である。ついこの間、それに就いて叡山や三井寺などでも、安産のお祈があつたやうである。あはれ、男皇子などの一日もはやく、産れませよかし。そのおよろこびや、そのお祝ひで、きつと勅諚に依つて、今しばらく往生を延ばせよと云ふことになるに違ない。さうなれば、堂々と公けに、晴がましく生き永らへることが出來る。道俗の尊仰を、一身に受けながら、生き永らへることが出來る。どうか、さうなつて欲しい。さう考へると、往生せんと念佛する心は、無くなつて、たゞ一心不亂に、中宮の御安産を祈つてゐた。が、いかばかり法力のおはしませばとて、まだ身ごもりて六月にならぬ中宮の、などて四五日の裡に、皇子産みまさむ。いと笑止であつたが、そんなことに氣がつかぬほど、上人は心狂しくなつてゐたのである。

その裡に、結願の日の前日になつてしまつた。上人は最初自分が死なうと思つて居た頃は、死

ぬのがそんなに恐くなかつたが、今は何萬何千と云ふ人の力が加つて、自分の肩や腰を押しながら、ひたぶるに『死ねよ。死ねよ。』と、催促されて見ると、死ぬことが恐しくなつて、目が眩み氣が遠くなるやうであつた。そんなに集つて來る人の中には上人の弟子もあり、俗緣の人もあつた。その中に、一人位は、もう少し生き永らへてこの世の名殘りを惜しめと、云つて吳れる人が、ありさうに思つてゐたが、みんな眞面目くさつて、よにも有難氣に上人を禮拜するだけで、上人に別れるのが悲しいからしばし止まれと云つて吳れる者はなかつた。上人は、げにも賴みがたきは人の心なりと、ひそかにかこちおはせども、無言の行を修したまへば、それとなく自分の心持を、口に出して云ふことさへ出來なかつた。

ただ、右大臣の賴文卿のみは、最後の命の綱と思つて賴んで居た。これは、上人の姉の子である上に、幼少のときは上人に就いて、學文をした上、人となりたまひし後も、師檀の契が深かつたから、この君こそ、きつと、自分の死ぬのを止めて吳れるに違ない。さいつ頃より、熊野へ詣うでたまへるを、一日千秋の思で、歸洛を待つて居られたが、昨日歸洛あつて、今日は小原へ來ると云ふことづてがあつたから、上人はこれを彌陀の來迎よりもありがたく心を躍らせて待つてゐた。

午の刻ばかりに、いと美しく裝ぞくして、お見えになつた。上人は、賴文卿の顏を見ると、淚が湯のやうに、ほとび出すのを、抑へることが出來なかつた。自分の淚を見ると、屹度自分の心裡を、いくらか察して吳れるに違ひないと思つて居たが、さはなくてあまたたび、禮拜された後に、

「急ぎ候かひありて、うれしくも、御最期に逢ひまつりしものかな。伯父君のお姿のかうがうしきこと、生身の觀世音もよもすぎじと覺え候ぞ。あはれかゝる貴き生佛と、緣につながること、頼文の過世いみじき果報なれ。なほこの上は、尊き往生の姿を、見奉りて觀念修業のたよりともせむ。」

と、いと涼しげに申されければ、上人今は盲龜の浮木に離るゝ心持して、苦しく惱しく思はれた。

その裡に、いよ〳〵結願の日が來た。上人は、前の夜心惱ましく、睡れなかつた。たゞ、曉頃にふとまどろみけるに、坊の外に大勢の足音よと覺えて、夥しく轟き聞えけり。あやしや誰やらむと、見給ひけるに、はや中門の中に込み入りぬ。庭上には、猛火烈々たる火の車を遣り据ゑてあつた。炎の中に、鐵の札の立てるが、おぼろげに見えけるが、無間地獄の罪人とかきたり。時に、青赤黃白黑の鬼共、大床に飛び上つて、上人を引き立てんとす。上人駭き怖れて、

「こは何處へつれ行くぞ。年頃の戒行をあはれみて、ゆるさせ給へ。」と叫んだが、會釋もなく、掻い摑んで、火の車に抛げのせ、刹那の間、空中を翔ると見て夢さめたり。その間の苦しさ喩ふべきものもなかつた。額には、あぶら汗が玉のやうに浮んでゐた。あはれ、死んで地獄に落ちる正しきしらせだと思ふと、上人の心も肝も、身に添はず、たゞ烈しく顫へるばかりであつた。よしなき往生の思を起したゝめに、却つて思ひがけぬ妄執に囚はれて地獄へ落ちるかと思ふと腸が掻きむしられるやうに悲しかつた。

その裡に、結願の朝はシラ〳〵と明けた。前の晩から大雨か大嵐かになつたら、それを口實に

一日でも延ばすつもりであつたが、晩秋の空なごりなく晴れて、西の山の端に、あを雲が、少したなびいてゐるだけであつた。

夜が明けぬ裡から、老若男女が、廣い境内に、一杯にみち〳〵て、念佛の聲を擧げてゐた。その聲が集つてゐる僧俗の耳には、いとすが〳〵しく聞えて、今にも極樂が、まのあたりに出現するやうに思はれたが、上人の耳には、夢で見た五色の鬼が、口々にのゝしり騒いでゐるやうにしか聞えなかつた。

殊に、上人が首を縊る筈になつてゐる榎木の周圍には青法師どもが、群れつどひて、聲高く讀經してゐたが、その榎木が、上人には地獄に在りと聞く、劍の樹のやうにしか見えないのであつた。

亥の刻近くなると、群衆の有様は潮が、滿ちて來るやうだつた。乘り捨てゝある轅の車さへ、數へがたいほどだつた。未明から來てゐる連中は、樹の蔭や坊の緣などで、割籠を開いてゐるものさへあつた。かれ飯を出して喰つてゐるものさへあつた。午の刻には、群衆の數が、五萬以上に達したと、役僧達が云つてゐる。坊へ落ちるお布施だけでも、大變だらうと云ふので、僧正以下おほ欣びである。雲林院の菩提講のときの群衆だつて、この半分もないだらうとは、皆の一致した見方であつた。

正午が過ぎると、群衆が少し待ちくたびれて、催促する聲が、所々に起つて來た。今は、然るべしとて法師どもが上人を促したが、上人は魂がぬけたやうに、本堂の一段高い所に坐つたきりで、返事さへしないのであつた。

所が、茲に覺正法師と云ふ同法の上人が、一人おはした。學文も、戒行も、上人と相匹敵して、何事にも並び立ちおはせしが、上人が往生の志を起してからと云ふものは、上人の噂だけが、世にかまびすしく聞えて、坊内の尊敬も一方でなく、今まで寂眞覺正と、並び呼ばれてゐたものが、一人は九天の雲よりも高く、一人は緣の下の土くづのやうに、聞えなくなつたので、心安からず思ひて、いかにもして、寂眞の往生を妨げんと、腹黑く企みておはせしが、午の刻も過ぎて、上人が捗々しくも、仕度をしないのを見ると、今こそと思つたのであらう。さりげなく云ふのには、

「これほどの義になりて、別の仔細あるまじく候へども、凡夫の心は、刹那の間に、とかくに變る習にて候へば、もし妄執も殘り、他に思召す事もあらば、仰せられよ。今は無言も詮なく候。」

と云つた。日頃、快くも思はなかつた覺正法師の言葉が、上人の胸にしみわたるやうにうれしかつた。上人は溺るゝ者が、藁を摑むやうに、その言葉にしがみ付いた。

「いしくも云ひたまひしものかな、われも思ひ立ちし時は、心も勇猛なりき。志厚かりし者の、とみに失せ候ひし時は、一日もとく〳〵臨終して、かゝるうき事も、聞かじばやなんと思ひしが、今は心もゆるみて、いそぎ死せばやとも覺えぬぞ。」

と、力なく云つた。それを聞いて居た、上人の弟子の一人が怒つた。この弟子は、年來、祕藏の弟子で、在家法師であつたから、都に住んで居たが、上人の深き志を聞いて欣びいさんで、京から來て居たが、身分がら道場では疎ぜられるので、少し不平であつたが、上人のかうした述懷を聞くと、諸人に聞えるやうに、聲高く云つた。

「ものゝ義なんどあげつらふは、定まらぬ時の事也。これほどに、のゝしり披露して、時日も定まり、結縁の人々もあつまり、往生の樣ををがまんとするに、なまこざかしき、さかしら異義の出來候こと返す返すもあるまじきことなり、御往生をさまたげんとする天魔の所爲こそ、とくとく御行水まゐらせて、いそぎたまへ。時刻延びなんず。」

上人も、かやうにのゝしられて、今はこれまでだと思つたのであらう。漸く行水をして、新しき法衣に換へて、さて、榎木の下に立つたが、手足に顫ひ出で、なよ〳〵として、ふらめくので、伴(とも)の僧が肩を押し腰をいだいてやつと榎木に近づけまゐらせたが、年は取つて居るし、木は高し、かねてしつらへてある梯子にも、上りかねたので、また腰を押し、やう〳〵定(さだめ)の枝の所までのぼらせた。老いさらぼへたる法師の、人の手に取られ、足を押され、ふるひをのゝきつゝ、梢にあがりたまふさま、極樂往生の尊き姿はなくて、閻魔の廳の罪人の、牛頭馬頭(ごづめづ)に追ひたてられ、刀山劍樹に追ひ上せらるゝに異ならず。人々最初は念佛して、いと神妙に見物してありしが、あまりにあさましかりければ、念佛の聲もうすらぎ、いと興ざめてありける。上人とみに首を縊りたまはず、何か思案して時うつりしかば、見物どよめて、

「今更怯(おく)れたまふか。」

などゝ、靑侍などの、のゝしりければ、いよ〳〵怯れたまふと見え、繩を取る手のふるひわななきて、繩の頸にかゝりたまはざるを見て、見物は口々にのゝしり始めければ、あわてたまふと見えて繩の頸にかゝらざるに足を踏みはづしければ、頸はくびれず、大地の上に、地ひゞき立てて落ちたまうた。

見物どよめきて笑ひぬ。起き上りたまふかと見えしが打ちどころや惡かつたのだらう、そのまま息が絶えてしまつた。

見物のゝしりさわぐこと、しばらくは止まらず。

「とにも、かくにも往生はしたまひぬ。同じ死にたまふならば、などてやまともには首をくゝりたまはざる。」

などと嘲けり笑つた。

が、群衆が、嘲けりの聲のやまぬ裡、西に落ちかゝつてゐた夕日が、にはかに光明をましたかと思ふと、夕燒の雲が、みな紫に輝き始めて、虚空に、そこはかとなく妙樂がきこえて來るのだつた。すると、今まで蛙のやうに、ひしがれてゐた上人の身體から、異香が薫じほとばしつて、その匂が群衆の間に、充ち滿ち、極樂往生の證、今はかくれなければ、諸人嘲けりの心須ち消えて、稱名の聲、しばらくは、大地をふるはせて起りにけり。

上人の臨終の不始末で、面目を失ひ、蒼くなつてゐた小原の僧正は、この奇瑞を見るとこよなう有難がつて、衣の袖をかきつくろひながら「必定往生せんとして、悩み苦しみたまへるをなどてか、彌陀如來のあはれと思召さゞらん。首をくゝらんとて、えくゝりたまはざるこそ、ありがたき臨終の相なれ。」

と云つたので、並居る上人達、みな袖になみだを、ほとびらせたまうた。

註はいるまいと思ふが

大正、昭和の文壇に於て、菊池寛の盛名は文壇ばかりでなく、社會的にも大きな影響力を持つてゐた。しかし、今日、文壇も社會も仇を取り過ぎてゐる。なぜなら、今や菊池寛は過當以上に閑却されてゐるからである。

それについて、私の考へたところによると、二三の理由を擧げることが出來る。第一に、彼は偶像破壞者であつたこと。ところが、彼が一生を費して道德のために、人生のために破壞した偶像よりももつと大きなあらゆる偶像を、よりよき道德のためにでもなく、よりよき人生のためにでもなく、出鱈目に、社會に必要な秩序や道德や、その他一切のものまでメチヤ〱に戰爭が破壞してしまつた。そのために、彼の成し遂げた功績など、どこへ行つたか分らなくなつてしまつたのである。

偶像破壞者の踏ンまへてゐるものは、新らしい道德でなければならない。新らしい時代に最も正しく生きる基準となるものは、新らしい道德である。新らしい時代に最も正しく生きるために、彼は古い道德と戰端を開いた。さうして次々と偶像を破壞して行つた。と云ふことは、新らしい時代のための新らしい道德を樹立したことだ。それが彼の個人主義の道德である。

彼が盛んに文學活動をしてゐたのは、西洋人流の生き方がやつと日本人の血肉となり、智識階

級が勃興して、合理的な生活を享樂しつつあつた大正時代であつた。

戰後どこに合理的な生活に對する熾烈な要求があるか。

以上擧げたどの點から云つても、文壇も社會も、菊池寛に對して忘恩的であつたのは當然かも知れない。それに、戰後彼がパーヂになつたことも、彼を忘れさせる大きな動機になつたのであらう。

彼は日本に於る唯一のシエービヤン（バーナード・ショーの弟子）であつた。「藝術のためにだつたら、私は一行も文章を書かなかつたらう」と云ふショーの言葉を、そのまま彼は自分の信條としてゐた。人生のための文學しか彼の意中になかつた。いつか芥川龍之介と、善と美とについて論じ合つた時、彼は言下に「僕は善の方が大事だね」と云ひ切つた。

彼の小說は、どう云ふ風に生きることが正しいかと云ふ問題の提出でないものはない。そのために、六十七萬石の大主・越前少將松平忠直も、徳川家康の第一夫人築山御前も、その子の信康も、「恩讐の彼方」の姦夫・市九郎も、傾城買ひの名人と唄はれた俳優の坂田藤十郎も、博打打ちの九郎助も、鬼界ヶ島の俊寛も、みんな生死の苦しみを舐めてゐる。

その點、森鷗外の歴史小說中の人物の生き方と比較すると、菊池寛の歴史小說の特徴が明瞭になると思ふ。鷗外の人物は、その時代に、その時代の道德を道德として生きてゐる。無論、煩悶もあり、疑惑もあり、喜びもあり、悲しみもあり、激怒もあるが、飽くまでその時代の道德を是認しての煩悶であり滿足である。

ところが、菊池寛の人物は、さうでない。人物は江戸時代の人物ではあるが、それは云はば假

りの名で、精神生活は現代人と相去る遠くない。だから、誰も彼もその時代の道徳を素直に是認なんかしてゐない。もつと大切なことは、最も正しく生きるのにはどうしたらいゝかと云ふ煩悶であり、戰である。

「俊寛」を例に取れば、その時私は傍にゐたのでよく知つてゐるが、當時或新聞で「若しあなたが無人島に流されたとして、どんな本を持つて行くか。一册に限る」と云ふ往復はがきの問ひ合せがあつた。それが動機で、俊寛のことが話題になり、芥川と菊池とが同時に「平家物語」のうち、「鹿の谷の事」「新大納言の死去の事」「赦文の事」「足ずりの事」「有王が島下りの事」の數章を讀み返した。さうして二人とも、俊寛に對する「平家物語」の作者の解釋に服さなかつた。いろ〳〵自說の主張があり、間もなく相前後して二つの「俊寛」が發表されたのである。

二つの「俊寛」を讀むと、二人の文學の相違が分つて面白い。芥川の俊寛は、人生を達觀したつもりでゐるが、實はひねくれて、彼一人を置いて都へ歸つてしまつた丹波の少將、平判官に對しても、その外人生百般に對して皮肉を飛ばす哲學者になつてしまつた。

ところが、菊池の俊寛は、理性によつてすべての感情を處理し、生活の方針を定め、開墾の困難な鬼界ヶ島で畑を作り、何とかして著物を作り、戀愛して家庭を作り子供を生んで、境遇に應じた幸福な生活を築いて行くのである。

前者の場合は、芥川の俊寛觀としては傾聽に價するが、人間俊寛としては存在が稀薄でなくもない。菊池の場合は、いかにも理窟通りで、尤も千萬であるが、餘り常識通りで恐れ入る外ない。しかし作者はそんなことは顧慮せず、羞らひもせず、常識一點張りで孤獨を克服し、京都に於る

都會的生活などは完全に打ち忘れ、生活の乏しさにも馴れ、單調な島の生活に順應して、少しも煩悶したり懊惱したりしない、唯力限り働いて生きることに滿足してゐる平凡な島の人間になり切つた俊寛を他奇なく書いてゐる。そのくせ、消極的でない、否定的でない、雄々しく、自信を以つて生活してゐる、精神の安定した――いかにも俊寛の成れの果てだと頷かれるやうな、立派な、しかし平凡な、しかし完成された人格として私達の前に立ち現れて來る。

これだけの人間なら、有王が遠路を厭はず、死を賭して海を渡つて迎へに來た暖かい親切に接しても、フラ〳〵と動搖したりしず、都へ歸ることを肯んじない俊寛の言葉も信頼出來る。芥川の俊寛は、島に於る彼獨得の生活がないから、フラ〳〵と有王と一緒に都へ歸りさうだ。

菊池は、小說にはテーマ（主題）がなければならないことを主張した作家である。彼はテーマをハッキリ通すことが出來れば能事終はれりとした。その點、實に無慾であつた。しかし、彼は賢明無比な人間だつたから、或ひは「藝術はその目的の寡少に比例した犧牲によつてのみ、最も强力な效果を擧げ得るものである」ことを知つてゐたのかも知れない。兎に角、廣津和郞が、「正直爺さん」と呼んだ位、極端に無慾であつた。彼の文章に裝飾などは何もない。「首縊り上人」を讀んだ方は、言文一致體の文章の中に、突然「なり」「たり」と云ふ文章體の文章が飛び出して來るのに驚かれたらう。泉鏡花が、效果を意識して、「である」「だ」の中へ、突然「半鐘の形生けるが如し」と文章體の一句を放り込んで調子を締めるのとは類を異にしてゐるのである。彼のはゾロッペエなのだ。

彼は美などと云ふものを志したことは一度もない。だから、例へば、誰かが彼の文章をさして

「浪花節のやうな文章だ」と云つたとしても、彼は意に介しなかつたらう。その代り、彼のテーマが通らないとか、兎に角テーマに一指を染める者があつたとしたら、恐らく彼は死を賭してでも爭つただらう。

「俊寛」の場合のやうに、外の作家なら、途中で氣がさす位常識一點張りで俊寛の生活をヒタ押しに押してゐるあの「正直爺さん」のムキ一途、これが菊池寛の藝術の魅力の祕密である。「俊寛」よりももつと成功した「忠直卿行狀記」の場合、「恩讐の彼方に」の場合、激しく私達を打つて來るものは、テーマそのものではない。人生のうちに、人間のうちに、彼が發見したテーマ、それを追究して眞に迫らうとする、理性の全能力を傾けて眞に迫らうとするところに、熱が生じる、それが菊池寛のムキ一途、云ひ替へれば彼の情熱なのだ。彼のテーマ小説の非藝術性を救つてゐるものは、彼の情熱に外ならない。ボードレールが「情熱と理性とをお拂ひ箱にすることは、文學を殺すことだ」と云つてゐることを私は思ひ出す。

テーマ小説の主唱者である彼が、後に通俗小説に於て空前の大成功を納めたのは故あることだと思ふ。

菊池の書いた「文藝作品の內容的價値」、この隨筆的論文は、里見弴との論爭を引き起こしたものだが、若し機會があつたら、この論文を讀むことをお勸めしたい。彼の文學觀を知ることよりも、彼の作品の最も有力な解釋として役立つと思ふからである。

「或作品を讀んで、うまい〳〵と思ひながら、心を打たれない。外の作品を讀んで、まづいまづいと思ひながら、心を打たれる。或作品を讀んで、よく描けてゐると思ひながら、心を打たれ

ない。外の作品を讀んで、ちつとも描けてゐないと思ひながら心を打たれる。この二つの場合を、誰でも經驗してゐると思ふ。」

さう云ふ書き出しで、

「こんな場合を、どんなに說明してよいか。藝術的作品としては、前者が優つてゐること萬々であると思ひながら、さて心を動かされるのは後者であるとしたならば、後者の持つてゐるものは何であらうか。」

「ある人達は、作品には藝術的價値以外のものは存在しないと云ふかも知れない。私は、さうは思へない。或作品の中には、藝術などと云ふものとは別に、或價値が存在し得るものだと思ふのである。」

「芥川氏の（蜜柑）と云ふ小品がある。私は、あの題材を芥川氏から口頭で聞いた時、既に或感動に打たれた。」

「前述の意味で、作者が描かんとしてゐることを、立派に表現してゐる場合は、それを立派な藝術品とするに躊躇しない。さて立派な藝術品なら、それでいゝぢやないかと云ふと、私はそれでよくないと云ふのである。私は、藝術的價値以外に、所謂內容的價値を持つてゐなければならないと云ふのである。」

「文藝的作品に接する時、我々が求めてゐるものは何か。と云ふに、決して藝術的評價だけではない。我々の下す評價は何かと云ふと、決して藝術的評價だけではない。我々は、藝術的評價を下すと共に、道德的評價を下し、思想的評價を下してゐるのである。」

「藝術のみに隱れて、人生に呼び掛けない作家は、象牙の塔に隱れて銀の笛を吹いてゐるやうなものだ。」

「文藝は經國の大事、私はそんな風に考へたい。生活第一、藝術第二。」

これが、大意であるが、この隨筆的論文は、何よりも彼自身の作品の自註として津々たる興味がある。

「形」にしても、「名君」にしても、テーマ小說の見本のやうな作品で、彼の狙ひは餘りに明らかである。虛僞、虛名に對する彼の批判の聲が、極端に短い不愛想極はまる形式のうちに、聞えるやうだ。「三浦右衞門の最期」は、初め右衞門の臆病を笑つてゐるうちに、最後に近附くに從つて笑へなくなり、武士道の殘酷さ、空しさに對する作者の嘲笑が次第に聲高に聞えて來る。見事なカルカチュアを作者は淚と笑ひとで描き上げてゐる。彼は無類の讀書家であつたが、讀みの深さに於ても無類であつた。

昭和二十七年五月十二日

鎌倉

小島政二郎

昭和二十七年五月二十六日 第一刷発行
昭和三十七年七月 十 日 第十一刷発行

恩讐の彼方に
忠直卿行状記

定価★★

作者 菊池寛

発行者 岩波雄二郎
東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地

印刷者 白井知一
東京都板橋区板橋町六丁目三二八九番地

発行所 東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三
株式会社 岩波書店

株式会社三陽社印刷・永井製本

読書子に寄す

―岩波文庫発刊に際して―

岩波茂雄

真理は万人によって求められることを自ら欲し、芸術は万人によって愛されることを自ら望む。かつては民を愚昧ならしめるために学芸が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあった。今や知識と美とを特権階級の独占より奪い返すことはつねに進取的なる民衆の切実なる要求である。岩波文庫はこの要求に応じそれに励まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少数者の書斎と研究室とより解放して街頭にくまなく立たしめ民衆に伍せしめるであろう。近時大量生産予約出版の流行を見る。その広告宣伝の狂態はしばらくおくも、後代にのこすと誇称する全集がその編集に万全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻訳企図に敬虔の態度を欠かざりしか。さらに分売を許さず読者を繋縛して数十冊を強うるがごとき、はたしてその揚言する学芸解放のゆえんなりや。吾人は天下の名士の声に和してこれを推挙するに躊躇するものである。このときにあたって、岩波書店は自己の責務のいよいよ重大なるを思い、従来の方針の徹底を期するため、すでに十数年以前より志して来た計画を慎重審議この際断然実行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西にわたって文芸・哲学・社会科学・自然科学等種類のいかんを問わず、いやしくも万人の必読すべき真に古典的価値ある書をきわめて簡易なる形式において逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は予約出版の方法を排したるがゆえに、読者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選択することができる。携帯に便にして価格の低きを最主とするがゆえに、外観を顧みざるも内容に至っては厳選最も力を尽くし、従来の岩波出版物の特色をますます発揮せしめようとする。この計画たるや世間の一時の投機的なるものと異なり、永遠の事業として吾人は微力を傾倒し、あらゆる犠牲を忍んで今後永久に継続発展せしめ、もって文庫の使命を遺憾なく果たさしめることを期する。芸術を愛し知識を求むる士の自ら進んでこの挙に参加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上経済的には最も困難多きこの事業にあえて当たらんとする吾人の志を諒として、その達成のため世の読書子とのうるわしき共同を期待する。

昭和二年七月

一〇〇冊の本
——岩波文庫より——

〔選者〕 臼井吉見　大内兵衛　大塚久雄　貝塚茂樹　茅誠司　久野収　桑原武夫　武谷三男　鶴見俊輔　中野重治　中野好夫　松方三郎　丸山真男　山下肇　渡辺一夫（五十音順）

詳しくは小冊子『一〇〇冊の本』をご覧下さい。申込み次第進呈

定価は★一つ四〇円

ヴェニスの商人 ★★
吾輩は猫である 全二冊 各★★★
啄木歌集 ★★★
モンテ・クリスト伯 全七冊 各★★★
ハックルベリイフィンの冒険 全二冊 上★★ 下★★★
水滸伝 全十五冊 一—六★★ 七以下未刊
銀河鉄道の夜 他十四篇 ★★★
アルプス登攀記 全二冊 各★★★
デミアン ★★
ビーグル号航海記 全三冊 各★★★

福翁自伝 ★★★
レ・ミゼラブル 全七冊 二★★ 四★★★★ 他★★★
赤と黒 全二冊 上★★★ 下★★★★
高村光太郎詩集 ★★
荒野の呼び声 ★
世界をゆるがした十日間 全二冊 上★★★ 下★★
友情 ★
唐詩選 全三冊 上★★ 他未刊
ファウスト 全二冊各★★★★
余は如何にして基督信徒となりし乎 ★★★
ハムレット ★★
フランクリン自伝 ★★★
共産党宣言 ★
ソクラテスの弁明・クリトン ★
罪と罰 全三冊 一★★ 他★★★
富嶽百景・走れメロス 他八篇 ★★
藤村詩抄 ★★
アンデルセン自伝 ★★★

ジャン・クリストフ 全八冊 二・六・七★★ 他★★★
トニオ・クレエゲル ★
空想より科学へ ★
貧乏物語 ★★
古代への情熱 ★★
クォヴァディス 全三冊 中★★ 他★★★
武器よさらば 全二冊 各★★
真空地帯 全二冊 各★★
若きエルテルの悩み ★★
羅生門・鼻・芋粥・偸盗 ★★
萩原朔太郎詩集 ★★★
カラマーゾフの兄弟 全四冊 二・三★★★ 他★★★
ベートーヴェンの生涯 ★★
田園交響楽 ★
白秋詩抄 ★★
ロウソクの科学 ★
寺田寅彦随筆集 全五冊 各★★★
ベルツの日記 全四冊 各★★

- 茶の本 ★
- 外套・鼻 ★
- 旧約聖書 創世記 ★★
- 饗宴 ★★
- 新訂新訓 万葉集 全二冊 上★★★★ 下★★★
- 昆虫記 全二十冊 一・六★★★★ 他★★
- ユートピア ★★
- 斎藤茂吉歌集 ★★★
- どん底 ★★
- 賃労働と資本 ★
- 論語 ★★
- 平家物語 全二冊 上★★★ 下★★★
- 戦争と平和 全八冊 一・八★★★ 他★★
- 水と原生林のはざまで ★★
- レーニン 帝国主義 ★★
- 折たく柴の記 ★★★
- 桜の園 ★
- 暗夜行路 全二冊 各★★★

- 父と子 ★★★
- リンカーン演説集 ★★
- 徒然草 ★
- こゝろ ★★★
- 破戒 ★★★
- 懺悔録 全三冊 上★★★★ 他★★★
- 蘭学事始 ★
- 阿Q正伝・狂人日記 他十二篇 ★★
- にごりえ・たけくらべ ★
- 永遠平和の為に ★
- 実践論・矛盾論 ★
- 人形の家 ★★
- 或る女 全二冊 前★★★ 後★★★★
- 善の研究 ★★
- 歎異抄 ★
- タルチュフ ★
- おくのほそ道 ★★
- 静かなドン 全八冊 八★★★★ 他★★★

- 蟹工船、一九二八・三・一五 ★★
- 社会契約論 ★★
- 方法序説 ★★
- 阿部一族 他二篇 ★
- 方丈記 ★
- ボヴァリー夫人 全二冊 上★★★ 下★★★★
- 嵐が丘 全二冊 各★★★★
- 土 全二冊 各★★★
- ミル自伝 ★★★
- 息子たちと恋人たち 全四冊 各★★★
- この人を見よ ★★
- 女の一生 ★★★
- 好色五人女 ★★
- 職業としての学問 ★
- 人権宣言集 ★★★★
- 谷間のゆり 全二冊 上★★★★ 下★★★
- イーリアス 全三冊 上★★★ 他★★★★
- 文明論之概略 ★★

岩波